

日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 31
2013

タンゲアンド・エン・ハポン

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 31, enero de 2013

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン 第31号 (2013年1月)

～高山正彦氏没後35年記念特集～



(高山正彦著「タンゴ」新興音楽出版社 昭和29年)

日本タンゴ・アカデミー

TANGUEANDO EN JAPÓN

第31回 (2013年1月)

(タンゲアンド・エン・ハポン)

目次

	頁
日本タンゴ・アカデミー 2012年下期活動実績	6
N T A運営方式に関する諸問題.....齋藤富士郎	10
アカデミー行事アルバム	14
第2回N T Aミロンガパーティー.....宮本政樹	17
タンゴ・セミナーのプログラム・コメント CLASE DE TANGO (タンゴ教室)	
第79回 「ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち」	
.....コメンテーター：島崎長次郎	20
第80回 「今年聴いたCDから」	
.....コメンテーター：高場将美、西村秀人、宮本政樹、飯塚久夫	25
第78回タンゴ・セミナー補足資料 フランシスコ・ロムート楽団	
インターナショナル時代の寵児 その栄光と苦悩永田 保	29
「東京リンコン・デ・タンゴ」レポート	福川靖彦 37
第20回 「関西リンコン・デ・タンゴ」	
レポート	山本雅生 45
プログラム	47
第11回 「中部リンコン・デ・タンゴ」	
レポート	丹羽 宏 50
プログラム	55
<高山正彦氏没後35年記念特集>	
今も生きている「高山語録」	島崎長次郎 57
高山正彦氏の思い出	河内敏昭 (談) 62
高山先生のことども	岩垂 司 64
追悼 日本タンゴ界の大先達	68
高山正彦氏 略歴	69
オスヴァルド・プグリエーセとの対話	高山正彦 70
<一般記事>	
神戸発・上田・山本タンゴ写真館 (10)	
「レオポルド・フェデリコ楽団日本公演から」	上田 登・山本 雅生 71
<愛好家インタビュー>—鈴木 忠夫さん—	聞き手…西川 薫 76
タンゴ作家列伝 第2回 A.バカレーサ/C.E.フローレス/M.ロメーロ	高場将美 80
現代タンゴ群像 (1955～1990) 第2回	
クアルテート・ロス・ポルテニートス.....	西村秀人 86
1970年代タンゴ探訪 その7 (最終回) アントニオ・アグリ	吉村俊司 91
ミロンガの音楽	永井義延 96

TANGUEANDO EN JAPÓN

第31回 (2013年1月)

(タンゲアンド・エン・ハポン)

目次

	頁
タンゴの架け橋となった偉大な先達	島崎長次郎 101
タンゴ もう一つの祖国 欧州で活躍したタンゴの使節たち (補足Ⅳ) —ドイツ編 その2—	芝野史郎 105
芝野史郎さんを悼む	島崎長次郎 115
“パキータ・ベルナルド” 及びその他の1920～1930年代の 女性バンドネオン奏者たち	齋藤富士郎 118
日本のタンゴ楽団 (8〔完〕)	蟹江丈夫 124
映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様 ～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～その2	飯塚久夫 132
こんなレコード／CDを聴いています (2) 女ゴジェネチェ、イディッシュ・タンゴ、ハイレゾ音源	佐藤 進 134
全国リレー随想 (11) スエニョス楽団奮闘記	黒木皆夫 139
SAYACAのライブを聴いて	弓田綾子 143
美しい音の格闘技 Pablo Ziegler meets Tokyo Jazz Tango Ensembleを聴いて	大澤 寛 144
編集後記	145

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 31, enero de 2013

Índice

ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN De julio a diciembre de 2012	6
SOBRE LAS CUESTIONES DEL SISTEMA DE ADMINISTRACIÓN DE LA ACADEMIA	FUJIO SAITO 10
ALBUM DE LAS ACTIVIDADES DE LA ACADEMIA.....	14
SEGUNDA FIESTA EN LA MILONGA ORGANIZADA POR NTA	MASAKI MIYAMOTO 17
COMENTARIO SOBRE “CLASE DE TANGO” : Vol.79 LOS HÉROES DE LA MODA DEL TANGO EN EUROPA	COMENTARISTA : CHOJIRO SHIMAZAKI 20
COMENTARIO SOBRE “CLASE DE TANGO” : Vol.80 TEMAS IMPRESIONANTES DE 2012	COMENTARISTAS : MASAMI TAKABA, HIDETO NISHIMURA, MASAKI MIYAMOTO, HISAO IIZUKA 25
SUPLEMENTO DE DATOS DE “CLASE DE TANGO” Vol.78 FRANCISCO LOMUTO — UNA ESTRELLA DE LA ÉPOCA “INTERNACIONAL” DEL TANGO, SU GLORIA Y SU AGONÍA	COMENTARISTA : TAMOTSU NAGATA 29
“RINCÓN DE TANGO” EN TOKIO — REPORTAJE	YASUHIKO FUKUKAWA 37
“RINCÓN DE TANGO” EN EL OESTE” No.20	
REPORTAJE	MASAO YAMAMOTO 45
PROGRAMAS	47
“RINCÓN DE TANGO” EN LA REGIÓN CENTRAL No.11	
REPORTAJE	HIROSHI NIWA 50
PROGRAMAS.....	55
ARTÍCULOS ESPECIALES CONMEMORATIVOS: 35 AÑOS DEL FALLECIMIENTO DE MASAHIKO TAKAYAMA	
PALABRAS DE MASAHIKO TAKAYAMA, AUN VIVEN HOY	CHOJIRO SHIMAZAKI 57
RECUERDOS DE MASAHIKO TAKAYAMA	TOSHIAKI KAWAUCHI 62
COSAS DEL MAESTRO TAKAYAMA	TSUKASA IWADARE 64
HOMENAJE AL PRECURSOR DEL TANGO EN JAPÓN.....	68
BIOGRAFÍA DE MASAHIKO TAKAYAMA.....	69
CONVERSANDO CON OSVALDO PUGLIESE	MASAHIKO TAKAYAMA 70
DESDE KOBE : LAS FOTOS DE UEDA Y YAMAMOTO (10) LEOPOLDO FEDERICO EN JAPÓN	
.....	NOBORU UEDA Y MASAO YAMAMOTO 71
ENTREVISTA CON LOS AFIOCIONADOS: SR. TADAO SUZUKI	KAORU NISHIKAWA 76
LOS LETRISTAS DEL TANGO No.2 A.Vacarezza / C.E.Flores / M.Romero	MASAMI TAKABA 80
IMÁGENES DEL TANGO CONTEMPORANEO 1955-1990 No.2 CUARTETO LOS PORTEÑITOS	HIDETO NISHIMURA 86
REVISITANDO EL TANGO EN LOS 70 No.7 ANTONIO AGRI	SHUNJI YOSHIMURA 91
LA MÚSICA EN LAS MILONGAS	YOSHINOBU NAGAI 96

Índice

LOS GRANDES PRECURSORES - EL PUENTE DEL TANGO	CHOJIRO SHIMZAKI	101
EMBAJADORES DEL TANGO EN EUROPA Apéndice III – Alemania vol.2	FUMIO SHIBANO	105
HOMENAJE PÓSTUMO AL SR.FUMIO SHIBANO	CHOJIRO SHIMAZAKI	115
PAQUITA BERNARDO Y LAS BANDONEONISTAS DE LA DÉCADA DE LOS 20 Y 30	FUJIO SAITO	118
ORQUESTAS TÍPICAS JAPONESAS (8)	TAKEO KANIE	124
EL TANGO EN LAS PELÍCULAS No.2 : LOS ARTISTAS, LOS TEMAS, EL BAILE	HISAO IIZUKA	132
LOS TANGOS QUE ESCUCHAMOS 2 :		
GOYENECHÉ FEMENINO, TANGO EN YIDDISH, GRABACIÓN DE “HIGH-RESOLUTION”	SUSUMU SATO	134
CADENA DE ENSAYOS (11) LOS DESAFÍOS DE LA ORQUESTA “SUEÑOS”	MINAO KUROKI	139
ESCUCHANDO EL CONCIERTO DE SAYACA	AYAKO YUMITA	143
LINDA LUCHA LIBRE DE SONIDOS : PABLO ZIEGLER MEETS TOKYO JAZZ ENSEMBLE	HIROSHI OHSAWA	144
ANUNCIOS Y NOTAS DE LA REDACCIÓN		145

日本タンゴ・アカデミー 2012年下期活動実績

● タンゴ・セミナー (CLASE DE TANGO)

- ◎ 第79回セミナー：9月30日（日）、午後1時30分から東医健保会館において、島崎会長自らコメンテーターとなり、「ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち」というタイトルでフランス、ドイツ、スペイン録音（一部北米録音）のタンゴ演奏・歌についてのお話がありました。音源はすべて島崎会長が秘蔵するSPレコードで、その豊かな音質に皆、聴き惚れました。台風の接近が危惧される中でしたが、出席者は会員とビジターを合わせて41名でした。
- ◎ 第80回セミナー：12月9日（日）、午後1時30分から東医健保会館において、年末恒例の「今年聴いたCDから」というタイトルで開催されました。コメンテーターは高場 将美、西村 秀人、宮本 政樹、飯塚 久夫の4氏で、今年聴いたCDと見たDVDから、追加も含めて合計27曲の紹介がありました。参加者は会員48名、ビジター3名の合計51名でした。

● 東京リンコン・デ・タンゴ (会場：東京「原宿クリスティー」)

- ◎ 7月24日（火）：「梅雨明けはスカッとタンゴで」というキャッチフレーズで、今回のコメンテーターは佐藤 進さんのお一人でしたが「タンゴあれこれ」と云うタイトルで有名楽団や珍しい楽団の演奏を10曲紹介していただきました。今回の目玉は黒木皆夫とトリオ・スエニョスの特別演奏会で、最近の楽団は先ず取り上げないカジェシータ・ブランセンのような古典タンゴや日本とヨーロッパのタンゴをアンコールも含めて9曲演奏され、拍手大喝采でした。来場者の一人であったユリ・アスセナさんも飛び入りでアンコール曲の1つであったポエマを歌われ、これまた大喝采を浴びました。参加者は会員41名にスエニョスの島 昭彦さん（ピアノ）、村井正宏さん（バイオリン）のお二人を加えて合計43名でした。
- ◎ 9月25日（火）：今回のプログラムの第1部は東京リンコン初登場の藤木立夫さんによる幼少の頃の思い出をタンゴで綴った「心の隅の私のタンゴ小史」、第2部は福川靖彦さんによるダリエンソのあまり知られていない演奏を紹介した「ダリエンソの隠れた名演」でした。第3部の特別演奏会はバンドネオンの平田耕治さんとバイオリンの那須亜紀子さんによるデュオでしたが、2曲演奏が終わったところで飛び入りの形でNTA会員の河内敏昭さんがギター奏者として加わり、その後はアンコールも含めてトリオの演奏となり、大盛会のうちに閉会しました。参加者は招待者を加えて46名でした。
- ◎ 11月13日（火）：今回は高場将美さんと宮本政樹さんの登場で、高場さんは「タンゴのロマンティックな歌」、宮本さんは「老後は楽しくタンゴダンスで」という、それぞれユニークな切り口のプログラムで皆を楽しませてくれました。恒例となった生演奏は、元会員の峰 万里恵さんの歌（ギター伴奏：高場将美さん）が「タンゴとフォルクローレを唄う」というタイトルでタンゴを3曲とフォルクローレを1曲、それにアンコールでもう1曲、都合5曲を歌われました。峰さんは全曲ともマイクロフォンを使わずに肉声で歌われ、皆の拍手大喝采を浴びました。出席者はビジターを含めて50名でした。

● 第2回NTAミロンガ

第2回NTAミロンガが10月8日（月）に東京都千代田区一番町の「いきいきプラザ一番町・カ

スケードホール」にて13時30分から16時30分までの3時間にわたって開催されました。プログラムは小松真知子&タンゴクリスタルによる生演奏とGuillermo Boyd & 間々田佳子ペアによるダンス・デモ、それに三浦幸三さん、宮本政樹さん、齋藤富士郎さんの選曲によるCD鑑賞から構成されていました。今回は会場が広がったので、昨年のような混雑も無く、参加者一同がそれぞれにタンゴダンスとタンゴ鑑賞の両方を楽しみました。参加者は有料参加者151名+招待者11名の計162名でした。

● 関西リンコン・デ・タンゴ

第20回関西リンコン・デ・タンゴは2012年11月4日（日）13時より神戸三宮の例会場「サロン・ド・あいり」で開催されました。参加者はNTA会員11名・会員外9名の合計20名の参加でした。開会に先立ち、去る10月18日にご逝去になった芝野史郎さんの御冥福をお祈りして黙祷を捧げました。プログラム1-1は映像によるタンゴとして今回は吉澤義郎さんの提供で「LAS DEL ABASTO」を観賞しました。プログラム1-2は永田 保さんに第78回タンゴ・セミナーにおける「フランシスコ・ロムート楽団1931～1945栄光と苦悩の15年」のダイジェスト版をお願いしました。プログラム2ではゲスト・コメンテーターの大澤寛さんが「私の好きなワルツとミロンガ」というタイトルで15曲を御披露されました。

● 中部リンコン・デ・タンゴ

第11回中部リンコン・デ・タンゴは2012年11月11日（日）13時より、島崎会長を迎えて、四日市市内交流サロン「文化の諏訪駅」で開催されました。参加者はNTA会員10名、ビジター42名、計52名と盛会でした。まず、プログラムに先だてて島崎会長からのご挨拶をいただき、続いて第1部は重度視覚障害者である田中博澄氏が率いる「タンゴ・プラティーノ」の生演奏を1時間余り楽しみ、第2部のレコード・コンサートは松野初美会員の解説で「黄金時代のドイツ・タンゴ」に聴き惚れました。この日のメイン・イベントである第3部は島崎会長による「往年の名盤（SP）を訪ねて」で、1920年代から1950年代に至る名演奏14曲を会長持参のSP盤で鑑賞しました。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハボン」30号が7月に発行されました。

● 副機関誌「タンゴランディア」25号が10月に発行されました。

● 会員動静（2012年12月30日現在）

前号以降の新入会員（敬称略）：

退会者（敬称略）：芝野 史郎（逝去）、緒方 馨、勝原 良太、圓尾 かほる、上総 進次、
久保田 寿子

新入会者（敬称略）：山崎 振吾（兵庫県）、齋藤 一臣（神奈川県）、笠井 正史（東京都）、
川名 久仁子（東京都）、清宮 公一（埼玉県）、専光 しのぶ（東京都）、
堀行 麻衣子（東京都）、鶴岡 忠成（千葉県）

会員総数：194名

● 理事会・役員会

* 7月30日（火）：新入会者1名を加えて現在の会員数は193名になったとの報告がありました。その他、入出金状況、東京・中部・関西リンコン・デ・タンゴの計画、機関誌編集状況など定例の議事があり、それに続いて今回は10月8日開催予定の第2回ミロンガパーティーの実行計画を、特別に出席を依頼したミロンガ経験者の方々を交えて、討議しました。

- * 9月4日（火）：第2回NTAミロンガ・パーティに議事を絞った臨時役員会を開きました。主要議題は当日の役割分担で31項目にわたる役割について担当者を決定しました。
- * 9月25日（火）：東京リンコンに先だって役員会を開き各役員の第2回ミロンガパーティでの詳細な役割分担を決定しました。
- * 11月5日（月）：入退会者を加えて現在の会員数は197名になったとの報告がありました。その他、入出金状況、東京、関西、中部リンコン・デ・タンゴの報告と今後の予定、機関誌発行状況の報告と第2回ミロンガ・パーティーの実績報告がありました。
- * 12月9日（日）：タンゴ・セミナーの終了後、東医健保会館の2階で開催し、活動状況の簡単な報告がありました。

● 編集会議

- * 11月5日（月）：役員会に先だって16：00より編集会議を開き、タンゲアンド・エン・ハポン誌31号の編集状況とタンゴランディア誌2012年秋号の発行完了の報告がありました。

「2013年度NTA全国会員の集い」が開かれます

日 時：3月3日（日） 午前10時開場

会 場：「メルパルク東京」（会場が昨年とは変わっています。ご注意ください。）

〒105-8582 東京都港区芝公園2-5-20 TEL：03-3433-7212

（会場への地図は次頁をご覧ください）

第1部：第81回タンゴ・セミナー（クラセ・デ・タンゴ）

テーマ：タンゴ黄金時代を彩った3人の女性歌手の足跡を辿る

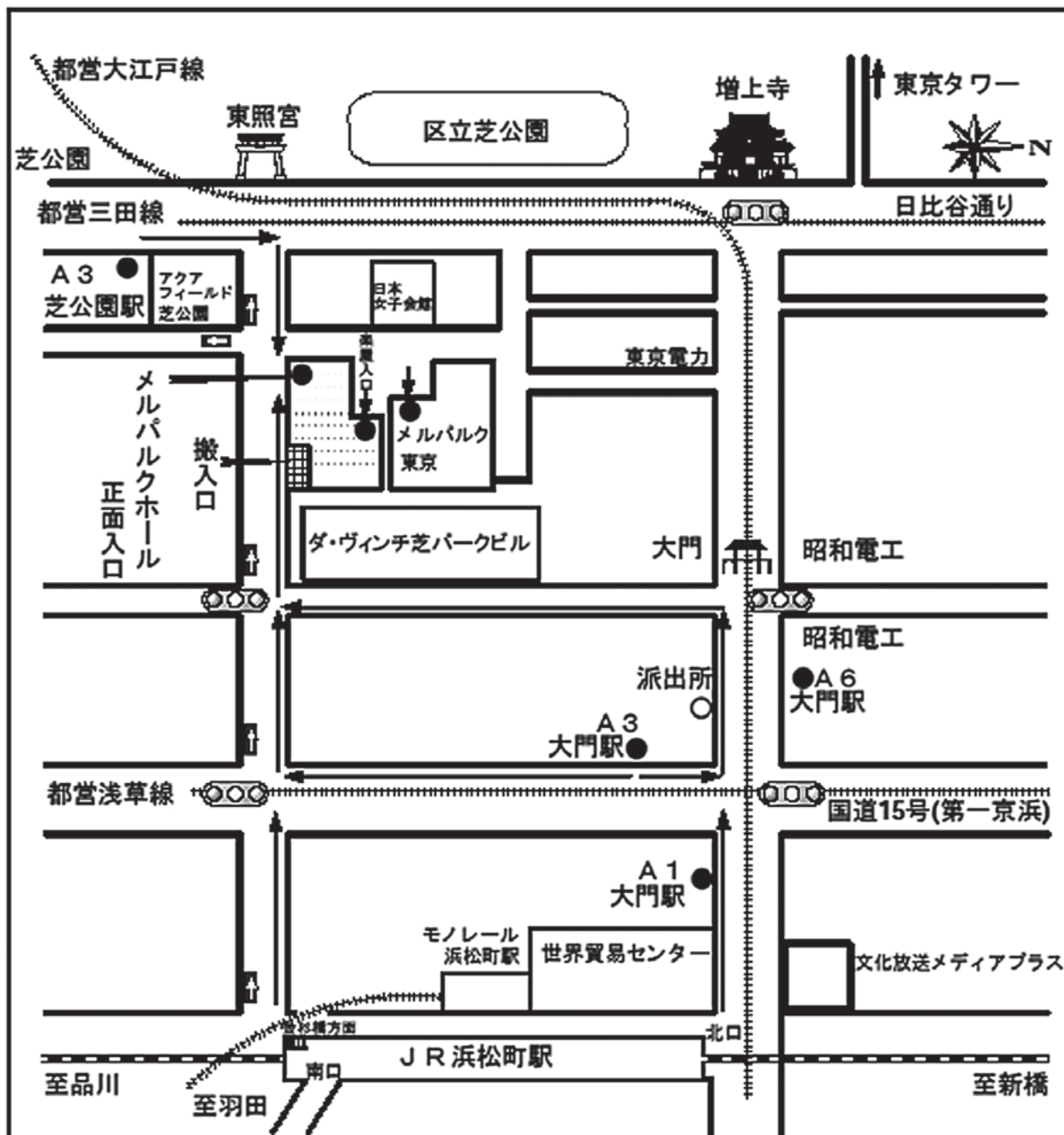
～ M. シモーネ、A. マイサニ、L. ラマルケ～

コメンテーター：齋藤 富士郎

第2部：懇親パーティー（会長挨拶、事業報告、決算・予算報告、懇談）

アトラクション：出演楽団「オルケスタ・チェ・タンゴ」

メルパルク東京 案内図



交通のご案内

- | | | |
|-----------------------|----------------|--------|
| ○ JR山手線・京浜東北線・東京モノレール | 浜松町駅 北口 | 徒歩 約8分 |
| | 浜松町駅 南口(金杉橋方面) | 徒歩 約8分 |
| ○ 都営地下鉄三田線 | 芝公園駅 A3 | 徒歩 約2分 |
| ○ 都営地下鉄浅草線・大江戸線 | 大門駅 A3・A6 | 徒歩 約4分 |

NTAの運営方式に関する諸問題

齋藤 富士郎 (NTA理事・機関誌編集担当)

2009年に発生した「NTA財政問題」以来、NTA会員の中に理事の選出や予・決算は総会議決に諮るべきであるという意見が少なくない。しかしそれらの意見は会長、副会長、その他の理事に個人的に寄せられるのが殆どで、これまでは単なる「声」レベルに留まっていた。しかしそれらの意見をいつまでも「声」レベルに留めておくことは好ましいことではなく、NTAとしてそれらの意見に対する姿勢を明確にする必要がある。

「総会開催」は言うは易しいが、実行には非常な困難が伴う。筆者はかつて通産省（現経済産業省）の管轄下にあった技術研究組合の設立・運営に携わった経験があるので、その経験に基づいて「総会議決方式」の導入に係る諸問題を洗い出してみた。

(1) 総会議決方式を導入した場合に、しなければならないこと

1. 理事選任及び重要議案は総会議決事項とする。併せて理事の定員と総会定足数を会則に盛り込む
→会則の変更が必要①→会則の変更は現行方式で行うことになる
2. 総会開催から終了までの手続きの流れ
 - 2.1 理事立候補受け付けの公示②→7月発行のTANGUEANDO EN JAPON誌に掲載する
または別途文書を郵送
 - 2.2 立候補受け付け→全会員から往復葉書で立候補(自薦及び他薦)を受け付ける③。締め切りを設ける。
これとは別に役員会推薦理事候補を用意する(役員会マター)。
 - 2.3 立候補者の整理
3. 総会議案の作成④
 - 3.1 理事候補リスト(立候補者はNTA役員会推薦者を含む)
 - 3.2 予算・決算案の作成
 - 3.3 事業案(特に必要ではない)
 - 3.4 会則の変更
4. 総会の実行
 - 4.1 総会通知⑤→往復葉書(総会に出席して議決に参加の可否、
否の場合:議案への賛否、理事候補への投票)→委任状の確保⑥
 - 4.2 総会開催(従来の懇親会に先立つタンゴ・セミナーを総会で置き換えることで会場の確保問題は解決できる)
→定足数の確認
 - 4.3 理事選任投票⑦(候補者の数が定員を越えた時には賛成票の多数順とする)、
 - 4.4 予算・決算案の承認、事業案の承認、会則変更(ある場合)の承認
 - 4.5 総会終了(法人の場合は総会の議事録を作成し、議事録署名人が署名捺印し、監督官庁に提出するが、
NTAの場合はそうした義務は生じない)
5. 理事の業務分担(会長選任を含む)は総会議決事項ではなく役員会決議事項である。
(これは一般の株式会社や財団なども同じはず。財団や組合の場合は理事選任終了時点で総会を一時休憩し、その間に新任理事による役員会を開き業務分担を決定し、総会に報告する)

(2) 理事人事を総会議決事項とすることで発生する問題

(2-1) N T A 役員の仕事負担の増大

現在、N T A 役員会はほぼ1回／2カ月のペースで開かれており、議事は会員の入退会状況の報告、入出金状況の報告、リンコンやセミナーの報告と計画、機関誌の編集状況の報告が主になっている。会場は東京リンコンの開催場所と同じ「原宿クリスティー」の一部をある時間帯だけ使わせてもらっている。

もし、総会議決方式を導入するとすると、上記の定例の議題に加えて

- a. 立候補受け付けの公示案の作成
- b. 立候補受け付けの往復はがきの作成と全会員への送付と回収
- c. 役員会推薦理事候補リストの作成
- d. 総会議案の作成
- e. 総会通知の作成と全会員への送付と委任状の回収
- f. 総会運営方法の決定
- g. その他、総会関連事項

という新たな議題の討議と作業が必要となる。当然であるが総会議決方式に移行するための会則の変更①は現行の運営方式の枠内で行うことになる。これらa. ～g.の課題は総会開会の6か月前くらいに集中処理する必要がある。日程が迫ると恐らく2～3回／月の開催頻度になり、役員、特に総務担当の役員の仕事負担が急増する恐れが出る。

こうした事情は特に珍しいものではなく、団地やマンションの管理組合や自治会では普通に行われていることである。しかし同時にそれらの管理組合や自治会では役員がその業務の遂行に忙殺されていることも事実である。また、管理組合や自治会の場合は役員全員が高々数十メートル～数百メートルの範囲に居住しているから、会合や連絡は容易である。一方、N T Aの場合は役員の居住地は半径20～30 kmの首都圏全体に分散しており、一寸した会合も一日仕事になり、頻繁な会合は無理で、会合の場所の確保も現在のようには行かなくなるであろう（「原宿クリスティー」を自分たちの「部室」のようには使えないことは明らか）。

N T A 会員の中にも、ご自身が居住する団地や管理組合の役員に選出されたためにセミナーやリンコンなどのN T Aの諸会合への出席が困難になり、場合によってはN T Aを退会せざるを得なくなることも起きている。居住者全員が狭い地域に固まっている団地やマンションの自治会や管理組合でもその状況であるから、会員が全国に分散し、役員の居住地も首都圏に分散しているN T Aでは上記a. ～g.の課題の集中実行は困難と言わざるを得ない。（外部への業務委託も考えられるが、例えばマンションの管理組合が管理会社に業務委託した場合の委託費は規模により数十～数百万円にもなる。N T Aが外部に業務委託した場合はそれほどにはならなくても、金額的に無理と考えた方がよい。）

(2-2) 固定した作業用スペースが無いこと。

団地やマンションの自治会は大抵専用の集会所を持っており、コピー機やF A X、ホワイトボードなどもあり、いつもそこに集合して会議・作業ができる。また大抵の神社には小さくても社務所があって氏子たちはそこに集まって祭りなどの行事の相談をする。N T Aにはそういう作業スペースが皆無であり、総会議決方式導入によって頻繁に発生する事務処理（③～⑥、a. ～g.）をどこでどう進めるかが大問題となる。勿論「原宿クリスティー」をそのような場所として利用することはできない。この問題の重要性は意外に認識されていない。N T A 会員の誰かの自宅を作業スペースに恒常的に提供してもらうことはあり得ない話ではないが、余程広いお宅でないと無理だろうし、そのお宅の場所が都内の中心にないと不便である。そんな都合の良い話があるだろうか？

恒常的な事務所を持ち、専従職員を抱える社団法人の場合でも総会の時期が来ると常勤の総務部長・

部員や計画部長・部員はその準備や実行に忙殺されるのが常である。こういうことは外からは中々わからない。

- (23) **事務処理費用**（コピー代、通信費、会議費など）の追加支出がふえる。馬鹿にできない。若し会議のために都内の会議室を借りるとなると夜間でも少なくとも3万円／3時間程度はかかるし、いつでも借りられるわけでもない。またそのような場所に書類などを保管することはできない。往復葉書をNTA会員全員に送ると1回につき約20,000円＋印刷・発送委託費がかかる。総会議決方式を導入すると、実際、どのくらいの増額になるかを試算しておく必要があるが、かなりの増額になりそうである。

(3) 総会議決方式をより少ない労力で進める方法は無いのか？

(3-1) 電子化の導入

もしNTA会員の全員が電子メールやインターネットを使いこなせるならば、総会運営はもっと楽になる。具体的に言うと、①、②、③、⑤、⑥はすべて電子化が可能で、すべての処理をインターネット上の仮想空間で行うことが出来る。理事選任投票⑦も電子化は可能であるが、投票の秘密性を保つためには書面による方が無難だろう。また、④の総会議案の作成もインターネット上の仮想空間で議論を進めながら実行することが可能である。即ち、電子化の導入によって役員が一か所に集まって相談したり、作業することは不要になる。もしこれが可能なら総会議決方式は今すぐにも実行できる。しかし、現在のNTA会員の中で電子メールを駆使できる人は多く見積もっても全体の70%位であるから、この案は実現不可である。

(3-2) すべての議決を書面議決で済ませる方法

これは技術的には可能である。②と③の作業は書面で可能である。また全会員に総会議案を書面で送り、賛否の回答も書面で受け付けるようにすれば、総会開催や理事選任投票の作業が無くなり役員の負担は減る。また会員からの回答がないこと＝棄権、とみなせば委任状の確保⑥も不要になる。但し、全会員からの回答の集計や統計作業は依然として残り、作業スペースがないことはかなりの負担になる。またこの方式では会員が自分の意見を表明し、議論を戦わせる場が無いという欠点がある。また、書面議決は郵送によるため一般に時間がかかる。また会員からの回答書類は一か所に集中する必要があるので、その当番に当たった役員にはかなりの負担がかかる。書面郵送のための通信費も無視できない。

(4) むすび

理事を立候補制にしても実際には役員会推薦候補の追認で終わってしまうのではないだろうか。またNTA資産の不正流用の防止についても、監査を厳密に行うのがベストであって、予・決算を総会議決事項とすることで不正流用が防げるとは思えない。粉飾決算を株主総会で見破った例は無いのである。諸々の事情を考えると総会議決方式の導入には多くの困難が伴う。NPO法人化してはどうかという意見もあるが、その場合は事業報告書と収支報告書の都道府県又は指定都市への提出が義務となり、課税もされるので、更に業務が煩雑になり、専従職員とオフィスを持たない限り現状では実現困難である。

NTA役員会としてはNTA会員の皆様には実情を理解した上で従来通りの運営方式で納得していただきたいと願っている。しかし、どうしても納得できないという方やこうすればよいはずだという考えをお持ちの方はおられるだろう。そういう方々は遠慮なくNTA役員会の方にご意見・ご提案をお寄せ願いたい。但し、その場合、口頭や電話で不特定の役員に意見を伝えることは、「伝言ゲーム」のような結果になりがちで、正しい意見が伝わらない恐れがある。それでご意見は直接NTA会長又は副会長宛に書面、FAX、電子メールなど、の方法でお寄せ願いたい。ご意見の中で特に傾聴すべきと判断したものについては機関誌に「会員の声」として掲載することも考えたい。

N T Aと同様の事情は多くの小・中学校や高等学校の同窓会も抱えている問題で、それらの同窓会も結局現在のN T Aと同じような運営方式を取っているようである。

参考のために下記にN T A会則の第3章を抜粋した。

N T A会則からの抜粋

第3章 組織および役員

(理事および理事会)

第10条 本会には5名以上12名以内の理事を置き、理事会を構成して会の業務方針を定める。

(役員)

第11条 理事会は互選により会長1名を選出する。会長は理事の中から、副会長2名以内、事務局長1名、その他必要に応じて業務担当理事を委嘱し会の業務を執行せしめる。なお副会長以下の担当業務は兼務を妨げない。

(理事会の開催)

第12条 理事会は会長がこれを招集する。理事会は会長に対し理事会を開催することを要求することが出来る。この場合会長は遅滞なく理事会を開催しなければならない。

第13条 理事会の運営規則は別に定める。

(監事)

第14条 本会に監事2名を置く。監事は各理事の業務執行が理事会の定めるところに従って否かを監査し年度末から2カ月以内に監査結果を理事会に報告する。

(その他の役員)

第15条 本会に理事会の決議を経て顧問等の役職を置くことがある。

(任期)

第16条 理事および監事の任期は2年とし再選を妨げない。

(青年部)

第17条 本会に満40歳未満の会員による「青年部」を設け、タンゴ振興に資する活動を行う。

(以上)

<リンコン・デ・タンゴ特集>

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年1月24日)ー



GYU & 夏美しいペアによるダンス・デモンストレーション

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年3月27日)ー



煙草を吸いながらフランド・エスペロを歌う
ユリ・アスセナさん



平田耕治さん(bn)と徳武孝音さん(g)
の2重奏

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年3月27日)ー



「皿回し」の杉山滋一さん。毎回ご苦労様です



会場風景

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年5月22日)ー



会場風景



踊る町田静子さんと黒木皆夫さん

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年7月24日)ー



黒木皆夫とトリオ・スエニョスの演奏
に聴き入る人々



演奏が終わりホッと一息の黒木皆夫さん

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年9月25日)ー



那須亜紀子さん、河内敏昭さん
平田耕治さんのトリオの演奏風景



トリオの演奏を熱心に聴き入る
立見の人々

ーリンコン・デ・タンゴ(2012年11月13日)ー



肉声で歌う峰さんの歌に聴き入る人々



挨拶をされる新入会員の専光しのぶさん



ビジター参加のオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダのメンバー、左から赤松丈寛(あかまつ
たけひろ)さん、酒井麻衣(さかい まい)さん、朴 慧蓮(ぱく へりょん)さん



第2回 NTAミロンガ・パーティー

宮本 政樹

昨年に引き続き日本タンゴ・アカデミー（NTA）が主催する第2回目のミロンガ・パーティーが10月8日（体育の日）に会場を変更して麴町の「いきいきプラザ一番町」のカスケード・ホールで開催された。昨年は初めてのミロンガ・パーティーという事でいろいろな面で問題点を残し、その反省の上に立って開催されたのであるが、どのようなパーティーになるか非常に注目されていた。今回のパーティーも「踊る人も聴く人も共に楽しめる集い」という主旨の島崎会長の方針の基に今回は楽団に向かってたくさんの聴く席が整然と設けられている。ダンスフロアが非常に広く、会場の雰囲気もよく、正面のガラス張りの外の景色も見える綺麗な会場である。グランドピアノが設置されている楽団のスペースも余裕があり、始まる前に会場を見渡ただけでもすばらしいミロンガ・パーティーになる予感を抱かせる思いになる。公共の施設としてはめずらしいほど立派な会場である。以下パーティーについてレポートする。（出演者の敬称略）

（参加者162名、そのうち聴く人約75名）

楽団演奏 小松真知子とタンゴ・クリスタル

小松真知子（ピアノ）小松勝（ギター／編曲）

吉田篤（ヴァイオリン）鈴木崇朗（バンドネオン）田辺和弘（コントラバス）

ダンス・デモンストレーション

間々田佳子&ギジェルモ・ボイド

司会 飯塚久夫（日本タンゴアカデミー副会長）

1 ミロンガ・パーティーのダンス

広いフロアで気持ちよさそうにゆったりと踊っている。床も踊りやすく普段からダンスの会場として使っているところであろう。会場が良いと踊っている表情まで気持ち良さそうである。常時40人ぐらい踊ってもまだスペースに余裕がある。前回に比べて若干年齢層は高くなっているが、顔なじみの人が多く来ている。今回のCD選曲者はNTA会員の3人、齋藤富士郎、三浦幸三、宮本政樹。前回のようにレココンのような選曲者のコメントは一切なし。踊る人にとっては常に踊っていたいので曲のコメントはない方がよいであろう。聴く人はプログラムを見ながら座って聴いている。選曲については、踊る人の事を考えればもう少し有名曲



を入れた方が馴染みがあって踊りやすいのか、聴く人にはレココンの目的でめずらしい曲も入れた方がいいのか思案に悩むところである。いずれにせよ1920年代後期から30年代の第一期黄金時代と1940～50年代の第二期黄金時代の演奏を中心に選曲しているのはNTA主催のパーティーとしてふさわしいと思う。今回もタンゴ・ヌエボは一曲もなかった。タンゴ・クリスタルの演奏は非常に踊りやすい。踊る人に人気のある「フェリシア」、「ガージョ・シエゴ」、「タンゲーラ」、「コラソン・デ・オロ」、「カフェ・ドミンゲス」、「パイア・ブランカ」、「オルガ」、「エル・エスキナーソ」、「パリのカナロ」など有名曲を中心にダンス用の選曲とダンスにふさわしい編曲したものを用意するところがタンゴ・クリスタルのすばらしいところである。

2.タンゴ・クリスタルの演奏会

楽団の演奏者に向かって整然として7列の椅子席、約70名ぐらいの人達が聴いている。立派なグラインドピアノと音響設備が整っている会場での立派なサロンコンサートである。横で踊っているダンスを気にしなければ充分生演奏を堪能することができる状況である。

タンゴ・クリスタルの演奏は小松真知子の華麗なるピアノのタッチと繊細な音色が織り成すバランスが絶妙にアンサンブルをまとめ上げている。それは小松勝の編曲の上手さで作上げたものである。



そして若手3人組の演奏も見事である。まずはヴァイオリンの吉田篤。クラシックで磨き上げたテクニックは非常に評価が高く、特に女性群には抜群の人気である。弱冠26歳のバンドネオンの鈴木崇朗は最近いちじるしい成長を見せ、出番も多くなっている。日本のキーチャと呼ばれたコントラバスの松永孝義の後を引き継いだ田辺和弘は演奏技術も高く、見事にこのアンサンブルの重責を担っている。さらに欲を言えば専属歌手の小島りち子の歌が加わればもっと華やかさを増すことであろう。

「パ・ケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス」で始まった演奏。NTAのレココン派のタンゴマニアにとっては有名曲ばかりで物足りないと思う人もあるであろうが、生演奏をじっくりと聴けるいい機会でもある。特に「ア・エバリスト・カリエーゴ」や「ガージョ・シエゴ」などはプグリエーセ・スタイルの見事な演奏であった。またステージで聴く演奏会に比べてこのようなサロン・コンサートもすぐ近くで聴ける臨場感があって、より気楽に、くつろいで楽しめる良さがある。いつでも退席して隣の広いロビーで飲食を楽しむ事も出来る。



3. ダンス・デモンストレーション

間々田佳子は2010年の世界選手権のアジア大会のステージ部門で優勝。NTAの会員でもあり、「タ

ンゴをここで踊る」をモットーに活動している。フェイシャル・ヨガのインストラクターでもある。ギジェルモ・ボイドはアルゼンチン本国や中南米で活躍し、日本にはすでに9回も来日しているベテランダンサーである。

1曲目はサロン・ダンスでFUERON TRES AÑOS（3年過ぎて）（演奏エクトル・バレラ、歌）アルヘンティーノ・レデスマ）すらっとした日本人離れした体型で長身の間々田佳子、それをリードするがっちりとした大柄のギジェルモ・ボイド。サロンドダンスの妙味は美しいカミナンド（歩くこと）と滑らかな動き。間々田佳子のしなやかなカミナンドにはエレガントな美しさがある。

2曲目はステージダンスでNEGRACHA（ネグラチャ）（演奏オスバルド・プグリエーセ）ステージダンスの緩と急と間のドラマチックな踊りを見せるにはやはりプグリエーセが良い。華やかな激しい動きの中にも余裕のある柔軟な身のこなし、そしてしなやかさ。間々田佳子の表情がいい。ギジェルモは間々田佳子の踊りを綺麗にみせるための裏方の黒子役に徹しているようだ。

アンコールの踊りはミロンガでMILONGA QUE PEINA CANAS（白髪のみロンガ）（演奏：ミゲール・カロー、歌：ラウル・ベロン）。一般的には長身のカップルにはミロンガのキレを出すには難しいが二人とも身体がやわらかく綺麗に踊っている。さらにワルツの優雅な踊りも観てみたかった。



今回のミロンガ・パーティーはいろいろな面で改善され非常に満足できるものであった。特に重要な課題であった「踊る人も聴く人も共に楽しめる集い」という目的の成果は一応達成できたのではないかと思う。踊る人と聴く人が同じ場所で異なった楽しみ方を共有するのは非常に難しいことである。日本タンゴ・アカデミーだからこそ実現できたことである。一般のみロンガの会では不可能に近い。それだけの組織力と運営能力を発揮させた実行力の表れであろう。願わくば椅子に座って聴いている人でも好きな曲がかかったら踊り出す人がもう少し増えてくれる事が望ましく、また踊っている人でも曲をじっくり聴きたい時は椅子に座って演奏を楽しむというように、「踊る人」も「聴く人」も「共に楽しみを共有する」と言う事はその両者の壁を取り払った状態で音楽とダンスの両方を楽しむ事が出来れば理想的であろう。アルゼンチンタンゴの普及と発展を目的とする日本タンゴ・アカデミーのイベントとしても大変意義のある催しであり、今後も是非継続して行って貰いたいものである。最後に今回のみロンガ・パーティーを実施するにあたり、事前の準備や運営面では役員及びスタッフの方々には大変なご苦労があった事であろう。深く感謝の意を述べる次第である。



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第79回タンゴ・セミナー (Clase de Tango)

2012年9月30日

ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち

コメンテーター：島崎長次郎



Orquesta Manuel Pizarro



Orquesta Típica
Bianco-"Bachicha"

◇ とき：2012, 9. 30 (日) P.m. 1. 30～

◇ ところ：信濃町 東医健保会館 (新宿区南元町4)

SPで訪ねる……

ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち



2012/9/30 NTAセミナー

コメンテーター: 島崎 長次郎

(註: G=録音年 * =推定)

◆ 新天地を求めて海を渡った使節たち

- | | |
|---|---|
| 1 ミ・ドロール(わが悩み)
MI DOLOR(C.Marcucci) | マヌエル・ピサロ楽団 I
日Col. J-1913 G:1933 |
| 2 ラ・ラジュエラ(石蹴り遊び)
LA RAYUELA(J.De Caro) | ビアンコ=バチーチャ楽団
仏Ode.165.234 G:1928 |
| 3 ヤスミーナ
YASMINA(H.Srap) | ターノ・ヘナロ楽団
日Col. J-2611 G:1929 |
| 4 チ ケ(気取屋)
CHIQUÉ(R.L.Brignolo) | オルケスタ・ティピカ・アルヘンティーノ
西Gram. AE2408 G:1929 |
| 5 ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA
LA CUMPARSITA(Matós Rodríguez) | オスカル・ローマ楽団
日Crys.1025 G:1934 |



ターノ・ヘナロ

◆ ヨーロッパを舞台に活躍した精鋭たち

- | | |
|---|---|
| 1 小雨降る径
IL PLEUT SUR LA ROUTE(Himmel) | マリオ・メルフィー楽団
日Vic. A-1380 G:1938* |
| 2 マルー
MALOU(M, Melfi) | A. J. ペンゼンティ楽団
日Col. J-2240 G:1936* |
| 3 わが悩みをこう歌う
ASI CANTA MI PENA(F.Verrecchia) | フェリーセ・ベレキア楽団
仏Path. PA 1688 G:1938* |
| 4 ロカ(狂女)
LOCA(M.Jovés) | インターナショナル・ノベルティ楽団
仏Gram. K2219 G:1924* |
| 5 アルフレド
ALFREDO(H.Canaro) | ザビエル・クガート楽団
日Vic. A-1395 G:1937* |
| 6 ジプシーの歌
ZIGEUNER, YOU HAVE STOLEN MY HEART(Grothe) 独 Elec. EG2633 G:1935* | マレク・ウエーバ楽団 |
| 7 トモ・イ・オブリーゴ(交わす盃)
TOMO Y OBLIGO(Gardel-Romero) | バルナバス・フォン・ゲッツイ楽団
日Tele. A-17 G:1934* |



マリオ・メルフィ



B. v. ゲッツイ

◆ ヨーロッパ発信のタンゴの歌い手たち

- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1 ミロンギータ(女性の愛称)
MILONGUITA (Linnig-Delfino) | ラケール・メレー
垂 DNO.10469 G:1923* |
| 2 ダンサ・マリグナ(邪悪な踊り)
DANZA MALIGNA(Randle-Frollo) | インペリオ・アルヘンティーナ
日 Col.JX-26 G:1932 |
| 3 ア・メディア・ルス(淡き光に)
A MEDIA LUZ (Lenzi-Donato) | アリナ・デ・シルバ
仏 Gram.k-5479 G:1925 |
| 4 パトテロ・センチメンタル(感傷の不良少年)
PATOTERO SENTIMENTAL (Romero-Jovés) | フランシスコ・スパベンタ
英 Col,D-2009 G:1926 |
| 5 アルマ デ パジャソ(ピエロの心)
ALMA DE PAYASO (Pérez-Saraceno) | ロベルト・マイダ
西 Regal. DK8421 G:1930 |



● ラケール・メレー



IMPERIO ARGENTINA



ALINA DE SILVA



Roberto Maida

◆ ヨーロッパ巡演でブームを支援した名士たち

- | | |
|---|--|
| 1 レイナ・マレーバ(やくざの女王)
REINA MALEVA(Cordero) | オスバルド・フレセド楽団
仏 Ode.165.155 G:1927 |
| 2 コモ・セ・ピアンタ・ラ・ビーダ(人生は逃げていく)
COMO SE PIANTA LA VIDA(C.Viván) | アスセナ・マイサニ
垂 Bru.2110 G:1930 |
| 3 マタラ(彼女を殺せ)
MATALA (E.Bonessi) | カルロス・ガルデル
垂 Ode.18814 G:1930 |
| 4 カンシオン・デル・オルビード(忘却の歌)
CANCIÓN DEL OLVIDO(Sanchez-Brancatti) | フリオ・デ・カロ楽団
仏 Bru.500045 G:1930* |
| 5 パリ
PARÍS(F.Canaro) | フランシスコ・カナロ楽団
仏 Ode.165.680(4298) G.1927 |



[資料] 概観・ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた人々

◆ 第一次世界大戦以前

- 1905 : A. ゴビ「エル・チョコクロ」を持って渡欧（日本海海戦で勝利した年）
1906 : アルゼンチン海軍“サルミエント号”日本表敬訪問
1907 : “ ” ヨーロッパ訪問で「ラ・モローチャ」の楽譜1000部持参
1912 : E. サボリード、踊り手としてパリへ
1913 : オルケスタとしてはじめてパリへ。〈メンバー〉、Bn. V. ラドッカ
Pf. C. フェレル Vi. E. モネーロス Ba. C. アイン E. ベギー

◆ 第一次世界大戦（1914~1918）以降、相次いで渡欧した人々。

- 1920 : M. ピサロ(Bn) “ターノ” ヘナロ・エスポシート(Bn)
1920 : ベニート・ビアンケ、パリで踊って話題をさらう。
1922 : “パチーチャ” J. デアンブローヒオ(Bn)
1923 : C. ガルデル, J. ラサーノとはじめて渡欧、マドリッドからトゥルーズ、
パリを経て帰国。E. ビアンコ (Vi)。
1924 : C. アイン(Ba)、ローマ法王の前で踊り、タンゴ解禁となる。
1925 : F. カナロ楽団、パリの“フロリダ”で演奏し大成功をおさめる。

◆ これに前後して渡欧、中長期にわたって現地で活躍したアーティストたち

H. ペトロッシ、M. メルフィ、O. ローマ、R. カナロ、C. フローレス、C.
カステージョ、M. オルランド、M. ロサリオ、F. アロンジ、S. ピサロ、トリ
オ・アルヘンティーノ（イルスタ、フガソ、デマレ）etc…。

◆ これらに呼応して立ち上げ、ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた現地のスターたち。

[仏蘭西系] A. J. ペセンティ、J. ルケッシ、ブロードマン=アルファロ、F. ベレキ
ィア、T. スカラ、E. ストップス、D. ペロン、G. プーランジェ, etc…。

[独 乙 系] B. フォン、ゲッツイ、M. ウエーバー、A. ルッテル、D. ベラ、P.
クロイダー、J. ジョサス、V. コメロ、B. アレマニー、etc…。

[米英系、ほか] J. ウアルテ、ドン・アルベルト、ラ・カージェ、インターナシ
ョナル・ノベルティ、エバ・ボール、G. ガウチョ、V. シルベスター、etc…。

[歌い手] C. ガメス、A. デ・シルバ、C. アウベルト、I. アルヘンティーナ、
R. マイダ、F. スパベンタ etc…。



熱弁を振う島崎会長



島崎会長が秘蔵するSPレコード



重いSPレコードは持ち運びも大変



SPレコードは取り扱いも慎重になる



新入会者も一人（中央女性）も見える
会場風景



Clase de Tango

第80回タンゴ・セミナー

2012年12月9日

今年聴いたCDから

コメンテーター：高場 将美、西村 秀人
宮本 政樹、飯塚 久夫

1. 高場 将美

CD “*Érase una vez un poeta*” ACQUA AQ321 (2011)

1. 黒い花 *Flores negras* 作曲：フランシスコ・デカロ *Francisco De Caro*
フワン・カルロス・シリリアーノ (ピアノ) *Juan Carlos Cirigliano*

CD “*Voces 3 / Poetas del tango*” ACQUA AQ230 (2009)

2. 場末のバンドネオン *Bandoneón arrabalero*
作詞：パスクワール・コントウルシ *Pascual Contursi*
ダリーオ・グランディネッティ (語り) *Dario Grandinetti*
ミゲール・ラウシュ (パーカッション) *Miguel Rausch*



CD “*Juan Carlos Cobián y su Orquesta 1926-1928*” el bandoneón EBCD132

3. アドラシオーン (讃美) *Adoración* (1928年録音)
作詞：F・フィオレンティーノ *Francisco Fiorentino* 作曲：プレイオ *Saverio Puleio*
フワン・カルロス・コピアーノ楽団 *Juan Carlos Cobián*
フランシスコ・フィオレンティーノ (うた) *Francisco Fiorentino*

Libro “*Discografía básica del tango 1905 - 2010*” Gourmet Musical Ediciones (2010)

4. ボルベアー (帰ってきて) *Volvé* (1932年録音)
作詞：ルイス・バジヨーン・エレラ *Luis Bayón Herrera* 作曲：エドガルド・ドナート *Edgardo Donato*

アドルフォ・カラベッリ楽団 *Adolfo Carabelli*
メルセーデス・シモーネ (うた) *Mercedes Simone*

5. 7月9日 *Nueve de Julio* (1916年録音)

作曲：ホセ・ルイス・パドゥーラ *José Luis Padula*

ロベルト・フィルポ楽団 *Roberto Firpo*

6. マロン・グラセ *Moñito (Marrón Glacé)* (1917年録音)

作曲：エドゥワルド・アローラス *Eduardo Arolas*

エドゥワルド・アローラス楽団 *Eduardo Arolas*

2. 西村 秀人

① サルードス *Saludos (D.Federico)*

／ *SEXTETO MERIDIONAL*

(CD “*Chapado a la antigua*”)

② 古いスモーキン *Viejo smoking (Guillermo D.Barbieri)*

／ *DAMIÁN TORRES TRÍO*

(CD “*Buena vida*”)

③ トレン・デ・ファーラ *Tren de farra (Leopoldo Thompson)*

／ *SERGIO RIVAS (CD “Pa’ que trabaje el grandote”)*

④ 私のコーヒーカップ *Mi taza de café (Alfredo Malerva-Homero Manzi)*

／ *FRANCO LUCIANI TANGO TRÍO canta MARCELO BARBERIS*

(CD “*Franco Luciani Tango Trío*”)

⑤ ラ・カウティエーバ *La cautiva (Carlos V.G.Flores)*

／ *ARIEL RODRÍGUEZ DECARÍSIMO*

(CD “*Insomnios*”)

⑥ フォゴ *Fogo (Andrés Linetzky)*

／ *ORQUESTA TÍPICA TANGO DOSCIENTOS UNO*

(CD “*Tango Doscientos Uno*”)



3. 今年聴いたCDから

宮本政樹



1. *EL BULÍN DE LA CALLE AYACUCHO* (アヤクーチョ街の部屋)

(Jy L. Servidio / Celedonio E. Flores)

RGS 1716-2 (1941年)

歌) フランシスコ・フィオレンティーノ～アニバル・トロイロ楽団

2. *NOCHES DE INVIERNO* (冬の夜)

(J.L.Padula / Enrique Cadícamo)

CTA-118 (1937年)

オルケスタ・ティピカ・ビクトル 歌) リタ・モラーレス

3. *PARA TI MADRE* (母さん、あなたのために)

(J. Mocchiolo / Vj.Clausi)

RGS 1669-2 (1932年)

歌) アダ・ファルコン～フランシスコ・カナロ楽団

4. *CARICIAS* (愛撫)

(Juan Marti/ Alfredo Bigeschi)

RGS 1646-2 (1938年)

歌) メルセデス・シモーネ

5. *VIEJA RECOVA* (哀れな老婆)

(Rodolfo Sciammarella / Enrique Cadícamo)

RGS 1699-2 (1930年)

歌) カルロス・ガルデル

6. *EN UN RINCÓN DEL CAFÉ* (喫茶店の片隅で)

(Gabriel Clausi)

EU 17052 (1929年)

ファン・マグリオ “パチョ” 楽団～歌) カルロス・ビバン

4. 今年聴いて見たCD・DVDから

飯塚 久夫

1. 別れ *EL ADIÓS* (M.P.Huergo-V.San Clemente)

Ojos de Tango

(2011 [DESVELO])

2. うるわしのクリオージャ *CRIOLLA LINDA* (V.Gorrese-B.Germino)

Francisco Lomuto

(1942 [A Bailar] Dieogon Disc89083)



3. マトン *MATÓN* (*A.Danesi*)

Roberto Firpo

(1928 [Roberto Firpo] CTA747)

4. エスクチャメ・ネグラ *ESCUCHAME NEGRA* (*J.Sarcione*)

Juan Maglio `PACHO`

(1929 [Colección 78RPM] EU17052)

5. 郷愁 *NOSTALGIAS* (*J.C.Cobián-E.Cadícamo*)

Los Virtuosos

(1936 [100ANOS DE TANGO] VBM0120)

6. ラ・ジュンバ *LA YUMBA* (*O.Pugliese*)

Oswaldo Pugliese

(1948 [lo mismo])

7. 君のいないブエノスアイレス *BUENOS AIRES SIN VOS* (*A.Weiner*)

Arrabaleras

(2012 [ARRABALERAS] Barca SLC704)

8. チケ *CHIQUÉ* (*R.L.Brignolo*)

Oswaldo Pugliese

(por1985 [Grandes Orquestas] garraCDVD018)

追加映像： *EN SUEÑOS* *Nuevo Quinteto Real* (*Club de Vino*において)



会場風景



フランシスコ・ロムート楽団

インターナショナル時代の寵児 その栄光と苦悩



永田 保 (吹田市)

はじめに

フランシスコ・ロムートがアルゼンチンタンゴ界の巨匠である事に異論を挟む人はまず居ないと思う。けれども改めて興味を持ってみると、そのビックネームの割に取り上げられる事が少なく、謎が多い事に気付かされる。なぜあれほど頻繁に演奏スタイルを変えたのか、1940年代後半突然失速してしまうのは何故なのか、本稿は結局不完全なものとならざるを得なかったが、これを機に研究、資料が出る事を期待し僭越を承知で書かせて戴く事にした次第である。

1. 生い立ち

フランシスコ・ファン・ロムートは1893年11月23日にブエノスアイレスのパルケ・パトリシオス地区に生まれた。父親ビクトル・ロムートはイタリア、カラブリア州の出身、母親ロサリーア・ナルドッチは同じくイタリアのナポリ出身。フランシスコは第2子で長男である。兄弟は9人(10人説もある)で男6人、女3人。父親ビクトルは初期のタンゴ演奏家、作曲家でバイオリンとギターを奏し、母親のロサリーア・ナルドッチはピアニストだった。フランシスコ・ロムートは両親ともに音楽家と言う良き環境の中で育った。兄弟も軍人になった1人を除いて音楽の世界で名前を残している。

フランシスコは最初、父親にバイオリンとギターの手ほどきを受け、さらに母親にピアノを習った。やがてサンタ・セシリア音楽院で楽理を学び、当時としては高度な音楽理論を身に付けた。

ロムート家は当時の移民の中では、それなりに収入があった様だが兄弟が増えて行くにつれ家計は厳しくなり1906年、13歳の時に太平洋鉄道の通信掛と言う仕事に付いている。同じ年に処女作「エル・606」を発表。これは性病の薬を意味するタイトルだったので、世に出るのが遅くなっただけ。このエピソードは少年らしい背伸びを感じさせる。

2. デビューまで

タンゴの演奏家の多くは、最初から演奏家になろうとして下積みから苦勞してのし上がっていくパターンが多いが、少なくとも1910年代のロムートには演奏家になるという積極的な姿は見られない。ロムートが落ち着いた職業はブエノスアイレスの中心街に有った楽器店のアドバイザーであった。

彼の本来の希望は作曲で生きて行く事だった様だが、当時はまだ著作物に対する考えが未熟だった為、一番良い妥協点として楽器店勤務を選んでいたのである。従って勤務しながら、作曲家の著作権益を拡大する運動を積極的に行っていた。

1916年にはペドロ・マフィア、ライムンド・ペティジョ、ベルナルド・ヘルミーノと四重奏団を組みカフェ・モントレで活動した記録が残っている。作曲も順調に行い、それらは多くの楽団のレパートリーになった。特に1918年に発表したムニェキータはサン・マルティン劇場で MARIA・ルイサ・ノ

タールによって歌われ、作曲家としてのロムートの地位を不動のものにした。同時期にフィルポ楽団のアレンジを行っていたり、コンフントでラジオ・スタメリカに出演したり、フランシスコ・カナロ楽団のピアニスト、ホセ・マルティネスと代わって演奏してみたりと、実に多角的な活動を行っている。

演奏家になる事はカナロが勧めたとも言われるが、実際はどうであったか判らない。楽器店勤務時代に得た多くの人脈からか、豪華客船カップ・ポロニオでの船内オルケスタと言う高給の仕事を得て、ロムートは友人エクトル・ケサーダとの双頭楽団を結成。楽器店を辞めて演奏家への道を踏み出した。下積みを経験せず、いきなり豪華客船でのデビューは稀有な事であった。

3. 1920年代アコスティック録音時代

ロムートの初レコーディングは1922年、ロムート＝ケサーダのピアノ・ドゥオで行われた。

録音後の航海でケサーダとは別れ、ロムート単独の楽団として活動が始まる。1923年の航海にはペドロ・マフィア、マヌエル・ピサロ、アヘシラオ・フェラサーノ、エステバン・ロバーティ、レオポルド・トンプソンと言う、豪華な顔ぶれを揃えている。

この航海から帰って本格的にオルケスタ編成でオデオンに録音を開始する。この時点で早くもロムートは指揮専門になっている。指が太くて短いので自身のピアニストとしての限界を早くから感じていたらしく、早々に楽器奏者としての道を諦めた様だ。

デビュー後しばらくはタンゴ専門だったが、すぐにジャズ・バンドの録音が始まる。おそらくはオデオン側の要求だったのではなかろうか。1920年代のロムート楽団の録音については玉石混交と言われる事も多く、特にアコスティック時代は演奏力不足の感もあるが、既に10年以上のキャリアがある他の有力楽団と同じ土俵で評価するのは酷と言う気もする。

活動はダンスホールからラジオ、録音と多岐に渡り、次第に人気を高めて行った様である。オデオンではフィルポ、カナロに次ぐ第3のオルケスタとして売り出していた感じだが、25年末に人気絶頂のオスバルド・フレセドが移籍して来て何となく影が薄くなってしまった感がある。

4. 1920年代電気録音時代

1926年11月からオデオンも電気録音を始める。ロムート楽団最初の電気録音のレコードはタンゴではなくジャズバンドのものでレコード番号7694で発売された。この時期はタンゴよりジャズ系の比率が多い。とりも直さず、それがこの時期のオデオン社の方針だったのであろう。

しかしロムートは本質的にはタンゴ演奏家であると言うスタンスのもと、折からのタンゴブームにも助けられて、一旦ジャズバンドを止め（あくまでレコード面だけだと思うが）1927年中頃からタンゴ専門となる。1926年までのレコードではタンゴとジャズ系がほぼ半々と言う状態だったが、1927年の全録音96曲中フォックストロットは9曲、マシーシ1曲、残り86曲はタンゴである。1928年は全録音84曲中、バルス3曲、タンゴ81曲と言う内訳でタンゴ専門楽団へのシフトが明確になった。

この間にロムートは楽員の固定と楽団スタイルの確立に傾注した。1927年頃のタンゴ界は活況で



有名楽団は複数の楽団を持ってマエストロが各現場を渡り歩く形が有った様である。ロムートの場合は、アルベルト・カステジャーノスをピアニストに据えた旧楽団とオスカル・ナポリターノをピアニストに据えた新楽団が1926年頃から28年初頭まで並存していた模様である。しかし実際はこれに加えてジャズバンドまで持っていたのだから、総勢ではかなりの楽員数だったと思われる。

演奏スタイルを見ると、1927年の演奏はベテラン奏者中心でかなり落ち着いたフォームである。リズム感の重厚感が電気録音の為か前年より遥かに強調され、ロムートの特徴の一つであった重厚感が現れている。

1928年最初の録音となる自作曲、ア・トーダ・ベーラは音響試験としてスプレンドィ劇場で録音されている。この責もあろうが、まるでビクター期の演奏を思わせる様な印象がある。この演奏はダニエル・アルバレス編曲によるものらしく、後年のモダンなロムート楽団の仄かな予兆と見る事もできよう。同年の演奏は全体的に小ぶりなものが多い感じだが終わりの方になると重厚感が蘇ってくる。

1929年は90曲を録音、うちタンゴは79曲、他の曲種はバルス6曲、マシーシ2曲、ランチェラ2曲、サンバ1曲。まだタンゴ中心だがわずかながらポピュラー系音楽にも再び手を出し始めている。

この年になると重厚感が完全に蘇り、テンポは堂々とゆったりし、肩幅の広い演奏が展開されている。



5. 大きな転換期となる1930、1931年

1930年の総録音数は72曲で内訳はタンゴ51曲、バルス9曲、ランチェラ7曲、パソドブレ4曲、サンバ1曲。

1930年を迎えた時点でのロムート楽団は未だ「ブエノス・アイレスの街の音楽としてのタンゴ」を追求していた様に思える。しかしラジオや、トーキー映画の登場など、タンゴを取り巻く世界は急変しつつあった。国際化の時代を迎えたのである。ロムートは、この変化にいち早く対応する。特にダニエル・アルバレスとオスカル・ナポリターノの2人がいよいよ編曲面で、その真価を現す時がやって来た。

1930年のレコードを聴くと、まず前年の演奏とはリズム感が変わった事に気付かされる。この年は名演が多く、黄金のカップリング、ヌンカ／シン・クレメンシア（レコード番号7859）が特に有名だ。この演奏の後、スタイルは次第に都会的でクールな感じに変わっていく。そして1930年最後の録音となったレコード番号7872のパンで遂にあの特徴的なエンディングが登場する事となった。

1931年6月デビュー以来世話になったオデオンを離れ8月にはビクターでデビューを果たす。大看板と言うことでビクター側は熱を入れてロムートを売り出した。

1931年にオデオンで録音された曲は10曲で、内訳はタンゴ7曲、ランチェラ、フォックス、マルチャ＝ブラシレーニャ1曲。

オデオン最末期のアレンジはビクター期初頭と基本的には変わらない。少しテンポが遅いのと、まだ演奏におぼつかない点があるが、当時としてはかなり近代的なスタイルで並み居るオルケスタをリードしていた事は間違い無い。

ビクターに移籍後、スタイルはより洗練された感覚になった。ロムートは前述の通り、専属歌手を

持たずに移籍して来たので、ビクターに所属していた民謡グループのフェルナンド・ディアスが仮の専属歌手的な位置で録音を開始した。当時同じ民謡グループだったアルベルト・アクーニャが何度かドゥオで参加している他、オデオン期からお馴染みのチャルロも何曲か歌っている。

ビクター移籍後は1931年中に23曲が録音された。内訳はタンゴ13曲、ランチェラ4曲、バルス4曲、ルンバ、パソドブレ各1曲。演奏力は充実し、ビシッと決まる独特のエンディングには自分のスタイルにたどり着き、同時に時代の追い風にも乗ったロムートの自信が感じられる。

6. 新スタイルが確立する1932、1933年

1932年の総録音数は34曲で内訳はタンゴ19曲、バルス5曲、ランチェラ5曲、フォックス・トロット3曲、パソドブレ2曲。

この年に入るとスタイルはより洗練され、新ロムートスタイルの定着を思わせる。名を残した楽団には必ず神がかった時期があるものだが、この時期のロムート楽団は正にそんな感じで、その迫力と勢いは筆舌に尽くし難い。

当期の演奏は曲の個性をよく吟味し特性に合ったアレンジを行っていて、それでいて全体的に統一感があるという理想的な状態になっている。アレンジを担当したのはマエストロのロムートのほか、ダニエル・アルバレスとオスカル・ナポリターノだったそうだが、やはりダニエル・アルバレスの比重が高かった様である。

翌33年も同じ傾向が続き、正に絶頂期の感がある。

1933年の総録音数は30曲で内訳はタンゴ16曲、ランチェラ7曲、バルス3曲、フォックス・トロット、パソドブレ、マルチャ、ルンバ各1曲。

しかし、この年8月になるとアレンジ面でも楽団をリードしていたダニエル・アルバレスが独立を希望。ロムートは後任に、まだ14歳の少年バンドネオン奏者マルティン・ダレーを選んで周囲を驚かせる。ダレーは10月に入団、12月いっぱいまでダニエル・アルバレスと並んでトップバンドネオンを勤め業務の引き継ぎを十分にさせた。

同じ年の10月にコントラバスのアルフレド・シアレタが退団し、ここでもロムートは14歳の少年コントラバス奏者をスカウトした。アムレット・グレコである。

1933年の最後にアンダ・ア・ベルラと言う曲が録音された。これはナポリターノが僚友アルバレスに送った曲の様だ。小難しい旋律だが清新なタンゴで、チャルロがわざわざ招聘されて歌っている。チャルロもこれがレコード上ではロムートとの最後の共演となった。感無量の歌の後、アルバレスがまるで空へ羽ばたくようなバリエーションを聞かせて曲は終わる。それは新生ロムート楽団の第一楽章の終わりを象徴する様な演奏であった。

7. スタイル固めの時期に入る1934、1935年

1934年の録音総数は34曲で、内訳はタンゴ17曲、ランチェラ6曲、バルス6曲、フォックス・トロット3曲、ルンバ、ルンバ=フォックス各1曲。

4月頃、歌手フェルナンド・ディアスが独立を希望し、ロムートはオーディションを開いて後任にホルヘ・オマールを採用した。

年も押し詰まると軽い感じの演奏だらけになり、ロムートスタイルの変化が始まった事を実感させ

られる。年末から1935年1月にかけて映画「エル・アルマ・デル・バンドネオン」に挿入された曲を録音しているが、この一連の録音がフェルナンド・ディアスとの一旦の別れとなった。

1935年になると、いよいよスタイル固めに入っていく。これまでの曲の個性を考えたアレンジから定型的なスタイルに曲の方を嵌め込む形に変わっていくのである。

同年の録音総数は24曲で、内訳はタンゴ13曲、バルス4曲、ランチェラ3曲、ルンバ2曲、マルチャ、フォックス・トロット各1曲。

1月28日にフェルナンド・ディアスとの録音が終わり、次の録音は5月9日で、これがホルヘ・オマルのロムート楽団でのデビュー盤となった。

8月27日に映画の主題曲、アルベルト・ソイフェル作曲のエル・カバージョ・デル・プエブロを録音するが、この辺りからテンポは落ち着き始めて、スタイルは完全に固定の方向に向かう。

8. 最盛期を迎える1936、1937年

楽員はこの辺りから41年辺りまで大編成が続く。ギャラはカナロに次いでタンゴ界2位だったし、よく昔言われた様にカナロと並んでタンゴ界の二大勢力になっていた時期だと言える。

1936年の録音総数は22曲で、内訳はタンゴ11、バルス3、フォックス・トロット3、マルチャ2、ポルカ、パソドブレ、ランチェラ各1。

この年、2つ有った著作権組織が一つにまとまり、SADAICが結成され、ロムートはその初代会長（この時は組織委員長説もある）に任命された。

演奏面ではどっしりと腰が据わって落ち着いたスタイルに安定し、決定的名演となる、ラ・クンパルシータ、マノ・ア・マノ、ノスタルヒアスと言った録音が続々登場する。

1937年には女流作曲家として名を上げてきていたサイラ・カニコバと結婚。カニコバは当時28歳、ロムートは44歳であった。

同年の録音総数は28曲で、内訳はタンゴ14、バルス4、フォックス・トロット4、パソドブレ3、コンガ、カンソネータ、ランチェラ各1。

この年にはリズムベースにやや変化が生じる。それまで重厚一本で重いだけだったリズム感に、ピアノ少し高めのリズムが入るようになった。



9. バイラブルなスタイルに移行する1938、1939年

レコードで聴く限りでは1937年11月の演奏からロムートのスタイルはバイラブルになる。

1938年の総録音数は28曲で、内訳はタンゴ15、パソドブレ4、バルス3、フォックス・トロット3、ミロンガ、マルチャ、ランチェラ各1。

この年で注目すべきはロムート初のミロンガが録音された事だ。自作曲でタイトルはケ・ティエンポ・アケル。バテリアで刻まれるハッキリしたリズム感がなんとも独特で面白い。

1939年の総録音数は31曲で、内訳はタンゴ12、フォックス・トロット4、バルス3、ミロンガ2、パソドブレ2、ミロンゴン、ブレリアス、ガト、マルチャ、カンシオン、ワンステップ、ランチェラ、

ルンバ各1。

録音した曲数は多いがタンゴが減って、実に多様な曲種を演奏している。映画に演劇にラジオにと相変わらず仕事は多岐に渡り大変に忙しかったが、この年第二次世界大戦が勃発し、ロムートが水を得た魚の如く泳ぎ回れたインターナショナルな時代は終わりを告げようとしていた。

この年、フェルナンド・ディアスがロムート楽団に戻って来た。今度は正式に専属契約を結び、4月26日録音のマリアーナ（曲種はパソドブレ）とロス・ピコネロス（曲種はブレリアス）で再デビューを果たしている。

10. 毎年ニュアンスが代わる1940～1942年

1940年代を迎えてもスタイルに大差はなく、この頃になると一定の貫禄を持って堂々たる演奏を聞かせていた。楽員はほとんど変更なかったがこの1940年に、長年ロムート楽団の屋台骨を支えて来たピアニストのオスカル・ナポリターノが退団すると言う一大事があった。後任にはアンヘル・マルティンが迎えられ、彼は1947年のスペイン旅行直前までピアニストを担当する事になる。



一般的にタンゴ楽団のピアニスト交代は大事である。それを機にスタイルが変わる事が多い。しかしロムート楽団の場合は、どこでピアニストの交代があったかさえ判らない。スタイルの変更は楽員の交代とは全く別のタイミングで起こっている。

1940年の総録音数は22曲で、内訳はタンゴ9、バルス5、フォックス・トロット2、ポルカ2、コリード2、ボレロ、ブレリアス各1。

1941年には、これまた楽団の屋台骨を支えたコントラバスのアムレット・グレコが退団し、代わってマリオ・シアレタが入団する。名手だったアムレット・グレコに比べて力量の差が目立ったのかどうか、この年の録音ではベースの位置を工夫したらしく、やたらベースが聞こえるスタイルとなった。ガンガンあおる様な感じもあるが、それでも演奏は一条乱れぬ感じであり、演奏力は相変わらずピークを維持していたと言える。

1941年の総録音数は26曲で、内訳はタンゴ13、バルス4、フォックス・トロット2、パソドブレ2、バイレポルテーニョ、コンガ、ランチェラ、ミロンガ、マルチャ各1。

1942年になるとロムート楽団は再び落ち着いた演奏に立ち戻る。この年もセンチミエント・ガウ

チョやアディオス・ムチャーチョスと言った名演を多く残している。

同年の総録音数は30曲で、内訳はタンゴ14、バルス6、パソドブレ3、ミロンガ2、ルンバ、サンバ、ガロチン、ミロンガ・カンドンベ、タンギージョ・ヒターノ各1。

ロムートがロムートらしかった、ある意味最後の年だったと思える。この年、長年ロムート楽団の歌手を務めて来たフェルナンド・ディアスとホルヘ・オマールが揃って退団を申し出た。ロムートはオーディションを開催して、後任をカルロス・ガラルセとアルベルト・リベラの2人に決定した。この2人のデビューは翌年5月となる。

11. 再び転換期となった1943年

1943年1枚目のレコードは1月28日に録音された。フェルナンド・ディアスが歌うバルス、カタリーナと、ホルヘ・オマールが歌うタンゴ、アウセンシア・グリスのカプリング。これがロムートの黄金期を支えた両歌手との最後のレコーディングとなった。ここでの演奏スタイルはそれまでに聞かれなかったパターンのピアノソロとバイオリンのピチカートを含んで多少異色であるが、リズム感はず変わらず基本的には慣れ親しんだロムート・スタイルを守っている。

2枚目のレコードは4カ月近く後の5月15日に録音されており、昨1942年にオーディションで選んだアルベルト・リベラとカルロス・ガラルセが初登場する。リズム感が変わり、ピアノが派手な装飾を入れる様になり、1930年の末に確立したモダンな感覚のスタイルを完全に離脱したのはこの瞬間であったと思う。

1943年の総録音数は26曲で、内訳はタンゴ11、バルス5、ランチェラ3、ミロンガ・カンドンベ、カンシオン、パソドブレ、ミロンガ、サンバ、マルチャ、タランテラ各1。

1939年以降の傾向としてタンゴ以外の曲種割合が多い。実際この種の曲種の人気も高かった様である。しかしこの傾向もこの年までであり翌年からロムート楽団は再びタンゴ専門に近くなっていく。この年の演奏は何かいまひとつの感が強く、ロムートが新しい落ち着きどころを探しているかの様だ。翌44年からは本当に試行錯誤に入り込んでしまう。

この年にはファン・ドミンゴ・ペロンのパーティーに出席。また再びアルゼンチン著作権協会の会長に就任。1947年までの長期に亘ってその職にあった。

12. 試行錯誤が続き低迷期に入り始める1944、1945年

1944年からは楽団カラーをガラリと変える。演目からジャズ系の曲を排除し、久方振りにタンゴ専門に戻った。ただし、例外的にマルチャを2曲録音している。このうちの1曲のマルチャがロムートにペロニスタの烙印を押してしまうのだが・・・。

演目からジャズ系の曲が消えたのは、末弟のエクトル・ロムートが同じビクターレーベルでジャズバンド、エクトル・イ・ス・ジャズを率いてレコーディングを始めた為だと思われる。1944年の総録音数は23曲で、内訳はタンゴ10、バルス6、ランチェラ3、ミロンガ2、マルチャ2。

ロムート自作のマルチャ、4・デ・フニオは前年の6月4日にペロンの統一将校団が親枢軸を唱えてラウソン大統領を追い落とすクーデターを称えた曲で、todo tangoでは「演奏家がペロン支持を表明した最初のレコード」と、されている。この曲はフランシスコ・ロムートの弟で唯一職業軍人になっていたブラス・ロムートがペロン派で、これまた弟のオスカル・ロムートがペロンの宣伝担当だ

った事から依頼されての事だったらしく、フランシスコ・ロムート自身が実際にペロニスタだったのかどうかは疑問の余地がある。しかしレコードに刻まれてしまったので、ロムート＝ペロニスタの印象は濃厚になった。

翌1945年には母親のロサリーア・ナルドッチが亡くなり、その葬儀にファン・ドミンゴ・ペロンとエバ・ドゥアルテが訪れた事から、ロムート＝ペロニスタは衆人の認めるところとなった。だいたい芸術家と政治家が寄り添って良い結果を生む事は少ない。これまたロムートの人気を下げる一因にはなったであろう。

1945年の総録音数は16曲で、内訳はタンゴ14、バルス、ミロンガ各1。

いよいよ引潮の感が強い。なかには良いものもあるが、演奏は総じて活力を失ったように聴こえる。

13. 苦悩の時代、レコード録音中断とスペイン演奏旅行1946～1948年

興行界のストライキと、その反撃の渦に巻き込まれたロムートは一旦レコード作りも止めざるを得ない状態になる。1946年には僅か4曲（タンゴとミロンガ2曲ずつ）を録音したに止まった。この時点での楽員は前年と余り変わらないが歌手のカルロス・ガラルセは辞め、エドワルド・インダに代わっている。アルベルト・リベラは残った。

翌1947年には国外に活を求めてスペインに演奏旅行に出かける。バンドネオン陣は総入れ替えてバイオリンもそれに近いが1926年入団のカルロス・タベルナが居て、コントラバスのベラスケスは1943年入団、バテリアのデシオ・サルバドル・シロッタは1925年の入団と新旧取り混ぜての訪欧となった。歌手はアルベルト・リベラと女性歌手チヨラ・ルーナが帯同している。

スペインではマドリーやバルセロナで演奏活動を行う。現地での写真もあるが、ロムートは一気に老けた感じがする。この数年の苦労は筆舌に尽くし難いものだったのだろう。この時期は海外や地方周りでなんとか凌いでいたと言うのが本当のところではないかと思う。

14. 復活も束の間、突然の最期を迎える1949、1950年

1949年にはブラジルに演奏旅行にでかけ、帰国して漸くビクターでレコード作りが再開された。

この時の楽員はなかなか優秀なメンバーを集めている。録音を聞くと独特のエンディングも無くなってしまい、往年のロムートらしさは影を潜めるが、1945年頃と比べるとリズムの重厚感は戻って来ており、最悪の時期は脱した感がある。1949年は4曲、1950年は6曲と往年の録音量が嘘の様なささやかさだが曲種は全てタンゴであり救われる。



アレンジは前述の様に昔のロムートらしさは感じられないが、1950年に録音されたカチャドーラのみは、昔のアレンジを流用したのか往年の演奏を彷彿とさせる。

ラジオにも定期出演し、かつてのペースを取り戻しかけていたロムートだが、1950年12月23日、タルタギータスにあった別荘で、突然死により世を去ってしまった。インターナショナル時代の寵児だったロムートにとって、その時代が余りにも短かった事は残念な事だったが、時代の香りをいち早く察知して、1950年にはそれなりの演奏をしていた。最後まで柔軟性を忘れなかったアタマの柔らかいマエストロだったと言えるだろう。

「東京リンコン・デ・タンゴ」



レポート：福川 靖彦

東京「原宿クリスティー」にて

(『東京リンコン・デ・タンゴ』報告)は本号からタンゴランディアからタンゲアンド・エン・ハボンに移設しました(編集部)

第64回 2012年5月22日 於 原宿クリスティー

出席者43名

今日は第1部に久しぶりに女性コメンテーターをお願いしました。この会は女性会員も多いのですが、皆さんタンゴではベテランなのにシャイ(お淑やか?)で、出演していただくのが一苦勞です。町田静子さんは、タンゴ「すいよう会」の中心メンバーで、黒木皆夫さんと共に会をとり仕切っているベテランで、聴くほうも踊るほうもその情熱には圧倒されてしまいます。間もなくお勤めを退職して、ブエノスヘリフレッシュ旅行に出られるそうで、後で楽しいお話を聞かせていただけることでしょう。リンコンの解説は初めてですが、巾広い選曲で楽しませてもらいました。

第2部には、日本タンゴ・アカデミーきっての若手のホープ、山本幸洋さんをお願いしました。オールドファンが多い会員の中で独特の感覚を持つ山本さんのお話には、普段私達があまり聴かないところを掘り下げた新鮮なものがあり、私などは「ああそうだったのか」とあらためて感心してしまいます。今日はカルロス ガルシエアに的を絞ったお話でした。

第1部

私の「Tango Favoritos」から 町田静子

- 1 : ENSUEÑOS (夢の中で) 曲 Luis A. Brighenti 詞 Federico Silva
Quinteto Real (1964)
- 2 : QUÉ FALTA QUE ME HACÉS! (君なくて) 曲 A. Pontier 詞 F. Silva
Miguel Caló y su O. Típica (1963) 唄 Alberto Podestá
- 3 : MADAME IVONNE (マダム イボンヌ) 曲 Eduardo Pereyra
Aníbal Troilo-Roberto Grela y su cuarteto típico (1962)
- 4 : PATÉTICO (悲愴) 曲 Jorge Caldara
Osvaldo Pugliese y su O. Típica (1948)
- 5 : TE ODIO (君を憎む) 曲 F. Pracánico
Anselmo Aieta y su O. Típica (1930)
- 6 : INSPIRACIÓN (靈感) 曲 Peregrino Paulos
Orlando Trípodí y su O. Típica (1982)



Extra

MI PIBA (ぼくの娘) 曲 R. Sciammarella 詞 M. Romero
Ricardo Tanturi y su O. Típica (1943) 唄 Alberto Castillo

第2部

カルロス・ガルシーアのピアノを聴く 山本幸洋

- 1 : QUEDÉMONOS AQUÍ (ケデモノス・アキー) H. Expósito, H. Stamponi
Piano Solo 1963
- 2 : TODO ES AMOR (恋は全て) Riel, A. Romay
Tango Melódico para una Anochecer 1950s
- 3 : RUBÍ (ルビー) E. Cadícamo, J.C. Cobián
Oscar Alonso con García 1930s?
- 4 : CASCABELITO (カスカベリート) J. Caruso, J. Bohr
C. García y su Gran Orquesta 1970
- 5 : EL ONCE (エル オンセ) E. O. Fresedo
Tango All Stars 1971
- 6 : TIERRA QUERIDA (愛しき土地) L. Díaz, J. De Caro
Tango All Stars 1973
- 7 : LOS EJES DE MI CARRETA (牛車にゆられて) R. Yiso, A. Yupanqui
Argentina Musical 1973
- 8 : CHIQUÉ (チケ) R. L. Brignoro
Orquesta del Tango Bs As 1983



第3部

特別出演： 飯泉昌宏 ギター独奏

飯泉さんはさいたま市在住、会長の島崎さんのすぐ近所だそうで、偶然の機会に島崎さんの目に止まって出演の運びとなりました。若手のタンゴギター奏者ですがすでにご自身のCDを何枚か出しているという腕利きです。今日はソロ演奏を聴かせてもらうことになりました。

- 1 : LOS MAREADOS ロス・マレアドス
- 2 : EL DÍA QUE ME QUIERAS 思いの届く日
- 3 : LA CUMPARSITA ラ・クンパルシータ

ここでハプニングが起きました。来場していた歌手のグロリア米山さん(当会会員)が飛び入りで唱われ、全員ヤンヤの拍手喝さいの中で何と流れた曲がグロリアさんも初めて



唄うという「チキリン・デ・バチン」でした。なんなく唄いこなして彼女の新しい面を見たような気がしました。最後はオートラの大合唱で、「スール」を聴かせてもらいました。

第65回 2012年7月24日 於 原宿クリスティー

出席者43名

今日は後半に、特別演奏会を予定しました。したがって前半のレコード解説は佐藤進さんお一人に10曲お願いしました。佐藤さんはアカデミーの役員ですが、いつも「遅れてきたタンゴファン」と自称されていますが誰より熱心なタンゴファンで、アルゼンチンのレコード・CD事情に詳しく、得意のパソコンを駆使して我が国では手に入りにくいCDを購入しています。古いところは勿論新しいものにも詳しく、今や最も幅広いタンゴファンといえるでしょう。

さて後半の特別演奏会は「黒木皆夫とスエニョス タンゴ トリオ」の登場です。黒木さんの楽団はアマチュアながら一昨年の東京タンゴ祭にも出演した実力の持ち主、他の楽団がやらないような曲にもどんどん挑戦しているところが多く、多くのファンを引き付ける所以でしょう。

メンバーは

バンドネオン、リーダー 黒木皆夫：

50歳よりバンドネオンを始める。1966年より「オルケスタ ティピカ スエニョス」を結成。現在も数多く演奏活動を続けている。

ピアノ 島 昭彦：

1960年代、西塔辰之助の「オルケスタ ティピカ パンパ」で活躍、自身の楽団を経て現在スエニョス楽団のピアニストを務めている。

ヴァイオリン 村井正宏：

藤岡啓郎と「オルケスタ ティピカ アローラス」で活躍の後、スエニョス楽団には助っ人として参加していたが、現在では楽団のリード役を務めている。

第1部

タンゴあれこれ 佐藤 進

- | | | |
|------------------------------------|----------------|------|
| 1. エル インテルナード | ファン ダリエンス楽団 | 1954 |
| El Internado (F. Canaro) | | |
| 2. たそがれのオルガニート | カルロス ディ サルリ楽団 | 1954 |
| Organito De La Tarde (C. Castillo) | | |
| 3. 魂と心 | ファン マグリオ パチョ楽団 | 1929 |
| Alma y Corazón (Juan y José Varni) | | |
| 4. 下町のロマンス (v) | キンテート レアル | 1959 |
| Romance De Barrio (A. Troilo) | | |
| 5. 幸福の地 | A. ポールマン トリオ | 2009 |
| Satumas (Unto Mononen) | | |



- | | | |
|---|----------------|------|
| 6. ハシント チクラーナ | アントニオ アグリ | 1994 |
| Jacinto Chiclana (A. Piazzolla) | | |
| 7. マミータ | フランシスコ ロムート楽団 | 1929 |
| Mamita (Ángel Danesi) | | |
| 8. バンドネオンよ、君のために | ブエノス アイレスのスター達 | 1960 |
| Bandoneón...Para Vos (J. Caldara, L. Stazo) | | |
| 9. タンゴとシャンパンの間で | ロベルト フィルポ楽団 | 1928 |
| Entre Tangos y Champagne (C. Rocca) | | |
| 10. エル アコモード | エドガルド ドナート楽団 | 1932 |
| El Acomodo (E. Donato) | | |

第2部

黒木皆夫とトリオ スエニヨス演奏 (特別編成)

1. ミロンガの泣くとき
Cuando Lloro la Milonga (J.D.Filiberto)
 2. バンドネオンの心
Alma de Bandoneón (E.S.Discépolo)
 3. 赤い靴のタンゴ
El Tango de los Zapatos Rojos (M. Koga)
 4. 夜のタンゴ
Tango Notturmo (O.Borgman)
 5. ミロンガの一夜
Una Noche en la Milonga (G.Del Ciancio)
 6. 祈り
Plegaria (F.De Maio)
 7. ブランセンの小径
Callecita Brandsen (L.M.Bianco)
- 飛び入り ユリ アスセナ ポエマ Poema
アンコール エル アコモード El Acomodo



大興奮のうちに一夜が過ぎていきました。

第66回 2012年9月25日 於 原宿クリスティー

出席者46名

このところややお客様が少なく、40名台が続いています。私達主催者側としては毎回50名を目標に

している関係上、何か問題でもあるのではと思ってしまいます。たまたまそうなったと言ってしまうのが楽なのですが、先行きのことを考えるとちょっと不安になるのも事実です。そこで次回の時にアンケートをお願いしてみようということにしました。何かヒントが得られるかもしれません。

今日のコメンテーターはリンコン初登場、横浜の藤木さんに第1部をお願いしました。藤木さんは横浜ポルテナの古いメンバーですが、ダンスもお得意でよくミロンガでお見かけします。そんなところで今日のテーマを選ばれたようです。第2部は私にお鉢がまわってきまして、しばらく遠ざかっていた「ダリエンソ」をやることにしました。他に能がないので仕方がないのですが。

第1部

「心の隅の私のタンゴ小史」 藤木立夫



1. EL LLORÓN (A. Radrizzani) Hugo Díaz en Buenos Aires
泣き虫
2. EL DÍA QUE ME QUIERAS (C. Gardel) Hugo Díaz en Buenos Aires
想いのとどく日
3. BLANER HIMMEL (J. Rixner) Alfred Hause Tango Orchestra
碧空
4. TIERRA QUERIDA (J. De Caro) Carlos García y su Gran Orquesta
愛する土地
5. NOSTALGIAS (C. Cobián, E. Cadícamo) Orquesta Típica Tokyo
郷愁
c: Ranko Fujisawa
6. LA CUMPARSITA (M. Rodríguez) Malando Orchestra
ラ クンパルシータ

第2部

「ダリエンソの隠れた名演」 Juan D'Arienzo y su Orquesta Típica 福川靖彦

1. ラメンティローサ 1944-6-9
LA MENTIROSA (A. Aieta)
2. ビエントスール (別録音) 1954-12-28
VIENTO SUR (F. Salamanca)
3. エルレソンゴン 1955-7-1
EL REZONGÓN (R. Natta)
4. エルプアソ 1957-3-13
EL PUAZO (A. Casablanca-D.S. Vignoli)
以上 ピアニスト：F. サラマンカ

5. ノテキエロマス 1957-6-13
 NO TE QUIERO MÁS (J. Bauer)
 c: マリオ ブストス
6. コンアルマ デ タンゴ 1959-10-29
 CON ALMA DE TANGO (J. D'Arienzo-C. Weiss)
 c: ホルヘ バルデス
7. ガロネロ 1961-6-6
 GARRONERO (J. D'Arienzo-J.F. Caride)
 c: オラシオ パルマ
 以上 ピアニスト: J. ポリト



第3部

最近メキメキ腕を上げている平田耕治君のバンドネオンと那須亜紀子さんのドゥオの出演です。この2人は直近のコンサートでも共演していて、息の合った演奏を聴かせてくれました。河内敏昭さんも飛び入り参加されました。

1. Golondrina つばめ
 2. Celos ジェラシー
 3. Zamba de mi Esperanza 我が希望のサンバ
 4. La Cumparsita ラクンパルシータ
- アンコール Danzarín ダンサリン



第67回 2012年11月13日 於 原宿クリスティー

出席者50名

このところ目標としている参加者50名を割り込んでいて、主催者としては何が原因なのか判明できずひそかに頭を悩ませていたのですが、今夜は50名のお客様に参加していただいてちょっとホッとしました。東京リンコンも場所を移してから3年になります。何か問題があるかどうか一度アンケートをお実施してみようということになり、早速本日の参加者の皆さんにお願いしました。開催日時、曜日、時間、解説、実演等々についてお聞きしましたが、結果は何と現状維持が7割でした。何か拍子ぬけというか安心というか不思議な気持ちでした。若いタンゴファンが増えない中で、今後どのように普及を図ってゆくのか結論の出ない問題とまだまだ格闘しなければなりません。

第1部

コメンテーター：高場将美 テーマ：タンゴのロマンティックな歌

高場さんは久しぶりの登場です。知る人ぞ知る我が国きってのタンゴ通であり、深い知識と幅広い情報には感銘させられます。ちょっとシャイなところが売りです。今日は独特の角度からプログラムを組んでいただきました。



1. ここにいない恋人

(作詞:エンリケ カディーカモ、作曲:ギジェルモ バルビエーリ)

LA NOVIA AUSENTE

カルロス ガルデル ギター伴奏

2. パリで死んだひと (作詞:エクトル ブロンベルグ、作曲:エンリケ マシエール)

LA QUE MURIÓ EN PARÍS

イグナシオ コルシーニ ギター伴奏

3. 人が愛するのはただ一度だけ (作詞:クラウディオ フロッコ、カルロス フローレス)

SÓLO SE QUIERE UNA VEZ

フロレアール ルイス、アニバル トロイロ伴奏

4. 黒い花たち (作曲:フランシスコ デカロ)

FLORES NEGRAS

ロベルト ディ フィリッポ (バンドネオン ソロ)

5. 吟遊詩人 (作詞:アグスティン イルスタ、作曲:R. トゥエゴルス)

EL TROVERO

フィオレンティーノ アストル ピアソラ伴奏

6. 過ぎ去った幸せ (ギジェルモ バルビエーリ)

DICHA PASADA

フリオ ソーサ レオポルド フェデリコ伴奏

7. わたしのおかしなバンドネオン (作詞:オラシオ フェレール、作曲:アストル ピアソラ)

MI LOCO BANDONEÓN

グスタボ ノチェッティ ネストル バス伴奏

第2部

コメンテーター：宮本政樹

テーマ：老後の人生は楽しくタンゴダンスで

宮本さんは、レココン、ミロンガ「ノチェロ ソイ」の主催者で、毎回ユニークな内容のコンサートとミロンガで最も多忙な一人です。



まさに今日のテーマを地で行っているといっぴよいでしよう。先月NTAがミロンガパーティーを開催するにあたって最も活躍してくださいました。今日は、ダンサーから見たタンゴについてというテーマをお願いしました。

1. MIRONGUERO VIEJO (老いたミロンゲーロ)
(C. Di Sarli) カルロス デイ サルリ楽団
1951年
2. EL PUNTAZO (ナイフで一突き)
(A. Junissi) ファン ダリエンソ楽団
1952年
3. DANZARÍN (踊り手)
(Julián Plaza) セステート マジヨールほか
1968年
4. JULIENNE (フリエンネ)
(Nicolás Primiani) O. T. ビクトル
1927年
5. LEYENDA REA (やくざ者の伝説)
(Antonio Mingrone) ファン ギド楽団
1929年
6. MI QUEJA (我が嘆き)
(Juan Maglio) ファン マグリオ “パチョ” 楽団
1932年

第3部

唄：峰 万里恵 ギター伴奏：高場将美

このお二人は普段からコンサート活動をしている関係で、とても息の合ったところを聴かせてくださいました。峰さんはこのところフォルクローレやファドに著しい進歩を見せていて、ご本人もそちらにとっても興味があるそうです。今日はタンゴ中心のプログラムです。

1. ENVIDIA (羨望)
(作詞：J.G. カステイージョ他、作曲：F. カナロ)
2. MARÍA (マリーア)
(作詞：C.カステイージョ、作曲：A. トロイロ)
3. LOS EJES DE MI CARRETA (牛車にゆられて)
(作詞：ロミルド リッソ、作曲：A. ユパンキ)
4. LA ÚLTIMA CURDA (最後の酔い)
(作詞：C. カステイージョ、作曲：A. トロイロ)



第20回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 山本 雅生 —

2012・11・4（日）関西リンコン・デ・タンゴを神戸三宮の例会場「サロン・ド・あいり」で開催いたしました。最近の傾向なのか、参加をして下さる方の減少が止まらず、今回はNTA会員11名・会員外9名の合計20名の参加でした。

開会に先立ち、去る10月18日にお亡くなりになられた「芝野史郎さん」（NTAの元理事を務められ、関西リンコンの開催を推進された）の御冥福をお祈りして黙祷を捧げ、プログラムへと進みました。

プログラム1-1 は映像によるタンゴとして今回は吉澤義郎さんの提供で「LAS DEL ABASTO」を観賞しました、「ラス・デル・アバスト」は10年前に結成された女性だけのグループで、歌手のステラ・ディアス（グラマーの美人）を中心にクラリネットの入った5人編成のコンフォートで2010年3月アルベアール劇場でのライブ録音で、幻想的な画面構成の中、ステラ・ディアスの歌とクラリネットの音が大変印象的でした。（まるで現地に行っている様な雰囲気でした）

プログラム1-2 は今年6月10日東京に於ける第78回タンゴ・セミナーで並み居る東京のウルサ型の先生方を前に大向こうを唸らせた「フランシスコ・ロムート楽団1931～1945栄光と苦悩の15年」のダイジェスト版を関西でも！と云う企画で東京での26曲を10曲にセレクトして頂いて、うんちくを披露して頂きました、綿密なディスコ・グラフィーを基礎に、あらゆる情報を組み合わせて語るその物語は私の様なノー天気なファンには全く凄い！の一言でした。この「お勉強」の内容は一度位聞いた処で全く記憶に残らない資料ですが、タンゲアンド誌では記録として文章で発表して下さい様お願いをしている、との事で掲載が楽しみです。

プログラム2 では東京から来て下さったゲスト・コメンテーターの大澤寛さん（タンゴランディアの編集長）の私の好きなワルツとミロンガを御披露して下さいました。肩の凝らない演出で、お話しよりも曲を聴くと云う方向は全員リラックスで楽しい時間を過ごす事が出来ました。ミロンガ10曲・バルス5曲と云う内容でしたが、私には聞き慣れたバルスの曲が耳に心地良く楽しい時間がアッと云う間に過ぎてしまいました。後で聞いたお話ですが、懇談会の折リクエストが有って、後日CDを作って頂いて配布をされたとか、会員の我が儘で大変御迷惑をお掛けしてしまいまして、申し訳無く存じております。

恒例の吉澤さんに依る、記念撮影の後、夕ご飯を頂きながら、大澤さんを囲んで懇親会でお話しが弾み、ぼちぼち引き上げようか？となったのは21時近くになっていました。

BGMとして流したCDはその昔関西きっての歌姫として「京谷 明とオルケスタ・ティピカ大阪」で活躍をした、現NTA会員の福田和子さんの歌声を聴かせて頂きました、残念ながら御本人は法事？などの用事の為、欠席をされましたが、次回からは心を入れ替えて出席して下さいそうです。

次回の予定は2013年5月19日第3日曜日です、会員の皆様は勿論の事、ぜひ会員以外の方を誘って頂いて賑やかに過ごしたいと願っています。トリオ等のライブもぜひ聴きたいと思っています。



司会の山本雅生氏（↑）と映像紹介の吉澤義郎氏（*）（→）
（*）写真撮影は山本雅生氏



ロムートを語る永田 保氏（↑）と
ワルツとミロンガを語る大澤 寛氏（→）



参加者集合写真

（写真撮影：吉澤義郎）

ープログラムー

***** 第 1 部 *****

1) 映像で楽しむタンゴ 180 吉澤 義郎

LAS DEL ABASTO (女性だけのタンゴ・グループ) 2010年3月アルベアール劇場での
ライブ映像

1	MINAS DE TANGO	ミナス デ タンゴ	Stella y Ana Díaz
2	CORAZÓN AL SUR	南への	Eladia Blázquez
3	PAVADITA	パバディータ	Anselmo Aieta
4	GARUFA	酒宴 (ガルーファ)	Soliño / Fontaina / Collazo
5	VENTARRÓN	ベンタロン	P.Maffia / J.H.Staffolani
6	PERO YO SÉ	でも私は知っている	Azucena Maizani
7	NIÑO BIEN	ニーニョ ビエン	Soliño / Fontaina / Collazo
8	CANTANDO	歌いながら	Mercedes Simone
9	CORRALERA	コラレーラ	Anselmo Aieta
10	MAIPO	マイポ	Eduardo Arolas
11	ATENTI PEBETA	アテンティ ペベータ	C.Ortiz / C.Flores
12	ABSURDO	アブスルド	V.Expósito / H.Expósito
13	CELOSA	嫉妬深い女	P.Rodríguez
14	TARDE	タルデ	José Canet
15	QUÉ QUERÉS CON ESE LORO	ケ ケレス コン エセ ロロ	E.Delfino / M.Romero
16	SE DICE DE MÍ	私の噂	F.Canaro / I.Pelay
17	LA CUMPARSITA	ラ・クンパルシータ	G.Matos Rodríguez
18	ME ENAMORÉ UNA VEZ	メ エナモレ ウナ ベス	F.Canaro / I.Pelay

2) 東京でのセミナーの感激を関西でも

フランシスコ □ムート 楽団 1931～1950 089 永田 保

1	EL IRRESISTIBLE	C.Pesce-L.Logatti	1931 37098
2	LONJAZOS	J.F.Blanco-A.R.Domenech	1932 37300
3	CAMBALACHE	E.S.Discépolo	1934 37708
4	DESPUÉS ARREGLAMOS	P.Laguna-F.Lomuto	1936 37885
5	DON JUAN MALEVO	E.R.Beccar-F.Lomuto	1937 38259
6	A MÍ QUÉ ME IMPORTA	M.Romero-F.Lomuto	1939 38800
7	QUÉ LINDA ES LA VIDA	A.Navarrine-L.Demare	1941 39263
8	CATAMARCA	Eduardo Arolas	1943 60-0075
9	UN VALS	O.Rubens-H.Salgán	1944 60-0436
10	CACHADORA	P.Laguna-F.Lomuto	1950 60-1978

歌手 Fernando Díaz 1 ~ 3
Caros Galarce 9

Jorge Omar 4 ~ 7
Alberto Rivera 10

***** 第 2 部 *****

3) 私の好きなワルツとミロンガ 1 4 1 大澤 寛

- 1 LA ESPUELA milonga (E.P.De Gudini)
拍車 Orq : Ernesto Franco
- 2 CORAZÓN DE ORO vals (Francisco Canaro+J.Fernández-Blanco)
黄金の心 Orq : Francisco Canaro
- 3 MILONGA DE MIS AMORES milonga (P.Laurenz-J.M.Contursi)
我が愛のミロンガ Conjunto : Domingo Rulio y su conjunto " Pa'que bailen los muchachos"
- 4 CORRALERA milonga (A.A.Aieta)
牧場の娘 Orq : Alfredo de Ángelis
- 5 FRANCIA vals (O.Barbero)
フランシア Quinteto : "Don Pancho" y su quinteto típico argentino
- 6 HARINA Y PAN milonga (C.Guzmán-M.Del Mar Estrella)
小麦粉とパン Canta : Gabriela Fein
- 7 MILONGA DE MATADEROS milonga (Edgardo Acuña)
マタデロスのミロンガ Canta : Alicia Pometti con conjunto de guitarras de Edgardo Acuña
- 8 MILONGA ORILLERA milonga (R.Firpo)
岸辺のミロンガ Cuarteto : Roberto Firpo y su cuarteto
- 9 DESDE EL ALMA vals (R.Melo)
心の底から Orq : Ricardo Tanturi
- 10 ENSUEÑO vals (A.Sureda-H.Manzi)
夢 Bandoneón solo : Felipe Antonio
- 11 NEGRA MARÍA milonga (L.Demare-H.Manzi)
黒いマリア Canta : Mercedes Simone
- 12 A MIS MANOS milonga (A.Gobbi-J.Camilloni)
俺の両手に Canta : Alberto Marino
- 13 DUELO CURDA milonga (Jaime Vila-Ernesto Cardenal)
酔っ払い達の通夜 Canta : Jorge Vidal
- 14 COSAS DE BORRACHO milonga (U.Martínez)
酔っ払いの言い草 Orq : Juan Sánchez Gorio Canta : Luis Mendoza
- 15 LÁGRIMAS Y SONRISAS vals (P.De.Gullo)
涙と笑い Orq : Rodolfo Biagi

西宮市在住 N T A 会員 「福田 和子」さんの唄を聴く

- | | |
|------------------|------------|
| 1 さらば愛しき人 | 13 君を待つ間 |
| 2 ノスタルヒアス | 14 マラゲーニャ |
| 3 永遠の別れを | 15 カンソネタ |
| 4 カミニート | 16 メルセ寺院の鐘 |
| 5 懐かしのブエノスアイレス | 17 ツクマンの月 |
| 6 海と空 | 18 花売り娘 |
| 7 ある恋の物語 | 19 メンティーラ |
| 8 アデュー | 20 星月夜 |
| 9 回転木馬 | 21 古都 |
| 10 イトダビア テキエロ | 22 君しのぶワルツ |
| 11 メランコリー | |
| 12 アディオス ムチャーチョス | |

1～17 京谷 明とオルケスタ ティピカ 大阪	1961／1962
18～23 タンゴ倭	2001

フランシスコ ロムートに関する資料



フランシスコ・ロムートの兄弟達

誕生年	名前	備考
1890	Angela Maria	
1893	Francisco Juan	ピアニスタ・作曲家・作詞家・Pancho Laguna 指揮者
1894	Victor Dionisio	ギタリスト・バンドネオニスタ・作曲家・主にパリで活躍
1896	Elvira Ana	
1899	Pascual Tomas	作詞家・(Oscar Lomuto)ジャーナリスト
1903	Rosalia	
1906	Enrique Blas	ピアニスタ・作詞家・楽団指揮者・Daniel Lomuto の父
1912	Blas Alfred	職業軍人
1914	Hector Antonio	ピアニスタ・作曲家・楽団指揮者 (Hector .y. su. sujazz)



第11回 「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

丹羽 宏

第11回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以降、中部リンコンと略記）は11月11日（日）13時より、島崎長次郎 会長を迎えて、三重県は四日市市内の交流サロン「文化の諏訪駅」で開催した。当日の中部地方は生憎の雨天となり、秋の行楽にはマイナスの影響が出たようだが、我が方はむしろ52名（会員 10名、ビジター 42名）と前回に並ぶ参加者で会場は大いに賑わった。

今回の開催に当っては、従来単独で参加されていた方々に、談話を広げる意味もあってグループでの参加をお願いして来た。「トリオ・ポルテーニョ」とそのサポート隊、二つのタンゴ同好会、各種のOB会・親睦会など、数人から二桁近い員数まで多種多様なグループである。ご理解とご協力に深く感謝。これは次回にも繋げたい。SP原盤によるレコード演奏を生演奏と同じ時間軸で楽しむ試みも、老若男女を問わず参加者から好評だった。

プログラムの進行に先立って、島崎会長よりご挨拶を頂いた。ビジター参加の多い「中部リンコン」の実情に鑑みて、日本タンゴ・アカデミーの創設経緯、活動状況等について分かり易く説明された。最近では「第2回ミロンガ・パーティー」が162名の参加を得て大好評とのことであった。

【第1部】 「タンゴ・プラティーノ」の生演奏会を1時間余り楽しんだ。

昨秋の第9回リンコンに続いての登場となった。前回はコントラバスの入らないトリオの演奏であったため、参加者からは贅沢な話だがサウンド・バランス上の不満も聞かれた。この反省に立って、今回はこのグループの本来の編成・4重奏で演奏してもらった。内装面に一工夫加えられた小ホールなので、予定したマイク・セッティングを外しアコースティック・ライブとした。これが包み込むような音響効果を生み、好評だった。

さて、リーダー「田中博澄」さんの採譜と編曲による全13曲の演奏では、全て聴き覚えのある古典曲を取り上げ、2曲（フェリシア、ラ・クンパルシータ）を除いては前回のプログラムになかった曲で構成されていた。重度の視覚障害というハンディキャップをものともせずディアトニック・バンドネオンを奏きまくる挑戦姿勢には頭が下がる。切れのあるピアノ、バイオリンの生音を浮揚させるように弾き出すベースの響きは、新鮮さと共にレトロ感を場内に漂わせていた。

アンコール曲「ラ・クンパルシータ」の演奏終了直後に至って、タンゴに興味を持つ新聞記者が飛び込んで来た。場内はスタンディング・オベーションまがいに再アンコールの合唱が起こり、記者の写真撮影の為の演奏ポーズが結局フル演奏となった。同系の東京新聞にも掲載を！という叱咤も飛んでいた。翌月曜日は新聞休刊だったこともあって、記事掲載は火曜日となった。

【第2部】 恒例の「会員レコード・コンサート」を松野初美会員の解説で聴いた。

第3回中部リンコンでは「地元の女性会員有志3人による4曲選」をプログラムに加えた。

今回は2回目となるもので、松野さんは前回（テーマはタンゴ・ファンタジア）に続いての再登場となった。タンゴを全方位で聴いてみたいという当時のコメント通り、今回のテーマは「ヨーロッパ・タンゴ」を取り上げるようになった。フランス・タンゴと並んでタンゴの先導国であった「ドイツ」における黄金時代のタンゴ（1928年から1936年まで）に焦点を合わせての選曲となった。ヨーロッパ・タンゴについては、今までに集め、あるいは新規に入手した音源を聴きこみながら、タンゴ・アカデミー会誌の関連記事やネット掲載文献を読んでドイツ・タンゴ情報を積み上げていったという。ここから得た知見をもとに、タンゴを積極的に取り上げていた7楽団、つまり「ダヨス・ベラ」、「マレク・ウェーバー」、「ロベルト・ガーデン」、「アダルベルト・ルッター」、「オスカル・ヨースト」、「バルナバス・フォン・ゲッツイ」、「ハインツ・フッペルツ」たちの音楽家としてのルーツ、そして演奏の特徴が紹介された。指揮者7人に共通する演奏楽器がすべてバイオリンであることは、ドイツ・タンゴを紹介するに当たっての新しい切り口にもなっていたし、演奏に使用されたとされるバイオリンの名器の音質についても言及していたのは流石である。また、7楽団の選曲に当たっては、数多くの音源を聴き込んだようで類型的な演奏曲を避けていたのは賢明であった。

それにしても筆者が聴き知る筈のない'30年代のドイツ・タンゴが揺り籠で聴くように感じられたのは不思議である。

【第3部】 メイン・イベントは島崎会長による「往年の名盤（SPレコード）を訪ねて」を楽しんだ。すでに「中部リンコン」ではSP原盤によるレコ・コンを2度も経験しているとあって、前評判は高く当該時間になるとカフェ担当の参加者も会場ホールに入り所狭しの場内となった。80分間という限られた時間の中で、SP音源が築いたタンゴ黄金時代を表現するには不可避の選曲・演奏を4つに区分の枠の下に解説された。

「第1期 黄金時代の遺産から」、「哀愁のヨーロッパを綴ったアーティストたち」、「タンゴの夢を紡いだエトランジェ（他国者）たち」、「第2期 黄金時代の遺産から」という分類が時系列を伴った俯瞰図的なマップとなっていて、もの凄く分かり易かった。勿論、過半の参加者が知っている曲・演奏であることも強みであった。このことは後の小テーマについても言えることである。

先ず1920年代の名曲名演を集めた4曲選では、オデオン社の5大楽団から「ロベルト・フィルポ」と「フランシスコ・カナロ」を選んで、タンゴ人気を先導した2楽団の活躍に触れ、ビクトル社からは2枚看板の「フリオ・デ・カロ」と「オルケスタ・ティピカ・ビクトル」を取り上げていた。

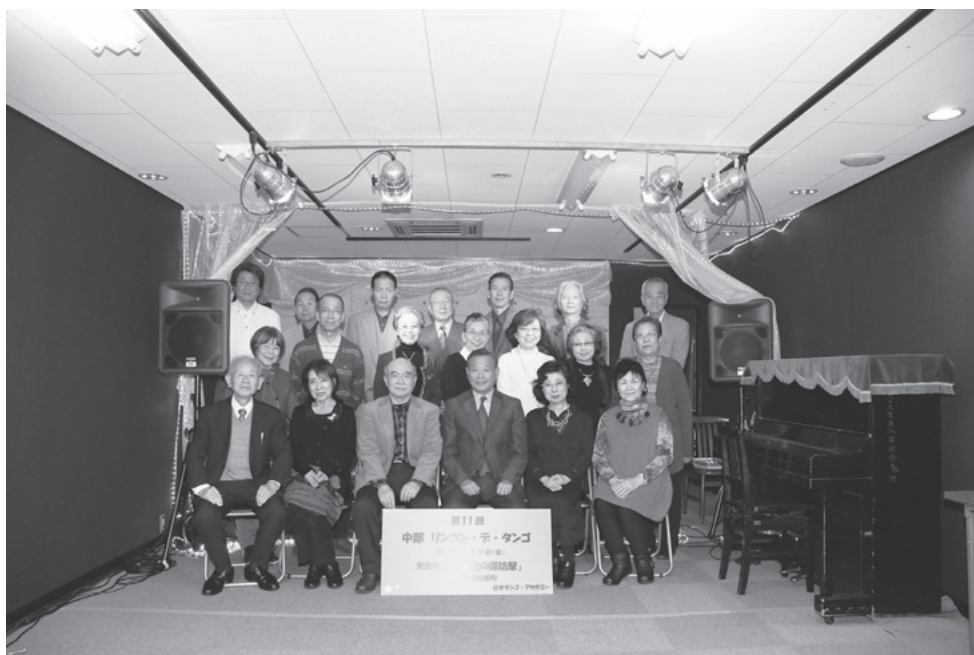
「デ・カロ」の「エル・マレーボ」では、この1音源を使ってタンゴ・バングアルディスタとしての貢献度を見事に紹介された。「オルケスタ・ティピカ・ビクトル」の「アルシーナ橋」を紹介するに当たって、当時既に起っていたブエノスアイレス郊外の変化、つまり変り行く環境への郷愁と嘆きにも言及された。次の「ヨーロッパを綴ったアーティストたち」では、探し続けた思い入れいっぱいの国内ピカ盤の「レクエルド」につき、音源探しの楽しみ方の一端を吐露されて会場を沸かせた。

3番目のテーマ「エトランジェ（他国者）たち」では、グッと身近な曲目～歌手・楽団ながら、日頃あまり聴く機会のない音源を、「藤原義江」の現地録音のエピソードも交え貴重な史実話を通して解説された。最後は遺産価値の高い多くの音源が宿る「第2期 黄金時代」の名演奏から選び抜かれた4曲選を聴いた。「アニバル・トロイロ」、「フアン・ダリエンス」、「カルロス・ディ・サルリ」、「オスバルド・プグリエーセ」である。

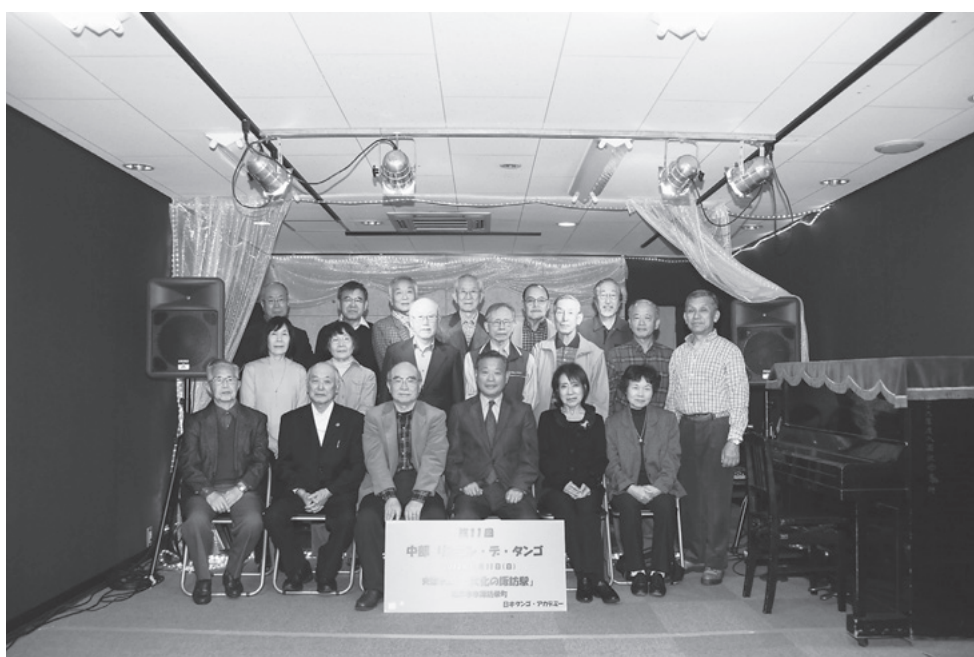
『往年のSP名盤を訪ねる』旅のメは、タンゴの完成とターミネーションを見極め、そして納得することにも繋がっていた。

以上、少数のテーマに中身の濃い内容を詰めた4時間近い「中部リンコン」でした。感謝。

【リンコン懇親会】 リンコン終了後は14名が近隣のホテルに場を移してのリンコン懇親となった。吉岡会員の発声・進行により吉澤会員（大阪）、光廣会員（静岡）はじめ、名古屋、名張、松坂、津など隔地からの参加者が島崎会長を囲んでワイン・フリー・ドリンクのひと時を過ごした。



全員写真（その1）



全員写真（その2）

（写真撮影：吉澤義郎）



会長開催挨拶



解説中の会長



演奏中のタンゴ・プラティノー



タンゴ・プラティノーと参加者

(写真撮影：吉澤義郎)



タンゴ・プラティーノ演奏を終えて



タンゴ・プラティーノ リーダー田中博澄氏



解説中の松野会員



グループ参加 一部の方々



中部リンコン・デ・タンゴを紹介した中日新聞の記事

(写真撮影：吉澤義郎)

〈プログラム〉

【第1部】 TANGO PLATINO EN VIVO

生演奏：タンゴ・プラティーノ〈名古屋市〉

田中 博澄〜ピアノ・初

斉藤 幸枝〜バイオリン

西谷 徳子〜ピアノ

山本 英〜コントラバス

01. エル・インテルナード、インターン学生／ EL INTERNADO (F. Canaro)
02. エル・エスピアンテ、機関車／ EL ESPIANTE (O. Fresedo)
03. エル・アマネセール、夜明け／ EL AMANECER (R. Firpo)
04. エル・ウラカン、台風／ EL HURACÁN (E. Donato)
05. ラグリマス・イ・ソンリサス、涙と笑い／ LÁGRIMAS Y SONRISAS (P. Degullo)
06. エスペラル、希望／ ESPERAR (E. Santos Discépolo) vals
07. カンシオン・デ・マール、海の歌／ CANCIÓN DE MAR
08. ウナ・ノーチェ・デ・ガルーフア、酒宴の一夜／ UNA NOCHE DE GARUFA (E. Arolas)
09. ソーロ・グリス、銀狐／ ZOLLO GRIS (R. Tuegols=Francisco G. Jiménez)
10. ロカ、狂女／ LOCA (M. Jovés=A. Viergol)
11. ラ・モローチャ、褐色の肌の娘／ LA MOROCHA (E. Saborido=A. Villoldo)
12. フェリシア／ FELICIA (E. Saborido)

【第2部】 会員レコード・コンサート

〜黄金時代のドイツ・タンゴ〜

松野 初美 (鈴鹿市)

01. ナディネ、誰も・・・／ NADINE (J. B. DO Nascimento) : ダヨス・ベラ楽団 〈1928〉
02. ミ・ノスタルヒコ、わが郷愁／ MI NOSTÁLGICO (J. Sentís) : マレク・ウエーバー楽団 〈1930頃〉
03. パンチータ、母の呼び方・方言／ PANCHITA (Leonardi) : ロベルト・ガーデン楽団 〈1933〉
04. ロサ・ミア、私の薔薇／ ROSA MÍA (Mahlow=Wiebe) : アダルベルト・ルッター楽団 〈1934〉
05. ギタリータ・ポルケ・ノラス、ギターよ何で悲しいんだ／ GUITARRITA PORQUÉ NORAS
(Joselito) : オスカー・ヨースト楽団 〈1935〉
06. ポルケ・ノ・ミ・アミーゴ、どうして友達でいけないの／ PORQUÉ NO MI AMÍGO (Zangone)
バルナバス・フォン・ゲッツイ楽団 〈1935〉
07. プント・アレナス、砂浜海岸の名称／ PUNTO ARENAS (Codevilla)
ハインツ・フッペルツ楽団 〈1936〉

【第3部】 本部招聘SPレコード・コンサート

15:20-16:40

日本タンゴ・アカデミー会長

島崎 長次郎

往年の名盤(SP)を訪ねて

◆ 第1期 黄金時代の遺産から

- 1 笑え道化師 RIE PAYASO(V.R.Carmona)
ロベルト・フィルボ楽団 G.29
- 2 アルマ・タンゲーラ ALMATANGUERA (M.Licarse)
フランシスコ・カナロ楽団 G.27
- 3 エル・マレーボ(伊達男)EL MALEVO(J.De.Caro)
フリオ・デ・カロ楽団 G.28
- 4 アルシーナ橋 PUENTE ALSINA(B.Tagle.Lara)
オルケスタ・ティピカ・ピクトル G.28

◆ 哀愁のヨーロッパを綴ったアーティストたち

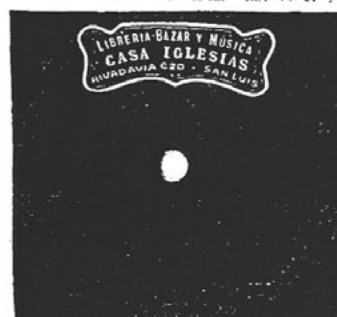
- 1 レクエルド(思い出) RECUERDO(O.Pugliese)
マヌエル・ピサロ楽団 G.33
- 2 邪悪な踊り DANSA MALIGNA (Randle=Frollo)
インペリオ・アルヘンティーK(歌) G.32
- 3 チケ(気取屋)CHIQUE(R.Brignolo)
トリオ・アルヘンティーノ G.29

◆ タンゴの夢を紡いだエトランジェ(他国者)たち

- 1 操り人形 A MEDIA LUZ(E.Donato)
藤原義江=Orq.Tip.Victor G.37
- 2 女の嘆き MI GEISHA ESTA TRISTE(M.Koga)
マリアノ・モーレス楽団 G.39
- 3 ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA(Mts Rodriguez)
テイト・スキーパー=Orq.Tip.Victor G.32

◆ 第2期 黄金時代の遺産から

- 1 素晴らしいミロンガ BIEN MILONGA(I.Spitalnik)
アニバル・トロイロ楽団 G.51
- 2 臆病者 MANDRIA(Brancatti-Velich-.Rodriguez)
フアン・ダリエンソ楽団 G.57
- 3 ビビアーニ<人名> VIVIANI(R.Firpo)
カルロス・ディ・サルリ楽団 G.56
- 4 ミ・ラメント(わが悲歌)MI LAMENTO(J.Carrasco)
オスバルド・ブグリエーセ楽団 G.54



16:40-16:45

【閉会】

長時間に亘り、「中部リンコン」の進行にいろいろとご協力頂き有難うございました。

今も生きている「高山語録」

島崎 長次郎

わが国のタンゴ界の重鎮、高山正彦さんが亡くなって、早くも35年が過ぎた。独特なキレをもった語り口での高山さんのタンゴ解説は、一方の雄でソフトな雰囲気語る高橋忠雄さんともども、NHKの「リズム・アワー」をはじめ、諸々の番組やステージを通じ、昭和のタンゴ界を大きく盛り上げ、今日に続く多くのタンゴ愛好家を育ててくれた。

聞くところによると、高山さんはダリエソの向こうを張った飛行機嫌いで、労音の演奏旅行なども列車だけを利用するようにしていたという。したがって、あれだけタンゴに執心し、研究を続けながらも、惜しいことについぞアルゼンチンには行かずじまいであった。さらに当時は今のようにディスク・グラフィーや情報も乏しかったため、ずいぶん仕事の上でのご苦労も多かったに違いないが、いま遺されている著書やジャケット解説などを読むと、そうした困難な条件の中を、よくぞこれほどまでに真髓を把握し、正鵠を得た記述をされたと改めて感銘をふかくさせられる。

私が高山さんに最初に打たれたのは、昭和29（1954）年の暮れに出た初めての著書「タンゴ」（新興楽譜出版社）だった。俗にいう“アカ本”である。エクトル・ルイス・バテス兄弟の「タンゴの歴史」を下敷きにし、アルゼンチン帰りの中島栄司（後の東芝レコードのディレクター）氏の協力があった、と序文に述べられているが、全体が名文で貫かれ、しかも実に面白く、中身の濃い貴重な文献として当時の愛好家はこれをむさぼり読んだものだ。ことに各アーティストごとにつけられているキャッチコピーが巧みですっかり魅せられてしまった。たとえば、“チャプリンを感激させた／フリオ・デ・カロ”とか、“タンゴを涙で綴った／アンセルモ・アイエタ”、“「郷愁」の旋律に生きた／ファン・C・コビアン”、といったフレーズを、当時の多くのファンはそらんじてしまったほどだった。

さらに著書としては、昭和30（1955）年に東芝レコードがオデオン原盤を使って本格的にタンゴにのりだして後、相ついで上梓した次の2冊がある。昭和32（1957）年の「タンゴ～名曲とレコード」と、翌々年の昭和34（1959）年の「タンゴ随筆」（共に東京創元社）だ。まだまだ情報の乏しかった当時において、これらがどれほど愛好家の渴望を癒してくれたかわからない。



昭和32（1957）年の「タンゴ～名曲とレコード」と、

翌々年の昭和34（1959）年の「タンゴ随筆」（共に東京創元社）だ。まだまだ情報の乏しかった当時において、これらがどれほど愛好家の渴望を癒してくれたかわからない。

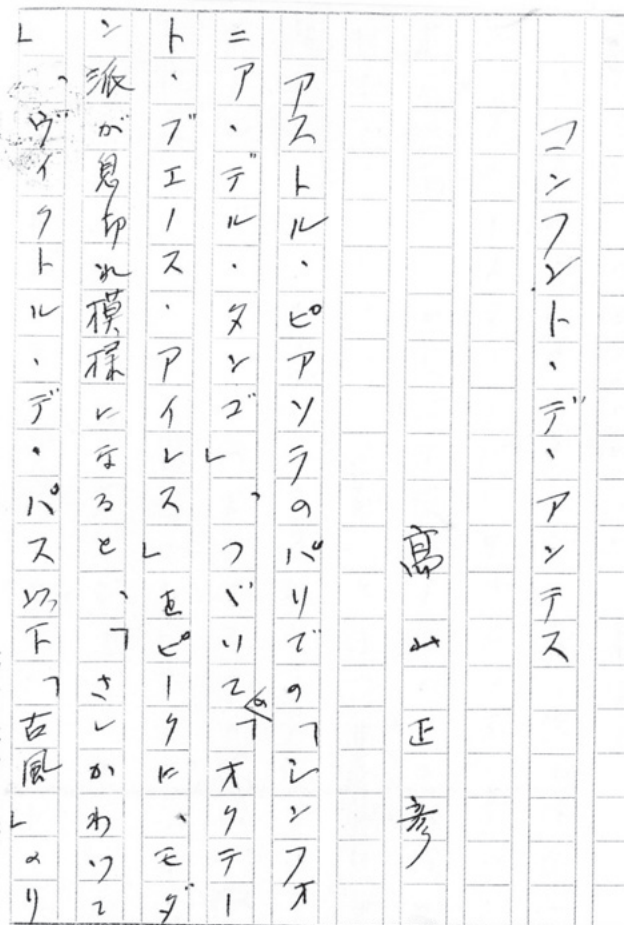
高山さんは、大岩祥浩さんの主宰する「ポルテニヤ音楽同好会」の常任解説者として、創設された昭和28年以降長年にわたり活躍された。論旨明快、かつユーモアを交えての歯切れのよい高山節での解説で、C.デイ・サルリヤ、A.トロイロ、J.ダリエンソ、そしてO.プグリエーセなど、今をときめくアーティストの新着のLPを毎月聴かせてくれたのだから魅力は満点、信濃町の真正会館をホーム・グラウンドにしたコンサートは常に満員で、昭和30年代半ばの最盛期には一時札止めになるほどの盛況だった。



(出典：ポルテニヤ音楽同好会 発足50周年記念誌 タンゴ・アルヘンティーノ特別号)

私も役員として、昭和34年（1959）年創刊の「Tango Argentino」の編集にたずさわり、毎月高山さんから「タンゴ夜話」の原稿を頂戴して、紙面を飾らせてもらったが、専用の200字詰め“高山正彦用箋”に、鮮やかなブルーブラックのインクで書かれた原稿は宝物のようで、今もその一部は大切に手元に保管させてもらっていて、時々取り出しては眺め、往時を偲んでいる。

大岩さんに誘われ、練馬区の桜台の高山邸にお邪魔してレコードを聴かせていただくようになったのは、その後間もなくのことだった。広いフローリングの部屋の壁側にあるレコード棚には、20枚入りの黒いケースがずらっと積み、話の合間に少しずつSPを取り出しては聴かせてくださるのが何より楽しみだった。最初は大岩さんと私の2人だけのことが多かったが、やがて6～7名にメンバーが増えコンサートの形をとるようになって賑やかになった。当時はま



高山正彦用箋

だ戦前の日本盤やオデオンなどの外盤も珍しく、毎回2人でお願いしてはそれらを聴かせてもらった。よくリクエストして掛けてもらったのは、C.オルティスの「ケハス・デ・バンドネオン」をはじめ、I.アルヘンティーナの「ダンサ・マリグナ」、Orq.Tip.プロビンシァノスの「ラ・カチーラ」などである。ところが、それが登場するのが決って終列車が気になる夜中の12時頃だったため、毎回落ち着かない気持で聴いたので、なにやらとても切なかったことを覚えている。その後これらは入手でき、今はいとも簡単に耳にすることが可能になったが、これらを聴くと、高山邸での楽しかった夜が懐かしく蘇ってくる。高山さんの戦前からの親友で、コレクターとしても知られた今は亡き三島の中村孝さんにはじめてお目にかかったのも、そんなある夜の高山邸でのことだった。



高山さんは、ご存知のとおり健筆家であると同時に、話術の名手でもあったが、もうひとつ凄いのが、実は当意即妙な“語録の達人”だったことだ。ユーモアで包んだシニカルなそれらは、ごく親しいグループの前ではとくに頻発し、思わず笑い、示唆に富む言葉にハッと考えさせられることが暫々だった。今でもそれらは鮮明に記憶に残っていて、時々思い出してはニンマリし、改めてその内容を考えさせられることが多い。思いつくままに、次にいくつかをあげてみる。

◆最近の演奏はやたら金銭登録機の音がする-----

これは、素朴でひたむきな往年の演奏を賛美する高山さんの真骨頂を示した語録といえる。

フィルポをはじめ、カナロやロムート、それに“パチョ”やティピカ・ビクトルなどの1920年代の演奏を聴きながら、いつも語っていたのは、“この連中の音を聴いていると、ろくに譜面は読めなくても、とにかくタンゴが好きで好きでしょうがない、という熱気がたまらなく胸に迫ってくる。ゼニカネ抜きでシャカリキにやる、タンゴってえのはこうでなくっちゃー”だった。それに比べ、最近の演奏はやたらと華美にこねくり回して、金のためにチャカチャカと演奏しているという気運がありありだ、ということがいいたいところだったのだと思う。

◆タイトル（曲名）は短いものほど優れている-----

これもゲアルディア・ビエハを愛するがゆえの高山流の極論といえよう。周知のとおり1930年代以降は名作詞家の登場ともあいまって、タンゴ・カンシオンが大きく花開き、歌謡調の作品が次々に発表される時代になった。したがってその内容の物語性もあって、タイトルは古典タンゴの「フェリシア」とか、「ロカ」「フリアン」「フェベス」「ロレンソ」といった、ワン・シラブルの明快なタイトルというわけにはいかず、どうしても内容説明調の長いタイトルになりがちであり、この傾向は1950年代あたりから強くなる。たとえば、ディサルリ自身の作品でプグリエーセも取り上げていた「No me pregunten por qué（なぜかと問わないで）」とか、H.スタンポー二作でディサルリが晩年に演奏している「Qué me van a hablar de amor（恋のことなどいわないで）」、といった風なものが多くなってきたが、こうした現象を総じて見た上で、やはり中身を含め、今のものより昔のタンゴはシンプルでよかった、とあえて言っているのだろう。もちろん「Lo han visto con otra（魅せられし心）」とか、「Te

aconsejo que me olvides (私のことは忘れて)」など、昔の作品の中にも、長めのタイトルながら優れたものがあることは十分に承知の上で……。

◆ディ・サルリは肌着に金をかけている-----

高山さんは、カルロス・ディ・サルリがことのほかお好きだった。研ぎ澄まされたスタカートと、純粹かつ流麗なレガート、これらが縦横に綾なして織り上げていくディ・サルリの演奏スタイルは、たとえようもなく聴くものの胸を揺さぶって止まない。とりわけ、1950年代初頭から亡くなるまでの数年間に残した演奏は、凄絶なまでに美しく、激しく、タンゴ美の極致を思わせるものがあった。

その魅力の根源を鋭く見抜いたのが“肌着”だ。つまり、目立たない部分＝メンバーに金をかけている、と高山さんらしい表現で言われたのだ。なるほど、BnにF.スコルティカティなど5名、そして注目のViに、R.ギサードほか、B.ベベールなど6名の腕利きを揃えて紡ぎだすアンサンブルは無敵だ。要するに、隠れた部分にしっかり金をかけたからこそ、あれだけ比類のない演奏が築き上げられたのだ、と改めて教えられた。

◆バレラの最近の演奏は饒舌に過ぎる-----

ダリエンソの元から独立し、1950年にパンパ・レコードでスタートした当時のエクトル・バレラは、あたかもダリエンソ・ジュニアのようで爽快な演奏で好評だったが、その後コロンビアに移籍し、「フェロン・トレス・アニョス（3年過ぎて）」や「フマンド・エスペロ（君を待つ間）」などのヒット作を出して以降、演奏全体が次第に派手になり、バレラ自身の長いイントロをはじめ、バイオリンのハイノートがやたらに途中でうねるなど、めまぐるしい展開になってきて、なにやら落ち着いて聴けない。それをいみじくも指摘したのが“饒舌”、つまり、この頃のバレラはどうもおしゃべりが多すぎる、というわけ。ところが昭和46（1971）年の4月に来日し全国公演が行われたが、レコードと違い、ナマだけあってこの派手さが逆に大向こう受け狙いでそれなりの効果を挙げていたのだから、また面白いものだと思った。

◆デッサンをしっかりやってないモダン派は始末が悪い-----

1955（昭30）年のペロン政権の失脚以降、タンゴ界も不景気風にさらされ、懐古調のコンフント（小編成楽団）で糊口をしのぐ一時期がつづいた。やがて新人たちがモダン派を標榜してこれに加わってくるようになったが、どうももうひとつピンとこない。音楽学校は出ているし、テクニックもほどほどにはあるようだが、何か足りない。それはなにか、“タンゴの心（魂）”であろう。それは飽くなきデッサンの積み重ね以外にないと、高山さんはあえて断言したのだった。これはタンゴを愛し、その語り部として生きるものにとっては、いつの世にも忘れてはならない至言というべきであろう。

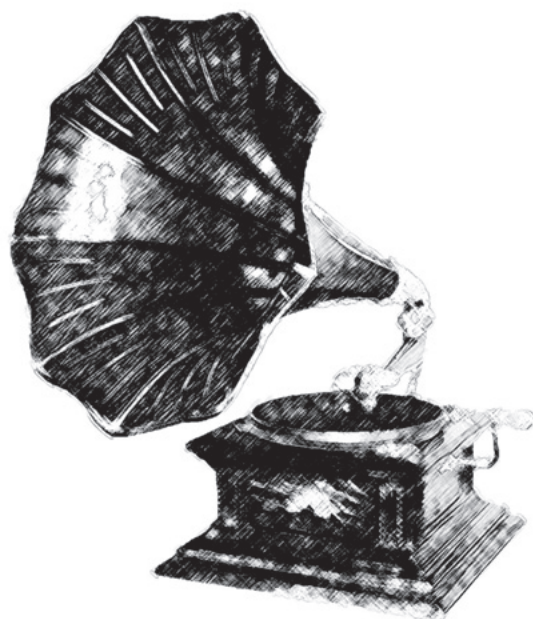
◆ダリエンソとデ・カロは功罪相半ばしている-----

これを話されたのは、高山邸での夜話のときだった。タンゴ界の両巨匠を真正面から捉え、その高い功績はともかくとして、あえてその陰になる部分をも見据えるというのは凄い、とそのとき思った。改めて言うまでもないが、ファン・ダリエンソは元々もっと素朴で穏やかだったタンゴのビート（打拍）を、ことさらに誇張してタンゴを大きく変えた。悪く言えば一種のタンゴのカリカチュア（漫画）

化で人気をあげたともいえよう。一方のフリオ・デ・カロはどうか。“タンゴもまた音楽だ”と叫び、この美名のもとに生涯をかけて革新の道を拓いたが、もともと単純で素朴な音楽タンゴを、複雑化し、難しくしたのも事実、と、あえてこれを突き放して述べたものといえよう。爾来、ものの表裏二面の見方を教えられる語録になった。

また、高山さんは語学の先生をされていただけに、解説の際などではファンの耳を捉える単語をよく使われた。最もお馴染みだったのは「トランキーロ（伊・tranquillo=落ち着いた）」で、お好きなディ・サルリのレコードの前などによく“全体がトランキーロな演奏の中でバイオリンが……”といったふうに使われた。また、「エピゴーネン（独・Epigonen=模倣者、亜流）」も、ダリエンソやプグリエーセなどの著名な演奏スタイルを真似る楽団を指して、しばしば使われたのを思い出す。“これはプグリエーセのエピゴーネン以外の何ものでもない”、といったように。

面白いのは、親しい人の前などでお仲間の高橋忠雄さんとの関係を口にされるとき、年齢の話をあえて言うのだ。“冗談言っちゃいけないよ、私は大正、高橋さんは明治の生まれなんだから”と。ことさらに自分のほうが若いのだというわけだが、これにはいつも笑ってしまうのだ。高山さんは大正元（1912）年9月の生まれ、高橋さんは確かに明治44（1911）年10月の生まれ。しかし、考えてみると実はその差はほんの僅か11カ月に過ぎない。これをことさら誇大に言うところがなんとも可笑しいのだ。お2人はタンゴの好みこそは少し違うものの、お互いに立て合い、ともに紳士としての温かいお付き合いをされていたのが印象に残っている。そして昭和40（1965）年の大岩、島崎、中島の共著による「タンゴ入門（音楽の友社）」出版の際、このお2人から懇切な推薦文をいただいたことを今でも大変ありがたく思っている。ともかく、昭和のタンゴを語るとき、決して忘れてはならないのが、偉大な先生たち。高橋忠雄、それに当の高山正彦のお2人だ。



高山正彦氏の思い出

河内 敏昭（談）（文責：齋藤 富士郎（一部補筆あり））

私と高山正彦氏との出会いは昭和30年頃だと思います。当時、ポルテニア音楽同好会のレコードコンサートが信濃町の真生会館で開かれており、そこに歌手の前田美知子さんも顔を出し、歌われることがありました。その頃の前田さんの伴奏ギター奏者は長谷川さんという人でしたが、ある時、長谷川さんが急に辞めることになり、代わりとして私がギター伴奏者の役を務めることになりました。そういう経緯でギターを通して高山正彦氏の知遇を得るようになったわけです。高山氏と前田さんと一緒に四国の宇和島でのコンサートまでお供したこともあります。当時はすべての旅程が列車（連絡船を含む）でしたので、大変でした。前田美知子さんは高山氏が育て上げ、世に出した歌手で、前田さんの一生は高山氏とともにあったようなものです。前田さんはヤマハホールのみを活躍舞台とし、高山氏のご逝去と共に彼女の歌手生活も終わったと言えるでしょう。前田さんはその後幼稚園の先生をされていると聞きましたが、今はどうしておられますか。

高山氏は戦後、練馬にご自宅を建てられました。大変広い間取りで、近所の人々はダンスホールでもできるのかと思ったそうです。高山氏のご自宅には前田美知子さん、菅原洋一さん、今井恵子さんなどが出入りして高山氏の指導を受けていました。この会は希望者が次第に増え、とうとう受け入れ曜日を男組（男湯）と女組（女湯）に分けることになったことは良く知られています。

高山氏はそれ以外にご自宅でのレコードコンサートも月1回のペースで開いておられ、大岩さんや島崎さんなどもそこに出入りされていました。島崎さんが良く言われていることですが、毎回、お気に入りのレコード—例えば、オルケスタ・ティピカ・ロス・プロビンシァノスの「ラ・カチーラ」のような—は終電ギリギリにならないとお出しにならないので、皆、ハラハラしたということです。

高山正彦氏の我が国のタンゴ界においてオピニオン・リーダーとして果たされた功績については今更言うまでもありません。それは何と云っても氏の豊富なSPレコード・コレクションが背景にあります。現在でこそ氏のコレクションを上回るコレクションの持ち主は何人も居られるでしょうが、アルゼンチンとの交流もままならない戦前、戦中、そして終戦後の我が国の状況下において、あれだけのコレクションを揃えるのは並大抵の努力では済まなかったはずです。実際、ご本人から伺った話ですが、ある時高さ1メートルを超える古レコード（SP）の山に、しかも3つの山に遭遇して、一枚一枚全部目を通されたそうです。それで結局何も見つからなかったということでした。ところが最後になって、下敷きの古新聞の下にチラと緑色のレーベルが見え、「もしや」と思って取り出したら、なんとそれがペドロ・マフィアの「タコネアンド」であったということです。まことに頭の下がる思いがしました。そうして築き上げた豊富なコレクションに基づいた高山氏のタンゴ論は到底余人の及ぶところではありません。

高山氏は豊山高校の英語の先生であったことからわかるように英語には大変堪能なことは良く知

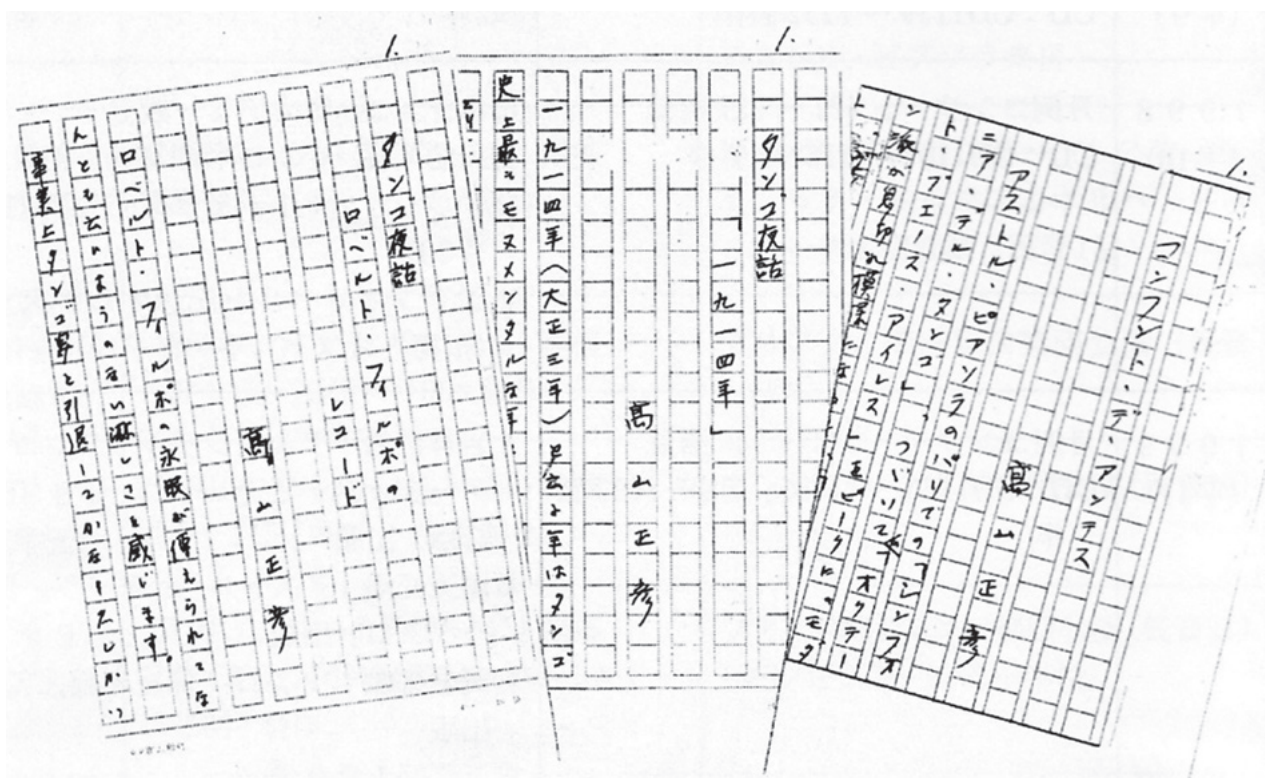
られています。一方、スペイン語については各種資料を読みこなすことには問題なかったと思いますが、あまり込み入った会話はお得意ではなかったようです。それとダリエンソと同様に飛行機が怖くて、結局、訪亜はされませんでした。

高山氏はあまりご自身のことは語られなかったので、ダンスがお上手であることもあまり知られていないと思います。高山氏の奥様は実は日本人とドイツ人の間のハーフでしたが、それもダンスがきっかけでお知り合いになり、ご一緒になられたということです。それとご自宅に何匹もの猫を飼っておられました。

日本を代表するタンゴ楽団のマエストロといえば早川真平氏と坂本政一氏で、お二人とも高山正彦氏と高橋忠雄氏のどちらとも親しかったと思います。しかしその接し方は対照的で、早川氏は高山氏を通じて労音の仕事などで精力的に活動を進められました。坂本氏はそういうことは無かったです。

(2012年11月5日)

高山正彦氏 筆跡



(ポルテニヤ音楽同好会 発足50周年記念誌 “Tango Argentino -EDICIÓN ESPECIAL-” より複写)



高山先生のことども

岩垂 司



1 ラジオ放送： 高山正彦という名前を初めて聞いたのは、昭和20年代後半のラジオ放送であったと思う。NHK第二放送で午後3時から30分の「リズムアワー」と言う番組があり、タンゴ担当の高山先生の他数人の音楽評論家の方々が選曲・解説を担当されていた。当時私は化学科の学生で、タンゴに関心を持ち始めていた頃だったので、時間になると実験を抜け出して携帯ラジオで放送を聴いていた。高山先生のタンゴは確か水曜日で、テーマ曲はピリンチョのチャラムスカだった。此処で当時最新のプグリエセ、トロイロ、デイ・サルリなどの演奏に初めて接した。ダリエンソも新録音のフェリシアやエル・インテルナードが出てきて、戦前録音のダリエンソと随分違うので暫く馴染めなかった記憶がある。この番組には、演奏の一部を聴かせて曲目と演奏者を当てるクイズがあり、別に賞品が出るわけではないが、お遊びとして面白い趣向であった。私も何回か応募して名前を読んでもらったことがある。応募者の常連みたいな人達が居て、蟹江さんもその一人だったと思う。この番組に「選曲・解説が主観的過ぎる」と言う人も居たようだが、これに対しては「個人に選曲とコメントを委ねる以上、主観的になるのは当然」と見解を述べておられる（「増訂タンゴ随筆」）。

昭和30年東芝音楽工業からのエンジェル・レコードの発売に合わせて、文化放送で「これがタンゴだ！」の放送が始まった。エル・ジョロンの演奏に乗ってホルヘ・カルダーラの“Éste es el Tango Porteño...”で始まり、高山先生の「皆様ご機嫌いかがでいらっしゃいますか...」と続く出だしは懐かしい。内容はエンジェル・レコードの新譜の紹介で、曲と演奏についての説明があり、タンゴに関する情報の乏しい当時にあっては、貴重な情報源であった。中に「スス・ファボリトス」という人気投票のようなコーナーがあり、放送開始からしばらくの間はデ・アンジェリスの演奏するクアンド・ジョラ・ラ・ミロンガが、一位を続けていた。ある時高橋忠雄先生が、「あんなことをしても売り上げには繋がりませんよ、高山さんは商売では素人ですね」と漏らされたことがある。三越社長ご子息の目から見れば商売に関しては素人に見えたのだろう。そのころ何処かで「高山先生の話は時間が極めて正確で、決められた時間内にきっちり収まる」と読んだことがある。定められた時間内に、必要なことを過不足無く話すのはなかなか難しいことなので、先生は天性の時間感覚に優れておられたのであろう。

2 レコード解説： 昭和20年代後半の時期に、我が国で市販されていたレコードは、戦前録音の原盤を使ったビクターとコロンビア、TK原盤のクリスマール、ミュージック・ホール原盤のマーキュリーなどであった。高山先生はビクターのライナーに解説を執筆されていた。その解説は作詞・作曲・演奏者の経歴から、曲の成立事情や構成、演奏時期の特徴にまでも及ぶ詳細且つ精密なもの

で、当時の私には難しすぎて、理解できないところが多々あった。それでも情報の乏しい時代だから、何とか理解しようと繰り返し読んだものである。

昭和30年からマイクログループ時代に入り、各社からSPと並んで45回転のEP、33回転のLPが発売されるようになった。高山先生はビクター、東芝両社のレコードの解説に健筆をふるわれた。EP、LPではジャケットの裏面に解説が書かれるようになり、紙幅が減ったので、内容は若干簡略化されている。先生の解説については、「作曲者の経歴や作曲された状況など曲・演奏に直接関係のないことを書きすぎる」という人も居たが、私には曲・演奏にかかわる状況を知る上での価値ある情報だった。

3 著作： 私の手元にある高山先生の著書は、「タンゴ」（新興楽譜出版社、昭和29年）、「タンゴ 名曲とレコード」（東京創元社、昭和31年）、「タンゴ随筆」（東京創元社、昭和34年）、「増訂タンゴ随筆」（東京創元新社、昭和43年）の4冊である。中で忘れがたいのは何と言っても「タンゴ」で、本書は、第一部「タンゴ史を飾る人々」、第二部「現代タンゴ界展望」という構成である。第一部はエクトルとルイス・バテス兄弟の「タンゴの歴史」を下敷きにしたタンゴ人列伝で、27人の古典タンゴ作曲家の伝記が綴られている。各人の名前の前に短い見出しが付けられて、仲間の集まりで見出しを言っただけで人名を当てる遊びをやったりしたものである。現時点で見れば瑕疵はあるが、大筋では史実に沿っており、現在でも資料としての価値は失われていない。なおこの列伝の一部はポルテニア音楽同好会の「季刊タンゴ」誌に再録されている。第二部は当時の現役オルケスタ39楽団の紹介と寸評である。ここに挙げられているのが1950年代の一流楽団と考えて良いだろう。本書はタンゴ情報稀少の昭和30年代初期の札幌ではバイブルのような存在だった。

「タンゴ 名曲とレコード」は当時市販されていたSPと昭和30年12月までに発売されたEP、LPを網羅し、アルファベット順に並べられた曲目ごとに、レコード番号と解説・寸評を付した労作で、316曲が対象となっている。今読み返してみても解説は適切、評価は正鵠を射ており、現在と違って曲目解説の適当な書物が無かったので、辞典的な役割をも果たしていた。これは著者も予想していたようで、目次の前のページにそのような記述があるほか、巻末に詳細な索引が付されている。ただ曲の並べ方については、単数定冠詞El、Laを除いた順番で並べられているのが、現在と違っている。私のタンゴ知識の基本的部分は「タンゴ」と本書によるところが大きい。エル・アマネセールの小鳥の鳴き声がバイオリンによるものであることも、この本で知った。この2冊は繰り返し読んだので既にカバーが無くなっていて、取り出して見ると、夢中になって読んだ頃の熱気がよみがえってくる感じがする。

上記2書が客観的な立場での説明・解説的な内容に終始しているのに対して、「タンゴ随筆」、「増訂タンゴ随筆」は、著者の感性と考えが出ていて、先生の個人的嗜好を窺い知ることが出来る。目次を見ると有名曲、タンゴ人の紹介からレコード小史、タンゴから離れた猫のことなど様々なことが取り上げられているが、ポルテニア音楽同好会のTango Argentino誌に寄稿した「タンゴ夜話」を採録した部分に、著者の心情が現れていて、「この人はこう考えているのか」と気づかされる。達意の文章と相まって、読み物としても面白く読める。

著書以外に先生は、各種音楽雑誌に多数の記事を執筆された。中でもTango Argentino誌に連載された「タンゴ夜話」は、この雑誌に限られた会員向けのものであるだけに、同好会での解説同様先

生の率直な気持ちが吐露されている。内容は、タンゴ時評、タンゴ人月旦、タンゴ人追悼、新着LP紹介、有名曲評など多岐に亘っていて、先生のタンゴへの関心の広さが覗かれる。中で一貫しているのは、タンゴの商業化によりタンゴ本来の精神が失われて行くことに対する憂慮で、これには多少の絶望感もあったようで、「残念ながらもうタンゴは滅びたと思っているわけですよ」（20周年記念誌）とも述べておられる。このようなタンゴの現状に対する悲観的な見方が、一部の人に後ろ向きの姿勢と受けとられることもあったようである。

高山先生は執筆以外に、座談会にも出席して大いに語られた。ある座談会でデ・カロの自伝出版が話題になった時の発言「それは大変だ、座談会どころでないよ」は、先生のデ・カロへの傾倒が思わず出てしまったと言うところであろうか。

4 ポルテニア音楽同好会： 高山先生に初めてお会いしたのは札幌で、昭和30年代中頃の事だったと思う。オルケスタ・ティピカ東京公演の司会者としてお出でになった機会に、札幌の愛好家数人で先生をお招きして話を伺った。ラジオでの話や著作の中に出てくる言葉で、分からないことが多くあったので、いろいろ質問した。内容は中央の方々ならば恐らく誰でも知っているであろうことばかりで、先生は「地方ではこんなことも分からないのか」と呆れたことだろう。

後に横浜に職を得てからポルテニア音楽同好会に入れて頂き、毎月の例会で常任解説者だった先生の話をお伺いするようになった。先生の話は明快且つ論理的であったが、時に雑誌やレコードの解説で執筆された内容と異なることがあった。それを質問すると「あれは提灯持ちだから」という返事だった。つまり同好会では遠慮なしに本音を述べたということなのだろう。同会50周年記念誌に島崎会長が書いているように、此処で先生はユーモアと皮肉を交えた独特の警句を連発された。曰く「金銭登録機の音がする（カナロ）」、「タンゴの漫画（ダリエンス）」、「タンゴの関西弁（ディ・サルリ）」、「全員が捻り鉢巻き（40年代のディ・サルリ）」、「肩幅の広い歌（ドゥラン）」、「ヨーロッパ股旅3人組（トリオ・アルヘンティーノ）」、などなど。今思い出しても卓抜な表現に感心させられる。ユーモアばかりではない、「タンゴのリズムを駄目にしたのはダリエンスとプグリエセだ」、「分かりにくくなるのが進歩ではない」、「ボンジオーニのミロンガは死にリズム」、「ダリエンスの演奏は穴ほこだらけ」などグサッと来るものもある。

やがて練馬の御宅にも伺うようになった。「増訂タンゴ随筆」にあるようにお宅には猫が居て、先生が猫を抱いて撫でておられたのが印象に残っている。お宅の集まりで、ある時先生から「君は歌が好きですか？」と訊かれたので、「何を言ってるか分からないので好きになれません」と答えたら、「それは間違いです。歌と演説は違う、演説は言葉が分からなけ



れば仕様がなくて、優れた歌は言葉が分からなくても人を感動させる、君は物事を理詰めに考えすぎから、もう少し楽な気持ちで歌を聴きなさい」と言われた。以後この教えを拳々服膺して、歌を楽しんでいる。

「タンゴ」の序文に書かれているように、先生はミステリーがお好きだったので、話がミステリー談義に及ぶことがあった。先生は本格推理が、私は冒険小説的なものが好きなのだが、広い意味でのミステリーの範囲なので、話を合わせてくださったのであろう。先生は変格物を含めて幅広くお読みになって居られたが、やはり本格ものが一番好きだったようである。そして「ミステリーは原文で読まなければならない」と言うのが持論で、E.S.ガードナーのペリー・メイスンものが話題になった時、法廷での「Now your witness」が邦訳の「反対尋問をどうぞ」では、言葉のリズムが失われて「法廷の緊迫感が伝わらないね」と力説しきりであった。同感であるが、私の英文読解力ではついて行き難いところもあった。だが先生は一切妥協せず、この面では頑固な方であった。

その後再度の在外研究を終えて帰国したときには、同好会に先生の姿はなく、またお宅に伺う機会もなかった。そして昭和52年訃報に接したのである。顧みれば先生の訶咳に接した期間は短く回数も多くない。だがそれは密度の高い時間であった。「季刊タンゴ」最終号の特集「私の好きなタンゴの10アーティスト」の中で高山正彦の名を挙げたのも、タンゴに眼を開かせてくれた恩人として高山先生の存在を欠かせないからである。

記憶を辿りながら高山正彦先生の思い出を纏めてみたが、何分にも古いことなので思い違いも多いと思う。不正確な点はお許し願いたい。



日本のタンゴ界の発展につくされた大先達、高山正彦氏が7月21日、肝臓ガンで逝去された。享年65歳。

高山正彦（たかやま・まさひこ）氏は大正元年9月11日東京本郷に生まれ八高を経て東京帝大文学部を卒業。終戦後、タンゴの解説、評論・普及活動に入られた。

「……それ警報だ、火タタキだ、ドンダリの粉の配給だ、という私としてはあまりなじめない時代がきて、そしてあわただしく去って、続いてヤミだ、GHQだ、新田交換だ、デンスケだ、英会話だというこれもずい分変テコな時代がやってきました。

その変テコの最中に、商業放送がぼつぼつ始まることになって、私もマイククロフォンの前でシャベル仕事をするようになりました。

当時、私は高等学校の英語の教師として前後を合算すれば「十年選手」に近い経歴を持っておりましたから、シモジモを相手に「有難いお話」をするゴ―慢不遜な習慣は、充分に身につけておりました。タンゴの方は、すでに自他ともに愛想をつかすほどの膏盲ぶり、ゲートルを巻いたまま、押入れに首をつっこんで、毛布をかぶってポーターブルを聞くという有様でしたからいささかの自信はありました。……」

（高山正彦著『タンゴ随筆』「自分の声」より。一九六八年創元新社増訂版）

その後は、レコードの企画、解説、放送番組の構成・司会、ステージなどで、日本で唯一のタンゴ専門家として活動されるほか、歌手やファンの育成および音楽家への助言などに、大きな足跡をのこし、日本のタンゴそのもの

しいのであります。ブエノスアイレスのタンゴ界の雑多なニュースを取りついでみても、それは必ずしも「現在のタンゴ」を語ることにほならないのであります。毎年わが国を訪れる「現在のタンゴ楽団」についてもほとんど語るべきことではないのであります。すでにタンゴ自らが現在について語るべきものを持たないのであります。そうだ

追悼 日本タンゴ界の大先達



高山正彦氏
逝去

の代名詞といえる存在であった。

タンゴに対しては、つねに毅然たる態度をくずさず、はっきりとした姿勢で後進の指導にもあたっていた。その見解に反対となえる人にも、氏のつらぬいたタンゴ観は大きな教訓となっていた。

「……考えてみれば「タンゴの今」について「語るべきこと」がきわめて乏

とすれば私自身が「現在を語らない」あるいは「語れない」ことはさほど悲しむにはあたらないので、語るべきものない「タンゴ」こそ自らを悲しむべきなのであります。しかし、そうだとすれば、それは私にとっても誠に悲しむべきことであります。」

（同書「タンゴ今昔」より）
ここ数年は執筆・解説活動からは遠

ざかっておられたが、東京ヤマハホールでの「ヤマハ・タンゴ・コンサート」の企画・司会はずっと続いていた。この日本のタンゴ歌手・楽団によるコンサートは、最初から高山正彦氏のプロデュースのもとに、20年以上もつづいてきた。最近、数カ月に一度というようなこともあったが、今年の1月に第165回のコンサートがひらかれ、これが、氏が司会をされた最後となった。5月のコンサートは、健康上の理由から休まれ、大岩祥浩氏が代理の司会をつとめた。

「高山先生は、ご両親が長命だったので、いつも自分は百歳まで生きると言っておられました。このごろは、18匹の猫とご家族と一緒に家にこもっておられました。亡くなったと聞いても信じられなかったほどです。死顔もすっかりした表情で、今にも「やあ冗談だよ」と言っただけで起き上がってくるのではないかと思っただけです。」

（最後まで高山氏の日曜日のタンゴ・レッスンを手伝ってきたギタリスト河内敏昭さん・談）

フィルポとディサルリを愛し、みずからのタンゴの道をつらぬいた大先達高山正彦氏——タンゴ・ファンはついでにご冥福を祈ろう。

高山 正彦氏 略歴



大正元年9月11日東京湯島（現・文京区湯島）に生まれる。旧制八高を経て、昭和13年東大文学部を卒業。新聞記者を振り出しに、戦中は公務員、戦後は豊山学園高校で英語科の教諭を務め、音楽評論家として独立する昭和28年まで同校に在職した。タンゴ愛好歴は学生時代から死去までの40余年に及ぶが、職業的活動開始は戦後からで、その広範囲にわたる活躍は日本におけるタンゴ普及の大きな力となった。

放送 NHK——昭和23年6月6日「中南米音楽の時間」マトス・ロドリゲス追悼特集の選曲と構成。

のちゲスト出演などを経て、昭和26年1月20日「ラテン・アメリカ音楽の時間」にDJ初出演。以後、「リズム・アワー」「ステレオ・リズム・アワー」など連続23年間レギュラー解説を務める。

ラジオ東京（現TBS）——昭和26年12月30日「ポルテニヤ音楽の時間」のレギュラー司会始まる。

翌27年「アルゼンチン・タンゴの時間」などに連続出演。

文化放送——昭和27年同局に招かれ「バースデー・コンサート」「タンゴのアルバム」「これがタンゴだ」などのレギュラー司会・解説を担当。

その他ラジオ関東、FM東海（現FM東京）、民放ローカル放送に出演。

レコード ビクター——昭和24年2月「アルゼンチン・タンゴ・アルバム」で初の選曲・解説。

東芝——昭和30年亜オデオン原盤によるエンジェル・レコードの企画、解説に参加。

その他ポリドールなどで選曲、解説多数。

ステージ わが国の各タンゴ楽団・歌手と帯同し、労音などで長期間精力的に活動。またヤマハ・タンゴ・コンサートの構成・司会は166回に及ぶ。

著書 「タンゴ」昭和30年5月1日新興楽譜出版社刊。「タンゴ名曲とレコード」昭和32年4月30日創元社刊。「タンゴ随筆」昭和34年6月30日創元社刊。「増訂タンゴ随筆」昭和43年11月29日創元社刊。

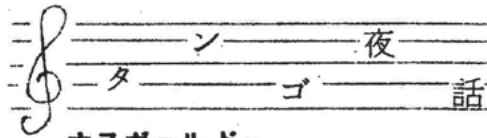
雑誌 「中南米音楽」「ミュージック・ライフ」など音楽雑誌への寄稿多数。

ポルテニヤ音楽同好会 昭和28年1月、会の発足と共に顧問、常任解説者に就任。

昭和47年9月以来脳血栓のため執筆などほとんどの活動を休止。昭和52年5月肝臓ガン・胃ガン合併症による練馬区鈴木病院に入院、薬石効なく同年7月21日午後2時30分同病院にて永眠された。

（本文作成協力 蟹江 丈夫）

（「高山正彦氏を偲ぶタンゴの集い」（昭和52年10月14日、主催：ポルテニヤ音楽同好会）で配布されたリーフレットから転記（編集部）



オスヴァルド・
ブグリエーセとの対話

第三七三六回

高山正彦

エッケルマンの「ゲーテとの対話」の向を張ったわけではありませんが、先頃或る会食の席でブグリエーセ楽団の一行と一緒にになった時に、ブグリエーセから「あなたのことを広くアルゼンチンのタンゴ界に紹介したいから経歴等を詳細に知りたい」と云う申し出があったので一日おいて次の日の夜宿舎のホテル・ニュー・ジャパンを訪れたのです。

その日の演奏会を終って漸く寛いだところのようでしたが夫人と一緒にロビーに降りて来ました。至って物静かですが心やすい態度です。ひと通りの挨拶がすむと、ブグリエーセは膝の上にノート・ブックをひろげ、ボール・ペンを握って「あなたはおいくつですか？結婚していますか？お子さんは？コメンタリストとしての仕事はいつ頃から始めましたか？」と矢継ぎ早やに質問を浴せかけて来ました。まるで新米の音楽記者とインターヴューしているようなあんばいで私もすっかりあわてしまいました。私を紹介する記事を書くための材料を集めるつもりなのでしょうが、この辺にもブグリエーセと云う人の律気な人柄がよくうかがえるようです。

質問に答えてばかり居たのでは私の方も商売になりませんから、程よきあたりで体をかわして私の方が「聞き手」に廻りました。

こんなところは私の「腕の良さ」でもあり「人の悪さ」でもありましょう。

「フリオ・デ・カロの楽団に居たことはあるのですか？」

「いえ。ありません。」

「私は久しい以前からあなたの音楽はフリオ・デ・カロの影響と非常に強く受けている

と考えて居りました。近年ではアルゼンチンのコメンタリストにもそのような考えかたの人が居るようですが？」

「なるほど。私はベドロ・マフィアがデ・カロから独立したときに迎えられてピアニストをつとめました。」

「しかし、あなたの音楽の方がマフィアより一層デ・カロ的だと思いますが？」

「私がフリオ・デ・カロの音楽が好きだからでしょう。」

こんな調子の問答がつゞきましたが、「一般にあなたの音楽は難解で高踏的であるとされているが私は、それでいてフレイジング等には古めかしい、タンゴ調を強く感じる」と云った時には夫人の顔を顧みてうれしそうにしていました。

フランシスコ・カナロについてはかなり偏った考え方を示していました。

「彼の音楽は1918年までだ。」

「それはどう云うわけか？私は少くとも1935年頃までのカナロは非常にすぐれていると思うが」

「いや、カナロの音楽が指導性を持っているのは第一次大戦直後あたりまでだ」と仲々頑固です。しかし作曲家としてのカナロはかなり高く評価していました。

一寸意外に思えたのは、マリアノ・モレスの才能を認めているながらアストル・ピアソラに対しては極めて冷淡なことです。

「ピアソラはフォルマリスト（形式主義者）ですよ。」と含蓄のある月且を附していました。「作品の数は少いがすぐれた作曲者」として、ホセ・マルティネス、グラシアーノ・デ・レオネ、リカルド・ブリグノロ等の名を挙げて居りました。

流石に当代一流のマエストロであり、長い経歴を持つ人だけにじっくり話し合えば色々面白い意見が聞けそうです。次の機会が楽しみです。

(了)

《神戸発・上田・山本タンゴ写真館(10)》

—レオポルド・フェデリコ楽団日本公演から—

＜1976年 関西地区公演＞

写真・資料提供：上田 登氏、山本 雅生氏



ステージ



レオポルド・フェデリコ



ステージ



オスカル・ブリートス



コンドルカンキ



O.ブリーツ (ピアノ)、L.フェデリコ



エミリオ・ゴンサレス



バイオリン左から：V.ブラーニャ、J.ボッテイ、
E.ゴンサレス、L.カンタフィオ、N.ファラーセ、
A.アンドラーデ



ルイス・カンタフィオ



左から：E.ゴンサレス、L.カンタフィオ、N.ファラーセ



左から：D.ロムート、J.アウマーダ、A.プリンシペ



ダニエル・ロムート



フリオ・アウマーダ



アントニオ・プリンシペ



オラシオ・カバルコス

レオポルド・フェデリコ楽団——メンバー紹介

ORQUESTA
LEOPOLDO FEDERICO

レオポルド・フェデリコ

Leopoldo Federico (バンドネオン・指揮)

「現代タンゴの巨人」「タンゴ史上最高のバンドネオン」など、いろんなキャッチフレーズがついています。彼が今まで日本に来ていないのは不思議なくらいです。他の楽団に客演した分も含めて、いちばん多くのバンドネオン・ソロを録音した音楽家——まさに「別格」の存在です。「タンゴのすべて」を日本のファンに聴かせると、すごい意欲をもちやっています。



ダニエル・ロムート

Daniel Lomuto (バンドネオン)

かつてセニョーレス・デル・タンゴ楽団のメンバーとして来日したことがあります。TV局やレコーディング・スタジオのオーケストラには欠かせない演奏家で、たいへん多忙な活動をしています。作品も多く、編曲指揮者としての才能も高く評価されています。

Daniel Lomuto
51-3-12

アントニオ・プリンシペ

Antonio Principe (バンドネオン)

(バンドネオン)

1944年にフェデリコがタンゴ界にデビューした時に、彼もプロとして同じ楽団で出ました。もう30年にわたる知己というわけで、たいへん呼吸が合っています。現在はカルロス・ガルシアのグループで独奏しており、すぐれた編曲者でもあります。



ルイス・カンタフィオ

Luis Cantafio

(第1バイオリン)

クラシック界で活躍する大物です。1948年から、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスのコロン劇場（世界3大オペラハウスのひとつ）所属ブエノスアイレス・フィルハーモニーのメンバーです。ほかに室内楽団でせいたり、独奏者としてリサイタルをしばしばおこなっています。



ニト・ファラーセ

Nito Farace

(バイオリン)

自身のオーケストラでも録音している編曲指揮者です。タンゴ界のほとんどすべての楽団のレコーディングに参加しており、特に故アニバル・トロイロの楽団にながく在籍したことはその実力を証明しています。作品もたいへん多くあります。

フリオ・アウマータ

Julio Ahumada

(バンドネオン)

1974年に「タンゴ・オール・スターズ」に加わって来日し、各地民音のステージで、すばらしく深い音色の「ラ・クンパルシータ」のソロを披露しました。現代屈指の名バンドネオン奏者で、クラシカルな味わいの楽曲にも個性を発揮しています。



ビクトル・ブラーニャ
Victor Brana (バイオリン)

1928年にワルツのヒット曲を生んだ、大ベテランの音楽家です。現在までに映画や舞台の音楽の、作・編曲・指揮、タンゴ楽団をひさいでの活動など、輝かしい足跡をのこしています。



Victor Brana

Oscar Britos

エミリオ・ゴンザレス
Emilio González (バイオリン)

1954年にファン・カナロ楽団、74年にタンゴ・オールスターズで来日、こんどが3回目です。フランチェーネ・ボンティエリ、ピアソラ、パッツ、ガルシアなど、常に一流のタンゴ楽団で演奏してきました。



Emilio González

ホセ・ボツティ
José Votti (バイオリン)

1945年からタンゴ界で活動し、「台風」の作者ドナートや、現代タンゴのアストル・ピアノラの楽団などに参加しました。1963年から、ブエノスアイレス・フィルハーモニーのメンバーで、すべての音楽分野で活動しています。



オスカル・ブリートス
Oscar Britos (ピアノ)

1975年にレオポルド・フェデリコ楽団に加わりました。1948年からプロとして活動しており、ジャズやラテンの楽団で主に演奏してきました。オルガンの名手でもあります。編曲者としても知られ、タンゴやミロンガの作曲もしています。



アルマンド・アンドラーデ
Armando Andrade (バイオリン)

現在いつもボツティと一緒に演奏活動をしている音楽家で1928年にプロとしてデビュー。1960年からブエノスアイレス・フィルのメンバーです。タンゴ、クラシック、映画音楽など、多方面で演奏しています。



オラシオ・カバルコス
Horacio Cabarcos (コントラバス)

1944年からタンゴ界で活動しています。ほかに、クラシックの楽団でも演奏し、教授としても優秀です。1970年からレオポルド・フェデリコのグループに参加し、彼の最良の理解者です。

鈴木 忠夫 (姫路市) さん

聞き手 西川 薫

西川 鈴木さんは以前から継続的に機関誌にレポートを寄せておられ、お名前は存じ上げております。今日は色々なお話を伺いますので、よろしく願いいたします。

鈴木 こちらこそどうぞよろしく。

西川 鈴木さんは姫路中南米音楽愛好会を主宰されるベテランのタンゴファンでいらっしゃると思いますが、まず、会との結びつきや活動状況などをご披露願えますか。

<忘れてはならない先達の功績>

鈴木 私と姫路中南米音楽愛好会との縁は先ず会の発足当初からお話ししなければなりません。会の結成は昭和30年10月でこの顛末はタンゲアンド13号に当会元会長の井上潤さんのインタビュー記事があり、詳細に会の成り立ちを語って11名のタンゴ好きによって結成されたとありますが、井上さんも私もそして、同じNTA会員で弟の鈴木忠昌もその一人です、現在当会に残っている発起人はこの三人です。

当時私はタンゴに関してほとんど知らなかったのですが発起人会仕掛け人の三木定夫さんの人柄にひかれてずると今に至ってしまいました。三木さんは平成3年に亡くなりましたが当会に大きな足跡を残されました。井上さんのインタビュー記事と重複しないようお話ししますが三木さんは私共より15歳くらい年長で早稲田大学在学中より当時の



井上潤さん、鈴木忠昌さん、鈴木忠夫さん、山本雅生さん
(写真提供：吉澤義郎氏)

音楽雑誌にレコードや演奏会の論評を寄稿され、高橋忠雄氏やホルヘ的場氏とも親交があり、目賀田男爵邸にも出入りされた、地方都市の姫路にあっては稀有な経歴を持ち、又幅広いジャンルのレコードを所蔵されて特に日本で戦前に発売されたアルゼンチンタンゴのSPレコードはほとんど網羅されていたようです。当会は此の三木コレクションをその後の例会の音源に大いに活用させて頂きました。三木さんは温厚な紳士でしたが事音楽に関しては妥協を許さない厳しさを持ち、「人に感銘を与える音楽は品格を備えているべし、タンゴもまた然り」というのが持論でした。当会は三木定夫さん抜きでは成り立ちも歴史も語ることはできません。

西川 三木さんの音楽に対する姿勢が貴会の理念でもあるわけですね。では、活動についてお伺いしますが…

鈴木 当会の通常の活動はレココンによる月例会が中心ですが、その他に創立30周年より5

年ごとを節目にコンフントやオルケスタを招いて演奏会を開催していましたが、何分会員の高齢化と減少に抗しきれず、50周年記念特別例会を最後にライブの開催は休止中です。

当会は「中南米音楽愛好会」と称している通りタンゴにとどまらずキューバ、メキシコ、等のラテン音楽、南米全般のフォルクローレ等々かなり広いジャンルの音楽を例会で取り上げてきました。しかし今はタンゴのコメンテーターだけになってしまいました。月例会は、翌年の開催日とコメント予定者表を年末に作成し、有無を言わず押し付けています。甚だ乱暴ですが皆さん協力して下さるので助かります。処がこれでも高齢化には勝てず、昨年から例会を偶数月だけの隔月開催にしました。

西川 次年度の年間スケジュール、人選を前もって計画されるということは世話役が大変でしょうが、会員にとっては予め年間予定に組み込めるというメリットがありますね。さて姫路の会と神戸ポルテニア音楽同好会との交流については…

鈴木 神戸ポルテニア音楽同好会と姫路中南米音楽愛好会は、兄弟のようなお付き合いをお願いしています。しかしいつ何がきっかけだったか昔のことで全く記憶にありません。神戸、大阪あるいは京都などで演奏会があれば当会会員が纏まって出かけると、そこに必ず神戸の方々もいて挨拶を交わすうち段々打ち解けて一方がイベントを企画すれば他方は必ず応援し、新年会も合同で盛り上がるなど同県内の距離的近さもあって急速に親密の度合いを深めました。勿論山本雅生会長はじめ神戸の方々のお人柄に負うところも大です。

神戸ポルテニアの方々の根城はJR三ノ宮駅に程近い「サロン・ド・あいり」という酒場とも飯屋ともつかぬ店で、グランドピアノ

がデンと奥に鎮座し小規模なライブが可能な上、最新のAV機器にクレデンザまで備えた不思議な店で、神戸ポルテニア主催の小さなライブとか、打ち合わせなどで私共もよくお邪魔しています。あ、それから此の店のママの福原初子さんもNTA会員です。年2回の「関西リンコン」もここで催されます。

西川 その「関西リンコン」について詳しくお話を聞えませんか。

＜関西リンコン立ち上げの経緯は＞

鈴木 関西リンコンの誕生には先日ご逝去された滋賀県草津市の芝野史郎さんの尽力が有ったればこそ、と信じます。平成15年6月に「サロン・ド・あいり」で神戸では初めてのNTAの「タンゴセミナー」が開催され、東京から島崎さん、蟹江さん、山本久子さんが来神されましたが、初めて中央からのゲストを迎えて大いに盛り上がりました。この催しの仕掛け人が芝野さんで、この結果を見てこの場所での「関西リンコン」開催の構想を得られたのだと思います。神戸、大阪、姫路など関西のNTA会員に「来年はここで関西リンコンをやろう」と云われました。山本会長や私共は寝耳に水で、慌てて我々には東京のような皆さんに発表出来るような研究成果もないし、聴いて頂くような珍盤もないからプログラムの組みようがないと云うと、芝野さんは「始めのうちはオレが面倒見よう」とプログラムの作成からSPレコードやビデオテープを草津の自宅から担いでくるのまで全部一人でやって下さって、平成16年3月28日第1回「関西リンコン・デ・タンゴ」が開催されました。

以後芝野さんがメインテーマを示し関西勢が部分的に補佐する方式で第7回迄開催しましたが、此の打ち合わせの折に芝野さんから

「私はこの辺で手を引くので後は神戸と姫路で継続しなさい」と云われ、「第8回関西リンコン」以降は山本会長を軸にNTA本部と来神されるゲストの選定をお願いしたり、関西会員で分担するプログラムを決めたり四苦八苦しなからやっています。山本会長にはメインとなって動いて頂かざるをえませんので、私としては及ばずながら、山本会長の肩の荷をなるべく軽くして差し上げるのが、義務と思っています。

西川 点火したのは芝野さんで、赤々と燃えるたいまつにしたのは会員皆様ですね。ところでご出身は東京とのことですが、この辺りで改めて自己紹介をお願いします。タンゴとの出会いを含めまして、どうぞ。

<電波少年、目から鱗>

鈴木 生まれは東京ですが今さら「江戸っ子でえ」とは言えない位関西暮らしが長く、今では言葉も関西弁のほうが話しよいです。東京で物心ついたときには目黒区宮前町(現八雲)に住まいし、小学校は八雲小でした。5年生の時に逗子に転居し戦時中は逗子で過ごしました。終戦後父の転勤に伴って姫路に転居しました。その当時は全くタンゴとは無縁で私はもっぱら短波放送を聴くのに夢中で、庭に竹竿を立ててアンテナを張り自作の微動ダイヤル付きラジオに嘯り付いていました。そのうち小さなレコードプレイヤーをラジオにつないでレコードを聴くようになり、必然的に大音量高忠実度を求めて種々の真空管アンプを組んではバラシを繰り返すようになりました。ところがこの頃弟の忠昌がタンゴのレコードを買ってくるようになり、ダリエンソだかランコだか私には無縁のひどい音質の代物を私の労作アンプで聴いて悦に入っている様

子、音の悪いものうちには持ち込むな、と云いたくなつたある日、忠昌が買ってきたレコードの音を聞いて飛び上がりました。それは戦後のアルゼンチンで録音されたタンゴが、初めて日本で発売された第1号と云われるクリスマールレコードで演奏はクリストバル・エレロのセステート、曲はオルガニート・デ・ラ・タルデでした。これは私のタンゴへの認識を全く変えるものでした。これ以後マーキュリーからMHのディ・サルリが出たり、少し遅れて東芝エンジェルレコードからプグリエーセが出る頃には完全にタンゴの魔力に取りつかれ、録音の良し悪しは二の次三の次になりました。最初に当会発足時には私はタンゴについて何も知らなかったと云ったのは、こういう道草を食っていたからです。

西川 忠昌さんが先にタンゴにのめり込んでいたわけですか。ではタンゴの魔力に関連しまして、鈴木さんはバイオリン奏者・演奏に特別な愛情を寄せておられますが、その辺りの思いを披瀝してもらえますか。

鈴木 私はタンゴの標準楽器の中で、独奏で最もタンゴの表現に適しているのはバイオリンだと思っています。レガートでのメロディも好いですが、スタカートで刻むタンゴのリズムとか、ソリストの腕の見せ所オブリガート・ビオリンの名演には思わず引き込まれます。好きなバイオリニスタは、バルダロ、フェラサーノ、ニチューレ、プグリッシ、その他です。オルケスタにあってバイオリンが下手では他がいかに優秀でも全てぶち壊しで、オルケスタのグレードはバイオリンで決まるというのが私の持論です。

西川 では、核心に触れますがお好きな傾向とか、お気に入りのレコードなどはどのようなものを…

鈴木 好みの傾向はかなり雑食性なのですが、

しいて言えば古いもの、第一のタンゴ黄金時代が最後の光芒を放っていた20年代末から30年代初頭頃の演奏にひかれます。沢山の楽団や歌手が生き残りをかけて腕を競いまさに玉石混淆、今日忘れ去られている名曲が多数生まれ、演奏技術も向上し、電気録音によって音質も格段に良くなり、此のあたりがタンゴの一つの完成点、あるいは終点だったのではないのでしょうか。第二のタンゴ黄金時代の頂点もあるでしょう。しかしこの二つの頂点は別物だと思います。独断と偏見の御託を並べて、申し訳ありません。寝言だと思って下さい。

お気に入りや絞込みは甚だ苦手なのですが、日頃よく聴くものとしてはJ. マグリオ、ティピカ・ビクトル、近年のものではパンパ時代のH. バレラとかセステート・タンゴが分離するまでのO. プグリエーセなどです。



西川 今挙げた楽団は活動期間が長くこのことはまさに一流の証ですね。それではこれからの抱負、夢などを。

鈴木 この年になって、抱負とか夢は？と云われると喜ぶべきか、笑って受け流すべきか迷います。そこで常々タンゴについて思うことを述べてみますと、一番気がかりなのはタンゴファンの高齢化ですが、これには如何とも仕様がありません。若い後継者が出てくることが望まれます。タンゴは不滅です。何時の

日か若々しい感性に満ちた復活を信じます。

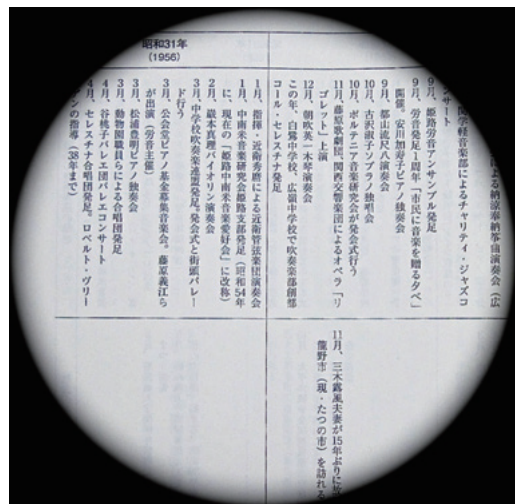
西川 200~300年前のクラシックが今でも愛されているように、タンゴも脈々と受け継がれて欲しいものです。最後にアカデミーに対するご意見、ご要望をどうぞ。

<機関誌に対する感慨>

鈴木 私のように只聴くだけのタンゴファンにとって「TANGUEANDO EN JAPÓN」は貴重な資料の泉で、中には「猫に小判」的なものもあってこれはこれで有難く拝んでおります。執筆陣の方々の絶え間ない資料収集や分析のご努力に、最大の敬意と謝意を捧げます。

副機関紙「Tangolandia」は会員各位の打ち解けた随筆や思い出話が面白く、お名前だけは存じていると「へえあの人が」と親しみを増したりします。此の正副機関紙は私共遠隔地の会員にとって重要な連絡橋だと思います。また今年の「NTA全国会員の集い」の映像のDVDが貸し出されましたが、これも本部と地方をつなぐ好い手段だと思います。

西川 来年の「全国会員の集い」は3月3日(日)です。時間が取れましたら是非お出かけください。今日は有り難うございました。



産声を上げた姫路中南米音楽愛好会の前身「姫路の戦後音楽史」～年表より抜粋

A、バカレーサ／C、E、フローレス／M、ロメーロ

高場 将美
Masami Takaba

アルベルト・バカレーサ Alberto Vaccarezza

バカレーサという名字はたぶんイタリア北部（リグーリア州？）のもので、「ヴァッカレッツァ」と読むべきだが、この言語に強いブエノスアイレスっ子も、そこまで正しくは発音していない。彼は、イタリア移民の二世として、1886年にブエノスアイレスのアルマーグロ地区に生まれた。

彼は劇作家として超有名人だった。大衆的な演劇ジャンル《サイネーテ》の作者の「最高峰」とされ、劇作家協会の会長もつとめる重鎮になった。サイネーテというのは、18世紀にスペインに発生した喜劇のジャンル。アルゼンチンでは、ブエノスアイレスの場末を舞台にした楽しいメロドラマになり、サイネーテ・クリオージョ（またはポルテーニョ）とも呼ばれる独自のジャンルをつくったが、バカレーサは、その創始者とまで呼ばれる巨匠なのである。アマチュア劇団の作者だったバカレーサは、1911年にプロの劇団に認められ、生涯に200本ものサイネーテの脚本を書いた。



サイネーテの舞台はコンベンティージョ（移民の共同住宅）で、そこに類型的な人物がワサワサと登場し、見ないうちから筋書きも結末もわかるような恋物語が展開する。それでも、とても人気があった。バカレーサは、移民たちの話しぶりを生き生きと写した（なまりを誇張した面もある）セリフをちりばめ、ブエノスアイレスならではの、しゃべりまくるお芝居で、すごい人気作家になった。ユーモアもたっぷり。彼は自分のこともバカにして、次のようにサイネーテを要約している。

「サイネーテのレシピ：所＝コンベンティージョの中庭。登場人物＝家主がわりのイタリア移民ひとり、怒りんぼのスペイン移民ひとり、女の子ひとり、ませた若僧ひとり、ナイフをもったやくざもの2人。幕が上がると、恋の口説、ひとつの情熱、衝突、嫉妬、口論、決闘、ナイフ、大騒ぎ、発砲、救急車、警官、幕」

こんなのを二百も書いたバカレーサの、もっとも有名な作品は、1929年の『パローマのコンベンティージョ El conventillo de la Paloma』で、ロングラン、数回の再演（今日でも改編して上演されることがある）、映画化もされた（映画脚本にも彼が参加した）。

バカレーサは、後年はラジオ番組の脚本、そしてガウチョの人生訓を述べたわかりやすい詩を書いて朗読し、こちらでも人気者だったようだ。1959年8月6日没。

サイネーテは、本来は音楽劇ではない。でも、ブエノスアイレスの場末が舞台なら、タンゴが聞こえなくてはサマにならない。バカレーサの書いた最初のタンゴ歌詞は、サイネーテ『びんぼう人が楽しむとき』に使った『忘却の杯 La copa del olvido』だった。作曲は、エンリーケ・デルフィーノ

Enrique Delfino (1895 - 1967)。酒場で嘆いている失意の男の告白……ありふれた題材？ そうなんです、この曲は、じつは、この状況設定による「史上最初の」タンゴ曲なんです！

*“¡Mozol, traiga otra copa / y sírvase de algo / el que quiera tomar, /
que ando muy solo y estoy muy triste / desde que supe la cruel verdad . . .”*

(給仕！ もう1杯もってきてくれ。飲みたい人は、なにか上がってください。わたしは、とってもひとりぼっちになっていて、とっても悲しんでいるんです、この冷酷な真実を知ったときから……) バカレーサならではの語り口が巧みで、わたしが大好きなのは、1924年の(デルフィーノ作曲)『タラーン・タラーン』だ。舞台というより映画シナリオのスタイルの(もちろん韻文だが)歌詞。市電が、トゥクマーン通り(コリエンテス通りに平行して北側の2本目)を東へ下って行く。コロン劇場の横を通って、歓楽街を通り過ぎ、港のほうへ……当時はビルもなかったので、港の船とかが遠くに逆光で見えたようだ。(なおこの歌詞は、歌手カルロス・ガルデル Carlos Gardel (1905 - 1935) が修正したヴァージョンによった。ほんの小さなことだが、原作よりはるかに良くなっている)

*“Talán, talán, talán... / Pasa el tranvía por Tucumán. / “Prensa”, “Nación” y “Argentina” /
gritan los pibes de esquina a esquina. / “Ranca e mañana, torano e pera” /
ya viene el tano por la vereda. / Detrás del puerto / ya asoma el día, / se van los pobres / a
trabajar, / y a casa vuelven / los calaveras / y milongueras / a descansar”*

(タラーン、タラーン、タラーン……市電がトゥクマーンを通って行く。《プレサ》《ナシオン》《アルヘンティーナ》(以上は新聞の名前)——新聞売りの坊主たちが街角から街角へと叫んでいる。「オレンジにバナナ、桃と梨」——早くからもう果物売りのイタリア男が歩道をやってくる。港の後ろのほうに、もう朝の光がのぞいてくる。びんぼう人たちは行く——働くために。そして家に帰ってゆくのは、夜遊び男たち、そしてキャバレーの女たち——体を休めるために)

……この市電には、もう移民してきて30年というフワンおじいさん(昔は50才過ぎれば老人!)が乗っている。彼の娘は、悪い男にそそのかされて家出してしまったのだそうだ。そして……

*“Pero al llegar cerca el río/ un auto abierto se ve cruzar, /
en el que vuelve la desdichada / media dopada de humo y champán. /
El pobre viejo / la reconoce / y del tranvía / se va a largar, / pero hay amigos / que lo
contienen /
y el auto corre . . . / no se ve más. / Talán . . . / talán . . . / pobre Don Juan”*

(河のそばに近づくと、屋根を開けた自動車が前を横切るのが見える。そこに乗って、あの不運なむすめが帰って行く、タバコの煙とシャンパンで、麻薬にうかされてようになって。あわれなじいさんは、彼女がそうだと気がつく。そして電車から飛び降りて追いかけてしようとする。でも友達たちがいて、彼を引き止める。そして自動車は走って行く……もう見えなくなった。タラーン……タラーン……かわいそうなフワンおじいさん!)——なんと巧みなシナリオ!(当時は無声映画でした)

セレドニーオ・E・フローレス Celedonio Esteban Flores

1896年8月3日生まれ、移民労働者の街ビージャ・クレスポ地区で育った。彼の父親は活版工で、セレドニーオは子どものころから本に親しみ、とくにロマンティックな詩を愛読した。ヴァイオリンと絵を習いたくて学校に行ったが数カ月で飽きてしまった。ボクシングも大好きで、これは長くつづけた。1923年に、国内選手権で2位という記録が残っている。フェザー級で、リング・ネームは《キッド・セレ》！ このキッドは、すぐ肥る体質だったので、その後は活躍できず、トレーナーに転向したという話だ。彼は一生、ギャンブル・マニア（競馬ではなくカード・ゲーム）で、ボヘミアンだった。国有鉄道の職員になり、少なくとも1920年代のなかばごろまでは商社の会計をしていた。夕方から翌朝まで自分の時間がたっぷりあるので、詩を書いたり、酒場めぐりをすることができた。



さて……セレドニーオと歌手カルロス・ガルデールに関する資料は、長いあいだ作詞家のF・ガルシア・ヒメネスの著作しかなかった。この本は、ガルデールの死後、彼の初期の相棒の歌手ホセ・ラサーノが語ったことを書いたもので、ガルデールの遺産の配分にあずかろうとする

ラサーノに都合のいいように数々の事実が改変されている。以下は、90%以上確実な事実を記す。

セレドニーオは、1914年に、ある新聞にルンファルド（ブエノスアイレスのスラング）による詩を書いて投稿し、採用されて5ペソをもらった。この詩は評判がよく、何回か再掲載され、それが1910年代の末にガルデールの目に留まった。彼は、この詩に、節をつけてうたい、ギタリストのホセ・リカルド José Ricardo (1888 - 1937) が前奏を作って、ふたりで録音した（1921年初め）。歌のメロディも前奏も、フォルクローレの伝統に根ざしている。題名は『マルゴ Margot』——「マルガリータ」という名の、場末の女の子が、キャバレーで働くようになって変身し、名前もフランス語の愛称「マルゴ」に変えてしまったという一節から、この題名にした。セレドニーオの詩は、8音節×10行が1節の、伝統的な語り物の民衆詩でいちばんむずかしい（でも一般的な）様式で書かれていた。ガルデールは一部削除、また単語を改変・編集して、こなれた歌詞に直している。

*“Desde lejos se te manya, / pelandruna abacanada, / que has nacido en la miseria /
de un cuartucho de arrabal, / hay un algo que te vende, / yo no sé si es la mirada /
o ese cuerpo acostumbrado / a las pilchas de percal.”*

（遠くから見ても、おまえだとわかる——金持ちになった、だらしのない女——おまえは場末の汚い小部屋の貧困の中に生まれてきたんだ。どこかにおまえの正体をバレさせるものがあるよ。その目つきかなあ？ それとも、ペルカール（木綿のプリント生地）のドレスに慣れた、その体つきか）

セレドニーオは、こんどは、歌うための詩を書き（つまり「作詞」ですね）、ガルデールのところに持ってきた。前と同じむずかしい様式で、前よりも長い詩だったが、ガルデールは省略も改変もせずに録音（1923年前半。27年に音質も表現も進歩した再録音）。ガルデール作のメロディも、リカルドによるギター前奏も、前より魅力的な『マノ・ア・マノ（五分と五分）Mano a mano』である。

歌のタンゴの超有名曲だ。やはりキャバレーで働き、金持ちの情婦となって高級な生活をしている女性に歌いかける。「かつてほんとうに愛し合っていたおまえが、もしまた運命がくるって苦しい境

遇になったら、わたしはいつでも、おまえの助けになるよ」という人間味が、ガルデールの気に入ったところだろう。彼はつねにタンゴの歌の品性を保つ責任をみずからに課していた。

セレドーニオの歌詞で、わたしの好きなのは『アジャクーチョ通りの小部屋 El bulín de la calle Ayacucho』だ（1923年初演。作曲はバンドネオン奏者ホセー・セルビーディオ José Servidio）。アジャクーチョ通りは、住宅地にある、ふつうの道路。セレドーニオは、当時ここに1部屋借りていて、金曜日の夜は、フォルクローレの歌い手たちやギタリストなど集まっていたそうだ。男たちのくつろぎの場だった。常連の歌手のひとりの実体験が、『マノ・ア・マノ』に反映されているという噂だ（セレドーニオ自身は女性を追いかける華やかなタイプではなかった）。とにかく、この曲には、「ガルソニエー」と呼ばれた、男性の隠れ家的な貸し部屋の雰囲気がみごとに描かれている。

“El bulín de la calle Ayacucho, / que en mis tiempos de rana alquilaba, / el bulín que la barra buscaba / pa' caer por la noche a timbear... / El bulín donde tantos muchachos / en su racha de vida fulera /

encontraron marroco y catrera, / rechiflado parece llorar...

El Primus no me faltaba / con su carga de aguardiente / y habiendo agua caliente /

el mate era allí señor. / No faltaba la guitarra / bien encordada y lustrosa, /

ni el bacán de voz gangosa / con berretín de cantor.”

（アジャクーチョ通りの小部屋、わたしが、いっばしの遊び人だったころ借りていたところ。仲間たちが目指してきた小部屋、夜にギャンブルするために。小部屋——そこで、あんなに何人もの若者たちが、貧乏人生の突風にやられたとき、食べるものと寝る所を見つけた——その小部屋は、今は変わり果てて、まるで泣いているみたいだ。

プリムス（簡易ストーヴの商品名）はいつでも役に立ってくれた、サトウキビ酒を燃料にして。それで熱いお湯があったから、マテ茶はそこでは殿様だった。ギターが必ずあった、足りない弦はなく、ピカピカに磨かれて。ザラザラ声の金持ち男が必ずいた、気持ちは歌手になりきって)

セレドーニオは、1926年ごろから数年間、女性歌手ロシータ・キローガ Rosita Quiroga (1896 - 1984) の専属作詞家となった。そのため、キローガが買い取った『ムチャーチョ Muchacho』(作曲は、ヴァイオリン奏者・指揮者ドナート Edgardo Donato (1897 - 1963)) をガルデールは歌えなかった。また、ガルデールは、セレドーニオの最高傑作のひとつ『コリエンテス・イ・エスメラルダ Corrientes y Esmeralda』(作曲プラカーニコ Francisco Pracánico (1898 - 1963)) も録音しなかった。「若い娘がガルデールの姿を夢に見る」という歌詞は本人には歌えませんね。

セレドーニオはたくさん歌詞を書き、一流の音楽家たちの作曲で、多くがスタンダード曲になっている。タンゴの歌詞も含む詩集『泥をはねかしながら Chapaleando barro』(29年)、『オルガニートが通り過ぎるとき Cuando pasa el organito』(35年)は、場末とそこの人々、つまりタンゴの世界を浮き彫りにして、広く愛読された。時代が変わった後も、歌手フーリオ・ソーサ Julio Sosaが『ラ・クンパルシータ』を伴奏に、彼の詩の1篇を語って、若者たちをも感動させた。

セレドーニオ・フローレスは、1947年7月28日没。もっとも価値高いタンゴ作詞家のひとりだ。

マヌエル・ロメーロ Manuel Romero

マヌエル・ロメーロ（1891年9月21日生まれ）の両親はスペイン南部アンダルシア地方の出身だ。マヌエル（この名前だけでスペイン系とわかる）は、兵役がわりに陸軍の蒸気機関の学校に入り、卒業後もそこで働いた。その一方で、人気週刊誌に、街の探訪記事を書いて、文才を発揮し、読者の評判も良かった。やがて新聞記者になり（蒸気機関の仕事は継続）劇場担当にされた。そのうち「こんな芝居の台本ならわたしにも書ける」と、大衆演劇の脚本家に転向した。1919年に初の劇作・上演。そして1921年末に、すでに一流の脚本家だった、スペイン生まれのバジョン・エレラ Luis Bayón Herrera（1889 - 1954）と、サイネーテ『場末のタイタ（他人を支配したがる乱暴者）El taita del arrabal』を合作、同名の挿入歌の歌詞を書いた。これがロメーロのタンゴ作詞第1号である。作曲は、スペイン人ピアニスト・指揮者で、後に国際的な存在になるホセ・パディージャ José Padilla（1889 - 1960）。この歌詞はとてもクダラナイが、クダラナイほうが客受けするのもかも……。



*“Pobre Taita, muchas noches, / bien dopado de morfina, / atorraba en una esquina /
campaniao por un botón. / Y el que antes daba envidia / ahora daba compasión.”*

（哀れなタイタ。幾夜も、モルヒネにすっかり麻痺して、街角で寝ていた、巡査に見張られながら。昔は人にうらやましがられる男だったが、いまでは憐れみを誘った）

その数ヵ月後（1922年5月）、ロメーロが単独で脚本を書いた『キャバレーの（男性）ダンサー El bailarín del cabaret』上演。挿入曲（もちろん彼が作詞）『パトテロ・センチメンタル Patotero sentimental』が大好評！ これを歌った二枚目俳優・歌手のイグナーシオ・コルシーニ Ignacio Corsini（1891 - 1967）は、一夜にして大スターになった！ 作曲は、スペイン人のピアニスト・指揮者マヌエル・ホベース（本来の発音はジョベース）Manuel Jovés（1886 - 1927）で、バルセローナとブエノスアイレスを往復して活動していたが、結局はタンゴでの業績のほうが大きかった。アルゼンチン音楽をよく研究していたと推察される。またコルシーニは（一般には隠していたが）コルシカ島の生まれである。タンゴの歌も多国籍の産物なんですね！

“Patotero, rey del bailongo, / patotero sentimental, / escondés bajo tu risa / muchas ganas de llorar.”

（パトテロ、バイロンゴ（乱れたダンス・パーティ）の王者、感情いっぱいのパトテロ。おまえは笑い声の下に隠している。いっぱいの泣きたい思いを）

パトテロとは裕福な家庭の若者で、徒党を組んでキャバレーなどに乱入し、人をおどかしバカにすることだけを楽しみに、暴力・破壊行為をはたらいた人間である。センチメンタルなパトテロなんて、この世に存在しない。こんな嘘で固めた人物を創り出して大成功したロメーロの、いい加減さはすごい。これは才能です！ わかりやすい、ときには軽薄なことばをつづりあわせて、大衆の心をつかむ調子いい歌詞をつくる才能もすごい。

この初演の大成功から10数日後に、ダンスもおしゃべりも達者な同じ作曲家と組んで『パトテロ、

バイロンゴの王者 Patotero, rey del bailongo』と題するサイネーテを、別の劇団・別の劇場で上演。挿入歌は『煙の雲（タバコの煙）Nubes de humo』だった。この早さ！ この抜け目のなさ！

1923年の初めに、最初の共同執筆者バジヨン・エレラといっしょに、パリのミュージックホールの世界を見学・視察に行き、帰ってきてすぐに（2月）『パリの泥沼で En el fango de París』を上演。この挿入歌『ブエノスアイレス Buenos Aires』は、わたしはロメーロの最高傑作だと思う。音楽（前と同じくホベース作曲）も大好きだ。

“Noches porteñas, / bajo tu manto / dichas y llanto / muy juntos van. / Risas y besos, / farra corrida, /

todo se olvida / con el champán. / Y a la salida / de la milonga / se oye una nena / pidiendo pan. /

Por algo es que en el gotán / siempre solloza una pena.”

（いとしいブエノスアイレスの夜ごと、おまえのマントの下、数々のしあわせと涙が抱き合っていく。あちこちで笑い声、キスの音。切れ目ないパーティ。すべてがシャンパンで忘れられる。そしてキャバレーの出口では、パンを乞う女の子の声が聞こえる。理由があることなんだ、タンゴの中ではいつもひとつの悩みがすすり泣いているというのは」

ロメーロは、やがてレビュー劇場の脚本・演出で大活躍。バジヨン・エレラと共同で、サルミエント劇場やマイポ劇場の総監督をつとめた。ダンスもおしゃべりも達者な女性歌手ソフィーア・ボザーン Sofia Bozán (1904 - 58) がショーのスター。以前わたしが《タンゴランディア》誌の「わたしのひそかに愛するタンゴ」でとりあげた『人生の変転 Las vueltas de la vida』は、この時代の作品だ。

1931年には、劇団でパリ公演した機会に、パリにきたカルロス・ガルデールの主演映画『ブエノスアイレスの灯 Luces de Buenos Aires』の脚本を、バジヨン・エレラと共同執筆。挿入歌のひとつ、ロメーロ作詞のタンゴ『交わす盃 Tomo y obligo』が大評判になった。作曲はガルデールと登録されているけれど、既存のタンゴ曲の借用だったそう。

1932年に、ヨーロッパから帰ってきた女性歌手アスセーナ・マイサーニ Azucena Maizani (1902 - 70) の記念公演用に『ブエノスアイレスの歌 La canción de Buenos aires』を作詞。作曲はマイサーニと彼女の伴奏ピアニスト、オレーステス・クファロ Orestes Cúfaro (1906 - 72)。この曲も、ロメーロの数々の作品と同様に、歌のタンゴのスタンダード曲になった。

30年代後半から、映画会社ルミトン Lumitón で、脚本・監督を兼ねて、巨額の報酬を得て華々しい生活。絵に描いたような筋書き、随所にタンゴを入れただけの安直なメロドラマだが、大衆には受けた。最高のヒットは、歌手ウーゴ・デルカリエル Hugo del Carril (1912 - 89) 主演の『昔の若者はボサボサ頭だった Los muchachos de antes no usaban gomina』(1937年) で、フランシスコ・カナーロ Francisco Canaro (1888 -1964) 作曲の挿入歌『古い時代 Tiempos viejos』が大ヒット。映画も歌詞も時代考証はデタラメなのだが、20世紀初めのタンゴの世界のイメージを（虚構なのに！）一般ファンに植えつけてしまった。その害毒は、今日もつづいている！

ロメーロは血の気が多く（アンダルシアの血？）、熱中して攻撃的になる性格だった。人の信頼を裏切ることも多かった。才能を使い果たしたのか、信用を失ったのか、だんだん仕事はなくなった（最後の映画は1951年）。1954年10月3日に没。「極貧状態だった」とカナーロが記している。

クアルテート・ロス・ポルテニートス

por 西村秀人

1950年代以降、特にペロン政権崩壊後にアルゼンチンへ進出した多国籍系のレーベル、Phonogram (Philips / Polydor)、CBS ColumbiaなどはRCA VictorやEMI-Odeonが擁してきたような人気のあるアルゼンチンの専属アーティストを必要としていた。CBS Columbiaは1953年以降のColumbiaレーベルの原盤が使えた分まだカタログ上のバランスはよかったが、Phonogramはそれまでの蓄積がなかったので、1958年から1960年代初頭にかけてカルロス・ディ・サルリ、オスバルド・プグリエーセ、オラシオ・サルガン、フルビオ・サラマンカ、エドムンド・リベロといった大物を引き抜いて専属に迎えた。しかしタンゴ界自体の規模縮小もあり、すでに名声のあるアーティストの引き抜きとは異なる戦略が必要になり、一連のイージーリスニング的な内容を持つ多数のアルバムの制作はその一つの作戦だったのだろう。

そこで大きな役割を果たすことになるのが1918年生まれのバンドネオン、サククス、クラリネット奏者のサントス・リペスケルSantos Lipeskerである。兄弟のレオ・リペスケル (バイオリン、1916年生まれ)、フェリクス・リペスケル (バンドネオン、1913年生まれ)、フレディ (ハイメ)・リペスケル (ベース、1925年生まれ) はいずれも主にタンゴ界で活躍したが、サントスはジャズとタンゴの両方で活躍、1950年からラディオ・エル・ムンド専属オーケストラの指揮者となり、1957年アルゼンチン・フォノグラム設立と共に同社プロデューサーになり、1964年から急逝する1978年まで同社の音楽監督としてすごした。

彼は時流に合ったイージーリスニングに適したタンゴやムード音楽のグループを多数企画、スタジオ・ミュージシャンを起用し、スタイルごとに架空のアーティスト名をつけヒットさせた。その最大のヒットは前号にも記事のあった「アンドレとそのコンフント」(André y su conjunto) であろう。他にも (タンゴばかりがレパートリーではないが) ビンセント・モロッコ、ロス・クラウディオス、パスカル・バレンティ、ガスパリンのコンフントなど30以上の楽団・グループを作り出した。その中でひととき濃いタンゴ色をもった異色のグループがクアルテート・ロス・ポルテニートス (Cuarteto Los Portenitos) である。

ロス・ポルテニートスはサントス・リペスケルのアイデアによって生まれた覆面楽団であり、時期によってメンバーも一定ではない。ライナーノーツなどでもメンバーにはほとんど言及されていないが、いくつかの資料を統合して考えると、バイオリンはごく初期にロベルト・ギサードが参加したのがあるが、それ以外はレオ・リペスケルと考えて間違いのないと思う。独特のスタカート切り方と荒っぽい弾き方はバンドのカラーというよりレオの個性である。バンドネオンはサントスかフェリクスのリペスケル兄弟のいずれかと思えるが、あまり個性的な弾き方をしていないので、さらに別の演奏者でもありえそうだ。ただフォノグラム系の覆面楽団によく登場するロベルト・パンセラはこのクアルテートには関わっていないようだ。ギターは、アンドレのコンフントと同じく、ウバルド・デ・

リオが多かったようだが、もう1本のギター（あるいはギタロン）も含め、いくらでも代わりになる奏者がいるのでこれ以上の推測は難しい。

メンバーに関する手掛かりは非常に少ないが、荒っぽくも古いタンゴのエッセンスを忘れない演奏には単なるイージーリスニング系の名曲集の枠を超えたものがある。

レコードの全貌についても確かな資料はない。あくまで西村個人が確認できた範囲、ということでご了承いただきたい。最初のアルバムと思われるのはワルツ集で1959年の録音と思われる。

(1) Philips P08259L “Noches de Serenata”

- ① Desde el alma ② Olga ③ Luna de arrabal ④ Francia
- ⑤ Pobre mi madre querida ⑥ Pabellón de las rosas ⑦ El aeroplano
- ⑧ Ensueño ⑨ Una lágrima ⑩ Rosas de otoño
- ⑪ Loca de amor ⑫ A mi madre

なつかしいセレナーデの雰囲気や古風な編成で、というのが結成の趣旨だったのだろう。ワルツの名曲ばかりずらっと12曲。ただしこのアルバムは日本では発売されていない。アルゼンチンではのちに“Al pie de tu balcón -valeses y serenatas-”とタイトルを変え再発売されている。



(2) Philips P08266L “Noches de tango”

- ① El apache argentino ② La morocha ③ Milonga del 900 ④ La guitarrita ⑤ Duelo criollo
- ⑥ Lejos de ti ⑦ El garrón ⑧ El pollito ⑨ El porteño ⑩ La payanca ⑪ Milonga sentimental
- ⑫ El flete ⑬ Lorenzo ⑭ Rosas de abril ⑮ El 13 (trece) ⑯ Lágrimas

2作目は古典タンゴを中心にワルツとミロンガもまじえた内容。日本でも同じ曲順でフィリップス（当時の発売はビクター）FL5007「アルゼンチン・タンゴ名曲16選」として発売、古典タンゴファンの注目を浴びた。短めの演奏で16曲を詰め込んで「お得感」を出す、というのもサントス・リペスケルのアイデアだろう。このアルバムのバイオリンはロベルト・ギサードのように思える。ギサードとレオ・リペスケルは弾き方のくせに共通点が多く、にわかには判別しがたいが、このアルバム収録の「ラグリマス」（涙）は、オラシオ・フェレル著「エル・リプロ・デル・タンゴ」中でギサードの名演として挙げられているので、このアルバムはギサードが担当したのではないかと考えられる。曲目もよく、この四重奏団の代表作と言ってよいのではないかと思う。



(3) Philips P427751E “Inolvidable – Homenaje a Carlos Gardel”

- ① Mano a mano/Volvió una noche/Golondrinas ② Por una cabeza/Volver/Mi Buenos Aires querido ③ Melodía de arrabal/Cuesta abajo/Silencio ④ Soledad/Amargura/Tomo y obligo

時期的にはおそらく(2)と(4)の間に入ると推測される17センチ盤。ガルデル名曲集だが、3曲ずつをメドレーにしている。本当は12曲でアルバムにするつもりが、17センチ盤の企画になってしまったのだろうか。もともと演奏スタイルがメロディックではないので、ガルデル曲集にふさわしいかという疑問だが、全員がリラックスしてガルデルのメロディーを楽しんでいる感じはよい。30センチ盤に収録されたことはなく、この17センチ盤でしか聴けない内容だと思う。



(4) Philips 13916PL “Noches porteñas”

- ① La cumparsita ② Campo afuera ③ Nueve de julio ④ La pulpera de Santa Lucia ⑤ Re fa si ⑥ Azabache ⑦ El espicante ⑧ El paisanito ⑨ Merceditas ⑩ Jueves ⑪ Papá Baltasar ⑫ El once

(2) 同様、古典タンゴにワルツとミロンガだが、なぜかfolkloreの大ヒット曲のワルツ・アレンジ⑨や、コンガを加えた楽しいカンドンベ⑥⑪もある。アルゼンチンではのちにMercury 000315 “De mi campo y de mi ciudad”として1980年に再発売されている。日本では(2)からのEl apache argentinoとMilonga sentimentalを加え、曲順も変更してFL-5087「ラ・クンパルシータ／ロス・ポルテニートのすべて」として発売された。録音は1961年頃と推測される。



(5) Philips 82008PL (mono) “Tangos”

- ① Rodríguez Peña ② Organito de la tarde ③ Mama yo quiero un novio ④ Felicia ⑤ Don Juan ⑥ Sentimiento gaucho ⑦ Fuegos artificiales ⑧ A media luz ⑨ Julián ⑩ El monito ⑪ La morocha ⑫ Canaro en París

初のステレオ盤ということもあったのか(ただし私の知る限りではアルゼンチン盤はモノラルしか確認できていないが)、一転して全曲タンゴの有名曲をずらっと並べたアルバム。日本では曲順を変え、SFL-7157「情熱のアルゼンチン・タンゴ」として発売された。日本盤には”Maestro tango con brío”というスペイン語タイトルがついているが、日本側でつけたと思われる、スペイン語としてはちょっと違和感がある。

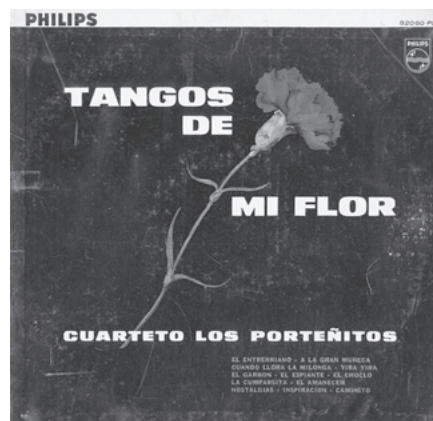


日本ではよく売れたようで、中古でも比較的好く見かけるアルバムだ。ここから5曲を選び、(4) からクンパルシータを加え、まったく同じ6曲をマランドが演奏したものとカップリングしたSFL-7233「マランド対ポルテニートス」なる珍編集盤も日本では出ていたが、それだけ好評だったのだろう。ちなみにアルゼンチンではステレオ盤が出た形跡がないが、日本盤にはアルゼンチンの原盤番号として842753PYと記されている。古典もメロディックな曲も同じように荒っぽいのがこのグループの特色であり難点でもある。でも⑨や⑩などちょっと珍しいレパートリーも楽しめる。1963年頃の発売。

(6) Philips 82060PL (mono) , 85520PY (stereo) “Tangos de mi flor”

- ①A la gran muñeca ②El garrón ③El choclo ④Nostalgias
 ⑤El entrerriano ⑥El amanecer ⑦Inspiración ⑧Yira yira
 ⑨Cuando llora la milonga ⑩Caminito ⑪El espante ⑫La cumparsita

引き続きタンゴの名曲集で、日本では「アルゼンチン・タンゴの華」SFX-7012として発売された。②⑩⑫は以前録音した曲のステレオによる再録音ということになる。特に②はこのグループの持ち味にぴったりだ。1965年頃の発売。



(7) Philips 82155PL “Tangos y valsés”

- ①Milonguita ②La última copa ③Catamarca ④Tierrita
 ⑤Gran Hotel Victoria ⑥Gallo ciego ⑦Yo no sé qué me han hecho tus ojos ⑧Ilusión marina ⑨Vibraciones del alma
 ⑩Un placer ⑪Pobre flor ⑫A su memoria

A面がタンゴ、B面がワルツ。今まで録音していない曲を集めているので収録曲の知名度は落ちるが、②③⑤などタンゴ・ファンの喜びそうな曲が多い。番号から推測すると1967年頃の発売だろうか。日本では発売されなかった。ステレオ盤もあるかもしれないが番号不明。



(8) Philips 6388005 “Noches de San Telmo”

- ①San Telmo ②Bettinotti ③Ay Aurora ④Viejo ciego
 ⑤Rosa morena (Abuelita Dominga) ⑥Romance de barrio
 ⑦Silbando ⑧Juan Manuel ⑨Romántica ⑩El pescante
 ⑪Defensa y Carlos Calvo ⑫El trovero (Te imploro)

さらに有名曲は少ないものの、タンゴは①④⑦⑩と小編成楽団による演奏が少ない曲ばかりで、演奏内容も素晴らしい。もうひ



とつ面白いのがフリオ・ソーサの名唱で知られるワルツ⑨。フェリクス・リペスケルの作品なので、バイオリンはまちがいなくレオ・リペスケルが弾いているはずで、バイオリンでメロディーを歌うあまり力が入って、うなり声も一緒に録音されてしまっている。実はフェリクスは1970年3月に亡くなっているのに、ひょっとしたら追悼の意味で録音されたのかもしれない、兄を思って心ならずもうめき声が出た、ということかもしれない。⑪はサントス・リペスケル作のミロンガ。残念ながら日本盤は出ていない。ここに挙げたのはモノラル盤だが、ステレオ盤があるかどうかは不明。

(9) Philips 6406025 “La yumba”

- ①Barrio reo ②Niño bien ③Canaro ④El africano ⑤Chiqué
⑥Cuesta abajo ⑦La yumba ⑧Cantando ⑨Corrientes y
Esmeralda ⑩Dónde estás corazón ⑪Entrada prohibida ⑫
Compadrón

実はかなり最近まで存在を知らなかったアルバム。タンゴのみで構成され、選曲もなかなかユニーク。その中でも異色の⑦がアルバム・タイトルに選ばれている。1974年発売と記されているが、おそらくこれがロス・ポルテニートの最後のアルバムではないかと思う。(サントスは1978年、レオは1979年に亡くなっている)



CDは私の知る限り単独盤は1枚しかない。

Polydor 533995-2 “Sacale viruta al piso” (1997)

- ①El choclo ②El porteño ③Desde el alma ④La morocha
⑤El pollito ⑥Milonga sentimental ⑦El apache argentino
⑧La cumparsita ⑨El once ⑩El aeroplano ⑪La payanca
⑫Felicia ⑬Milonga del 900 ⑭Julián

ベスト盤で、(1) から③⑩、(2) から②④⑤⑥⑦⑪⑬、(4) から⑨、(5)から⑫⑭、(6)から①⑧からとられていると思われる。後期の(7)(8)(9)から1曲も選ばれていないのは残念である。



あくまでスタジオ・ワークとしての演奏のはずだが、演奏者が楽しんで演奏している様子が伝わってくるようなところも多々あり、日本人好みの古典中心のレパートリーも多く、もう少しCDで手軽に聴けるようになってもいい録音群であるのは間違いないと思う。

アントニオ・アグリ

吉村 俊司

はじめに

7回目を迎えた1970年代タンゴ探訪も、ここで一区切りをいただくことになった。最終回となる今回は、現代タンゴにおけるバイオリニストの最高峰の一人、アントニオ・アグリを取り上げる。ピアソラのグループのメンバーとしてあまりにも有名な彼であるが、1970年代にピアソラから別れて自身が立ち上げたグループは弦楽オーケストラであった。

略歴

1932年5月5日、サンタ・フェ州ロサリオ生まれ。デルミディオ・グアスタビーノにバイオリンを学び、1947年、15歳の時にコルドバでプロデビュー。その後ロサリオでホセ・サラ他の楽団に参加した後、1950年代にはバンドネオン奏者のアントニオ・リオスらと《ロス・ポエタス・デル・タンゴ》を結成するとともに、バンドネオン奏者オマール・トーレスと《トーレス＝アグリ弦楽五重奏団》を率いた。一方でロサリオ交響楽団にも参加。

その後アニバル・トロイロ楽団のバイオリニストだったニト・ファラーチェがアグリをアストル・ピアソラに推薦したことにより、1962年にピアソラ五重奏団に参加。以後、新八重奏団や九重奏団など1973年までのピアソラのあらゆるグループで第一バイオリンを担当した。並行してトロイロ、オスバルド・フレセド、マリアーノ・モーレス、オラシオ・サルガンら多くの楽団でも追加メンバーとして演奏している。

1974年、ピアソラがローマに拠点を移した年にコロソ劇場専属交響楽団入りを果たし、自身の弦楽グループもリハーサルを始動。1975年にはピアソラの幾つかの録音にも参加し、ピアソラのジャズ／ロック路線のライブ・グループ《コンフント・エレクトロニコ》のステージにも立つが、1976年にはピアソラと完全に袂を分かち、コロソ劇場も辞する。同年弦楽グループを《アントニオ・アグリ・イス・コンフント・デ・アルコス》として正式に立ち上げ、ステージ活動を開始。1977年～81年に3枚のアルバムをリリースした。

その後はブエノスアイレス市立タンゴ・オーケストラなどに参加し、1985年にはフェルナンド・スアレス・パスの後釜としてピアソラ五重奏団に復帰するが、直後に交通事故で重傷を負って再び脱退。その後はファン・ホセ・モサリーニとの活動や《グラン・キンテート・レアル》《ヌエボ・キンテート・レアル》への参加、1989年の《シンフォニック・タンゴ・オーケストラ》での来日、小編成やオーケストラとの共演など幅広く活躍した。1994年からモサリーニとの《モサリーニ＝アグリ・タンゴ五重奏団》で4年連続の来日を果たしたほか、カルロス・サウラ監督の映画『タンゴ』における《ヌエボ・キンテート・レアル》での演奏、ヨーヨー・マのアルバム『ヨーヨー・マ・プレイズ・ピアソラ』へ

の参加など、コアなタンゴ・ファン以外でも彼の音を耳にする機会は多かった。1998年10月17日、癌により惜しまれつつ世を去った。

1970年代のアントニオ・アグリのレコード

上述のとおり、1970年代中盤までのアグリはピアソラとの録音が続いている。ここではまず、その主なものについて簡単に紹介する。

ÁSTOR PIAZZOLLA y su Quinteto / PIAZZOLLA EN EL REGINA

(RCA, AVLS-3924)

1970年録音。ピアソラ五重奏団のレジーナ劇場でのリサイタルを録音したライブアルバム。「ブエノスアイレスの四季」全曲を含み、各曲でアグリの素晴らしいソロが聴かれる。中でも「アルフレド・ゴビの肖像」はアグリの最良の演奏の一つと言えるだろう。

ÁSTOR PIAZZOLLA / CONCIERTO PARA QUINTETO

(RCA, AVS-4013)

1971年にリリースされたアルバム。五重奏による録音はA面のみで、タイトル曲はピアソラが自身の五重奏団の歴代メンバーに捧げたオマージュである。B面はピアソラのバンドネオン・ソロとバンドネオン四重奏。

ÁSTOR PIAZZOLLA y su Conjunto 9 / MÚSICA POPULAR CONTEMPORANEA DE LA CIUDAD DE BUENOS AIRES Vol. 1

(RCA, AVS-4069) & Vol. 2 (AVS-4125)

ピアソラの究極のアンサンブルとでも言うべき九重奏団のアルバム。Vol. 1が1971年、Vol. 2が1972年の録音。イタリアのバイオリンの巨匠サルヴァトーレ・アッカルドがアグリの演奏に感激し、自身の所有するストラディヴァリウスをアグリに貸与したという逸話があり、Vol. 2の幾つかの曲ではその音を聴くことができる。中でも1971年に亡くなったエルビーノ・バルダロに捧げた「バルダリート」でのアグリは、第2バイオリンのウーゴ・バラリスとの対話も美しく、彼の生涯でも最高の演奏であることは間違いない。

ÁSTOR PIAZZOLLA / LUMIERE

(Carosello, CLN 25059)

1975年に録音されたアルバムで、ジャンヌ・モロー監督の映画『リュミエール』のサウンドトラックと、トロイロの訃報に接して書かれた『トロイロ組曲』のカップリング。『リベルタンゴ』以降のジャズ／ロック路線ながら、アグリの音が入るとアンサンブルが引き締まる。

この他、同時期に録音された映画『サンチャゴに雨が降る』『新婚旅行』のサウンドトラックなどにもアグリは参加しているが、程なく彼はピアソラと袂を分かつことになる。

続いて本稿の本題、1970年代の彼のリーダー作を紹介しよう。

ANTONIO AGRI Y SU CONJUNTO DE ARCOS

(CBS 135007)

【 曲 目 】 1-1 LA ÚLTIMA CURDA 1-2 DANZA DE LOS ESPÍRITUS BIENAVENTURADOS

1-3 DIVINA 1-4 EL DÍA QUE ME QUIERAS 2-1 FUGA Y
MISTERIO 2-2 YESTERDAY 2-3 SUR 2-4 LIEBESLIED

【メンバー】 Antonio Agri, Juna de la Cruz Bringas, Salvador
Marrapodi, Lázaro Béker, Félix Marafioti, Harold Arietti,
Pedro Peraneo (vn) , Mario Lalli, Giovetto Gambino (va) ,
José López Echeverría, Saverio Loiacomo, Edgardo Zollofer
(vc) , Osvaldo Zeoli (cb)

【ゲスト】 Rolando Curzel, Luis Steajberg, David Murstein (vn) ,
Mario Fiocca (va) , José Puglisi (vc)

【録音】 1977年



SRCR 2392 (オリジナルと同
デザイン、以下同じ)

1974年にプライベートな試みとして始動し、1976年に本格的に活動を開始した弦楽グループの満を持してのデビュー・アルバム。収録曲はタンゴの他1-2がグルック作のオペラ『オルフェオとエウリデーチェ』の中の1曲「精霊の踊り」、2-2がおなじみビートルズの「イエスタデイ」、2-4がクライスラーの「愛の悲しみ」。編曲は1-1、2-3がバイオリン奏者のアキレス・ロジェーロ、1-3、1-4がロサリオ時代からの盟友であるバンドネオン奏者オマール・トーレス、2-1がギタリストのロドルフォ・アルチョウロン、2-2がファン・ロッシーノ。クラシックに関しては特に手を加えずオリジナル通りに演奏している。いずれも弦の響きを生かした美しい演奏で、随所にアグリの素晴らしいソロが散りばめられている。この方向性を見ると、改めてピアソラのローマでの活動はアグリには馴染めなかったことが伺われる。

アグリが亡くなった翌年の1999年に日本のソニーからCD『アントニオ・アグリ&コンフント・デ・アルコス・デビュー!』としてリリースされている (SRCR 2392)。

DE ALTO NIVEL

(CBS 20018)

【曲目】 1-1 SELECCIÓN DE TANGOS (UNO - CAMINITO -
MI BUENOS AIRES QUERIDO - LA CUMPARSITA) 1-2
CZARDAS 1-3 LO QUE VENDRÁ 2-1 SELECCIÓN DE
VALSES (DANUBIO AZUL - CUENTOS DEL BOSQUE DE
VIENA - VIDA DE ARTISTA - VOCES DE PRIMAVERA
- ONDAS DEL DANUBIO - DANUBIO AZUL) 2-2 MIMÍ
PINSÓN 2-3 DANZA HÚNGARA No 5

【発表】 1979年



SRCR 2393

前作が詳細にメンバー、編曲者のクレジットを入れていたのに
対して、本作ではそれらの詳細は不明。1-2はモンティ作「チャルダッシュ」。2-1「ワルツ名曲選」はアルゼンチンのバルスではなくウィenna・ワルツ集で「美しく青きドナウ」「ウィーンの森の物語」「芸術家の生活」「春の声」「ドナウ川のさざ波」そして再び「美しく青きドナウ」。そして2-3はブラームスの「ハンガリー舞曲第5番」。これら、収録曲の半分がクラシックになっており、曲目だけ見ると

ややポピュラリティに走った感もあるが、タンゴの編曲・演奏は決して安易な方向に流れることなく充実している。アグリのソロもやはり素晴らしい。前作で編曲者としてクレジットされていたアキレス・ロジェーロのロマンチックな代表作2-2が聴きもの。

やはり1999年に日本のソニーからCD『アントニオ・アグリ&コンフント・デ・アルコス デ・アルト・ニベル』としてリリースされている（SRCR 2393）。

AL ESTILO DE ANTONIO AGRI Y SU CONJUNTO DE ARCOS

(CBS 20162)

【 曲 目 】 1-1 DON AGUSTÍN BARDI 1-2 NOCRURNA 1-3 LEJANA TIERRA MÍA 1-4 MALA JUNTA 1-5 CORRALERA 2-1 OJOS NEGROS 2-2 LA TRAMPERA 2-3 LA CASITA DE MIS VIEJOS 2-4 ORGULLO CRIOLLO 2-5 A FUEGO LENTO

【発表】 1981年



SRCR 2394

1980年代に入ってしまうが、本グループの3作目。前作同様メンバーのクレジットはない。編曲は全てホセ・カルリが担当している。これまでとの大きな違いはクラシックやポップスが含まれず、全曲タンゴ、ミロンガで固められていること。なおかつ、これまでの弦の響きを生かした方向性に加え、曲目・編曲ともリズムカルな部分が前面に押し出されている。特にミロンガ1-2、1-5、2-2を弦だけでこんなに躍動的に演奏できるのは、やはりこのアンサンブルならではの素晴らしさではないかと思う。サルガン作1-1、2-5のリズムの面白さも良い。

新たな方向性を見出し、内容的にも充実したアルバムであったが、残念ながら本作がこのアンサンブルの最後の録音となる。これも1999年に日本のソニーからCD『アントニオ・アグリ&コンフント・デ・アルコス・プレイ・タンゴ』としてリリースされている（SRCR 2394）。

なお、これら3作にアグリ自身の作曲が1曲も含まれていないのは、楽団リーダーとしては異例といえるかもしれない。作曲家としてのアグリは寡作で、よく知られているのは日本語をそのままタイトルにした「ココロカラ（心から）」など数曲のみ。それらの曲も味わい深いものはあるが、彼の本質はあくまで演奏者であったということだろう。

おわりに

本稿で取り上げた弦楽アンサンブルは、3枚目のアルバムをリリースしてしばらく後に活動を停止する。多くのタンゴ楽団が、録音はともかくステージでは小さな編成にどんどん移行していく中、このような大編成アンサンブルで録音もライブも行うのはおそらく経済的にも厳しかったのではないかとと思われる。実際アグリの活動も1980年代、90年代においては小編成中心だった。唯一異例なのが1989年の《アントニオ・アグリ&シンフォニック・タンゴ・オーケストラ》。《コンフント・デ・アルコス》の路線を拡大し、ピアノ、バンドネオン、パーカッション、管楽器、ハープを加えた編成で来日、アルバムを1枚残している（1999年にCD『シンフォニック・アグリ』ビクター・エンタテインメント、VICP 60904として再発）。プロモーション上の要請もあったのかもしれないが、アグリ自身やはり

弦を中心とした大編成のアンサンブルによるタンゴの表現には大きなこだわりがあったのだろうと思われる。このあたりはエンリケ・フランチャーニがエクトル・スタンポーニと1960年代に《ロス・ビオリネス・デ・オロ・デル・タンゴ》を作り、1970年代には《シンフォニック・タンゴ・オーケストラ》で来日したのと相通じるものを感じる。

ソリストとしてはバルダロ、フランチャーニに続く、時代を代表するバイオリニストだったアグリだが、標準的なオーケストラの常勤メンバーだったことがほとんどないところは、前二者と比べると異質と言えるかもしれない。どうしてもピアソラのメンバーという印象が強い中で、弦楽アンサンブルという形で自身のオリジナリティーを世に問い一定の成果をあげたのが、彼の1970年代だった。

連載を終えるにあたって

もともとリンコン・デ・タンゴのコメンテーターのご指名を頂いた際、ほんの思いつきで自分がタンゴを聴き始めた頃の音源をテーマにしたのが始まりだったこの企画、『タンゲアンド・エン・ハポン』への連載のお話を頂いたときも「何とかなるだろう」と深く考えずにお引き受けしたものの、実際書き始めてみるとすぐに自分の知識の浅さと聴取体験の絶対量の少なさを思い知らされた。各回のテーマ選定ももう少し体系立てたものにできれば良かったのだが、結局自分の好きなアーティストをいつくまま並べたという感が強い。

それでも、こうしてまとめてみることによって見えてきたことも多く、自分自身にとっては非常に貴重な機会だったと思う。特にセステート・マジョールとセステート・タンゴ、レオポルド・フェデリコとオスバルド・ベリンジェリをそれぞれ並べて対比してみたときは、並べたことによって見えてくる相違点や類似点が自分でも非常に面白かった。またラウル・ラビエ、エラディア・ブラスケスの歌手二人についても、改めて歩みを追うことによって、それまで漠然と抱いていたイメージが正された部分が少なからずあった。

時代を語る上で取り上げるべきだったアーティストはまだまだ沢山いるはずだが、私が語る上ではそろそろ限界。回数的にもラッキーセブンで切りが良いということで、この連載を終えることとする。アルゼンチンが政治的にも経済的にも非常に不安定だった1970年代という時代、外来の音楽との闘いにもさらされていたタンゴの、その時代ゆえの面白さが本連載で少しでも感じていただくことができたとしたら、筆者としては望外の喜びである。

最後に、このような機会を与えて下さったアカデミー役員ならびに『タンゲアンド・エン・ハポン』編集担当の皆様、つたない文章を読んで下さったアカデミー・メンバーの皆様、どうもありがとうございました。

参考文献

- アストル・ピアソラ 闘うタンゴ、斎藤充正・著、青土社
- Todotango.com - Antonio Agri (<http://www.todotango.com/english/creadores/aagri.asp>)
- CD『アントニオ・アグリ&コンフント・デ・アルコス・デビュー!』(ソニー SRCR 2392)、『アントニオ・アグリ&コンフント・デ・アルコス デ・アルト・ニベル』(ソニー SRCR 2393)、『アントニオ・アグリ&コンフント・デ・アルコス・プレイ・タンゴ』(ソニー SRCR 2394) の各ライナーノート



ミロンガの音楽

永井 義延 (GYU) (東京都)

ミロンガの音楽を書く前にタンゴを聴いてみる。聴きたくなかったのはマエストロ／オラシオ・サルガン。私がブエノスアイレスに滞在している間に行ったミロンガでは彼の曲にお目にかかったことがなかった。ピアソラと同じようにミロンゲーロにとってタンゴではなかったか？ピアソラは革新的、サルガンはクールでモダン。好きな私もミロンガのDJする時には彼の曲を選ぶ、神経質になる。とてもモダン、そのモダンなタンゴが周りから浮いてしまうのだ。さて、今回の原稿を頼まれて何を書くか？考えが出てこなかったが、マエストロがアイデアをくれた。そうミロンガでよくかかる音楽を紹介していこうと思います。それもミロンガでDJをしているつもりで。

さて、ミロンガでDJをする時、最初に考えるのは全体の流れです。タンゴには素敵な曲が星の数ほどありますよね。しかし、残念ながらそれを並べただけではあまりよいミロンガにはなりません。タンゴ版アメリカンTOP 40的な音楽を並べてもたぶん1～2時間で飽き、タンゴの魅力が半減してしまいます。ミロンガでDJの役割はタンゴをより魅力的に魅せ、踊り手をタンゴの世界に引きずり込むように流れを作る事です。流れのコンセプトは日常です。日本では踊る事は一種のイベント祭り事があります。ミロンガは祭りごとではなく、日常の中の出来事ということです。日常にミロンガがある。ミロンガがあることが特殊の出来事ではなく普通なんですね。その日常も私が住む東京と彼の地ブエノスアイレスでは随分と違います。東京に居ると一分一秒がとても早く感じて生きています。何もせずにあっという間に終わってしまう事がしばしば（笑）です。反対にブエノスアイレスで感じた時間はとてもゆっくりです。街は石造りの建物が並び、人々は肉とワインが好きで身体は分厚く、夕食もゆっくりミロンガがはじまる時間は夜の10時すぎからです。一番賑わっている時間は深夜1時から2時ころ。

ここ東京では古い建物はドンドン壊され新しく建物が建ち、人々はロハスやダイエットを好み身体も食べ物の味付けも薄めが好まれる。ミロンガは終電を気にして夜10時くらい一番盛上がる。そんな背景もありますが、元々時間がゆっくりと感じたのは、私がブエノスで単に働いていなかったかもしれない。（笑）

さて実際に私が日本に戻ってミロンガでDJを行う時にブエノスアイレスでは日常的だが日本ではどうだろう？と考えました。そこでブエノスアイレスで掛かっている流れを持ち込むよりも「ミロンガが東京では非日常的であり、祭りのようなものベースにしたほうがいいのでは？」と考え流れを作りました。その祭りのとは流れの中にピークを作るという事です。ピークはもちろん沢山の人が来ている時間です。ブエノスアイレスの一部のミロンガではそういうミロンガもありますが、ほとんどのミロン

がは淡々と音楽が流れ、祭りのなことよりも日常にタンゴが流れている感覚に近いです。半年くらいたったときに「あっ」と感じることがありました。それは自分がその選曲に飽きていたことでした。そのことをよく考えると日常にある祭りは飽きるということでした。祭りは毎日あるのではなく、ある時期に短い時間の中で行われています

そこでもう一度考え直し、東京という背景を考えミロンガを日常に思えるような流れを作ることになりました。それはブエノスアイレスの流れを基調にし、また選曲を組んで来ててもその場の雰囲気や来ているお客さんでドンドンと曲を変え、その場の流れを大切にしてDJを行うことにしました。そうすることによってまたタンゴの良さとブエノスアイレスに流れていた「ミロンガでの時間」の良さを再発見できました。

ここからはその流れからタンゴの音楽をご紹介します。音楽をご紹介します時に覚えておきたいことは楽団と共に唄っている歌手です。楽団は時代とそして歌手によって音楽が変わります。もしミロンガでDJをするときは楽団と一緒に歌手名を覚えることをお勧めします。最初は難しい名前もあとから論理的に楽団の音楽を整理でき、流れをつくるのに大変役立ちます。

では、始めましょう。何事もそうですが、最初が大切です。私はミロンガでの選曲ではじまりの曲を大切にします。始まると終わりまでの流れが自然とみえます。それは河の流れと同じようです。一旦流れ出したら終わりまでそのながれが続きます。あるミロンゲージョが最初のステップを踏んだ瞬間最後までステップが見えるといいます。そう始まりは全てを決める要素であります。

今回、最初にお届けするタンゴは、オズバルド・フレセド、歌口ベルト・ライです。この楽団は、私がミロンガで必ず掛ける楽団の一つ。そして一番好きなタンゴでもあります。彼の紡ぎ出す音楽はとても穏やか。劇的ではなくちょっぴり甘く切ない曲ばかりです。「Niebla Del Riachuelo」「Siempre Es Carnaval」「Como Aquella Princesa」「Isla De Capri」一番好きな人と踊りたいタンゴです。

さて、次はこれを聴いたら踊りたくてしょうがなくなるタンゴです。もちろん私がね（笑）その楽団はリカルド・タントゥーリ、歌手アルベルト・カスティージョ！「El Tango Es El Tango」「Canción De Rango (Pa'que Se Callen)」「Como Se Pianta La Vida」「La Vida Es Corta (Tango)」踊らない人もこれを聴いたら身体がゆらゆらと動き出すじゃないかな。私はいつもこれを聴いたら疲れを忘れ踊りだします。（笑）

次に進む前にミロンガの流れを説明します。ミロンガでは「タンダ」と言って、同じ楽団や曲調が似ている同年代の楽団を集めて3～6曲グループにして掛けます。大体は4曲。そのタンダをタンゴとワルツ、ミロンガを組み合わせします。その組み合わせは タンゴ→タンゴ→ミロンガ（ワルツ）→タンゴ→タンゴ→ワルツ（ミロンガ）。そのタンダとタンダの間に「コルティーナ」という音楽が流れます。コルティーナとはカーテンの意で、タンダで踊っていたペアを解消する合図です。ブエノスアイレスの大きなミロンガでこのコルティーナが流れたら皆話しながらフロアから自分の席に戻ります。人が一杯だったフロアからコルティーナの間にフロアからいなくなるのを見るのはとても爽快

です。そのフロアから帰る途中でブエノスのミロンゲール達はパートナーだった女性を口説きます。「君と踊っているとまるで雲の上にいるようだよ。君は天使かい？そんな君とカフェでコーヒーを飲みたいがいかが？」みたいだね。

次に紹介するのは、タンゴの王様フランシスコ・カナロのミロンガです。

日本ではミロンガを嫌う人が多いがミロンガはとても楽しく踊れる音楽です。人の心臓は「バク、バク」と二拍子、それと同じようにミロンガは2拍子。その音楽に乗れるととても楽しい踊りです。その音の取り方は簡単！頭の先でリズムを取る事です。足ではなく頭の上。黒人のビーバップの様に乗ことです。よくタンゴは足の芸術だといわれ、ステップに目が行きがちですが、重心を下げて足で踊ると身体が固くなり、思ったようにキレイにステップが踏めなかったり、音楽が正確に取れなかったり、パートナーに負担を掛ける踊りになってしまいます。身体（上半身）で踊れるととてもいい踊りが出来ます。下の重心は力仕事には向いていますが、しなやかに動くのは難しいのです。重心を上にするとしなやかに踊れます。ちょっとしたコツで安定的にもおどれます。そのコツをお教えしましょう。それは、頭と首の付け根になる「天柱」というツボの場所です。片手を首の後ろに手を回して触ってみてください。後頭部の柔らかく凹んだ場所です。そこを手で上に軽く持ち上げてみてください。自然にあごが引け背筋が伸びお腹にも力が入り足も軽くなり安定します。昔の人は頭に重たい物を載せてました。それは王冠や女性の結った髪などです。頭に重たいものがある意識が行き重心が上に行きます。本などを頭に載せてみてください。どうでしょう？意識が上にいきましたか？

話がそれますが物事を一時的な要素で判断するよりも二次的な要素を観て判断することをタンゴで学びました。

一次的な要素とは、目に見えやすい結果。二次的な要素とは直接目には見えませんが結果には影響が及んでいる事や及ぼす事です。重心を上にするのも一次的な事ではなく二次的な結果によって得られています。それは重力です。皆さんご存知の通り重力はいつも我々の身体に働いています。それはある計りでは体重となって数字に現れます。その体重が下に落ちたときに反力があります。それはボールが地面から跳ね返るようにあります。その力で重心を上に行けるのです。音楽もこの反力が上に行く流れを使って聴くと自然に早いステップもできるように



第1回NTAミロンガパーティでのGYU&夏美しいペアによるダンスデモ

なります。たとえで言えば、上から床に落とすと不規則に弾むビー玉のように。これでミロンガも楽しいです。

「Milonga Brava」 「Reliquias Porteñas」 「La Milonga de Buenos Aires」 「No Hay Tierra Como La Mía」

次は電撃のリズム ピアニスト率いるロドルフォ・ピアジ私はブエノスに居る時に一番好きな楽団でした。そのリズムは踊り手を魅了する。鋭く強くそして熱く刻むリズムその上に流れる甘く切ない旋律。あるミロンゲーロに言われたことがある。「好きな楽団は誰だ?」「ピアジ!」「それは踊るのに一番難しい楽団だ。その当時はスペイン語力がなく、ミロンゲーロからその理由を詳しく聞けなかったです。その「なぜ?」を考えてみましょう。

リズムは心臓の鼓動と同じくいつも身体に流れています。そのリズムにのることはとても楽しいです。しかし調子に乗ると痛い目に合います。リズムは本能!本能剥き出しにリズムで踊り続けるとメロディーが見えなくなると同時に相手も(パートナー)も見えなくなります。ピアジの鮮烈のリズムは、踊りのメッキを剥がしてしまう鋭さがやはり有ります。私も理性のメッキがはがれ野獣的な踊りの時期が有りました。(笑) そういう意味合いでミロンゲーロは言っていたかもしれません。そのリズムを味わってください。

「El Yaguarón」 「El Estribo」 「Puro Clase」 「El 13」

次はマエストロ アニバル・トロイロ!彼の楽団には偉大な歌手がたくさんいますよね。彼の音楽は歌手によってその音色は富み、踊る2人に様々な創造を与えてくれます。Francisco Fiorentino, Alberto Marino, Floreal Ruízがミロンガで掛かる三大歌手です。どの歌手もご紹介したいですが、今回はFrancisco Fiorentinoを

「Toda Mi vida」 「Te Aconsejo Que Me Olvides」 「El Bulín de la Calle Ayacucho」 「En Esta Tarde Gris」

タンゴはステップが華麗で一番の魅力ですが、最近は音楽にのり、パートナーと一緒にその音楽を味わうことが一番魅力だと思ってます。それを感じさせてくれる4曲! Vamos a Bailar!。

最後はリズムの王様 ファン・ダリエソのワルツ! タンゴも素晴らしいですが何たってワルツが好きです。もう語る事がなくなってきましたので曲名だけを

「Alma Dolorida」 「Mentiras」 「Visión Celeste」 「Pasión」

このようにミロンガではタンゴの音楽がはじまりから終わりまで流れ続けます。

まだまだ沢山の素晴らしい楽団がそのミロンガを彩ってくれます。Di Sarli, D'Agostino, Caló, Demare, Pugliese, Lomuto, Donato, De Ángelis, Gobbi, Laurenz & 歌手、その楽団が紡ぎ出すミロンガは一つの音楽になります。その音楽は誰が選ぶでしょうか？ DJが選べます。しかし、ミロンガの雰囲気や流れを作るのはそこに来る人たちです。ミロンガはその場所（空間）、音楽、そして人が混じり合いひとつの「ミロンガ」を作っているのです。

私がDJを行う時、最初から最後までの流れを作っておきますが、はじめた時に違和感があると直ぐに選曲を変えます。音量や音質にも注意を払い全体の雰囲気が調和とれたミロンガにすることに注意を払ってます。素晴らしいミロンガでは全てが音楽で踊る人も踊らない人も大きな幸せに包まれる感覚があります。そのようなミロンガが日本中あることはなんとも楽しい事でしょう。タンゴファンを増やす事間違いないです！タンゴを踊らない皆さんも是非ミロンガでタンゴを楽しんでみては如何でしょうか？タンゴがより好きなる音楽が沢山あります。もし素敵な一曲をみつけたらそんな時はDJに「Muy Bien」とお声かけてください。

お願い

今、ダンスの規制法の除外運動をしています。タンゴもその法律で規制されています。そのダンスを規制している「風営法」は戦前に風紀肅正のためにでき、戦後もおなじようになっているそうです。もっと自由に多くの方々がたのしめるようにダンス規制法への除外運動に、是非、皆さんご協力をお願いします。

*レッツダンス ダンスカルチャーを守る為に風営法の改正を求めます。

<http://www.letsdance.jp>



タンゴの架け橋となった偉大な先達

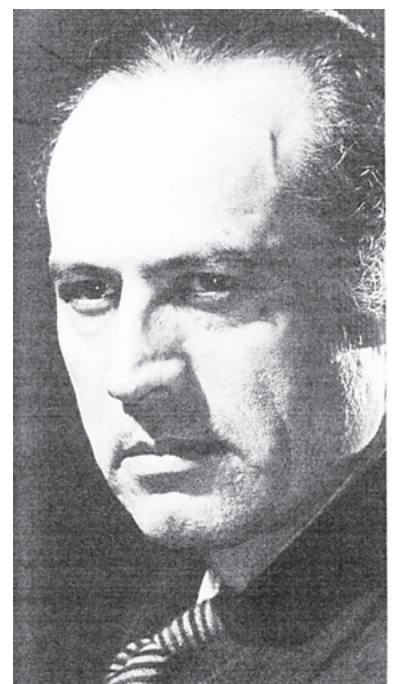
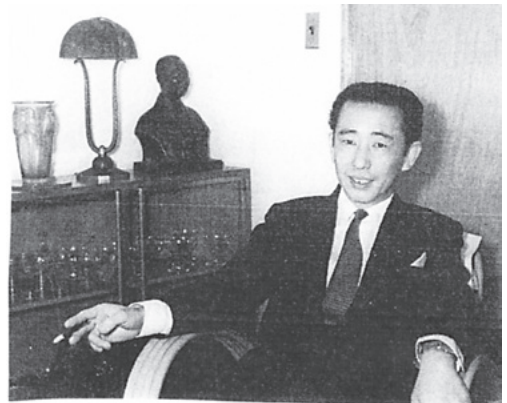
島崎 長次郎

日亜のタンゴの架け橋となった人物、といえば、まず戦後のタンゴの歌手として一世を風靡した歌手、藤沢嵐子を上げる人が多いだろう。昭和28（1953）年に夫君のティピカ東京のマエストロ早川真平を中心に、ピアニストの刃根研二、それに藤沢嵐子の3名ではじめてのブエノスアイレスを訪問、時の大統領ペロンの前でその歌を披露して絶賛を博したのはあまりにも有名で、これを皮切りに前後数回にわたり訪亜、絶大な人気を博し、同時に日亜の強固なタンゴの絆を築いたのは周知のとおりだ。

しかし、これよりおよそふた昔ほど遡った戦前の時代に、実はその後の日亜のタンゴの架け橋のキッカケを作った偉大な人々がいたことを忘れてはならない。

◆その一人がタンゴを中心に、はじめてわが国にラテン音楽全般を紹介し、NHKの「リズム・アワー」やレコード解説などを通じて、その普及に努めたお馴染みの人物<高橋忠雄>だ。氏は昭和11（1936）年の春に日本を出発し、パリを中心にヨーロッパの音楽事情を学び、その年の暮れにハンブルグを発って25日後に、最後の目的地ブエノスアイレスに到着し、タンゴの聖地を精力的に歩いてその精髓の探求にいそしんだ。滞在中に逢ったのは、フランシスコ・ロムートやフリオ・デ・カロなどの名流楽団のマエストロたちをはじめ、「ジューラ・ジューラ」の作曲家エンリケ・サントス・デイスセポロや「エル・アディオス」のマルハ・パチェコ・ウエルゴ、人気歌手のロシータ・キログを筆頭に、リベルタ・ラマルケ、アスセナ・マイサニなど数多にのぼった。そして、帰国後はその交流でえた生の情報を、ラジオ放送やステージでの解説、さらには数々の著書などを通じ、今日に繋がる多くのタンゴ愛好家の育成に寄与された。

◆その高橋氏の滞在中の昭和12（1927）年、忘れがたい僥倖があった。当時世界で絶賛を博していた“我等のテナー”<藤原義江>が突然ブエノスにやってくるとのニュースが入った。当時ジョシエ・フヒハラ（藤原義江）はRCAビクターの専属だったため、到着したら公演の合間にタンゴを吹き込むことになるだろう。その際は伴奏にオルケスタ・ティピカ・ビクトルを使う予定、とディレクターも張り



切っていたそうだ。ところが日本ビクターが本人に持たせた楽譜が「淡き光に=A MEDIA LUZ」はよいとして、後の3曲は「プレガリア」や「ポエマ」「イ・コモ・レバ」などヨーロッパ生まれのタンゴが多く、当時のブエノスでは通用しないような曲だったため、北米出身の支配人リンダーマンと高橋氏らで協議のうえ急遽変更することになり、結局3曲は「歌いつつ」「クラベル・デル・アイレ」、そして「心のバンドネオン」に決定し、歌う藤原本人からの要請で、その訳詞を大急ぎで高橋氏が請け負うことになった、とのこと。そうした苦勞の結果出来上がったレコードは、翌昭和13年の夏に次のような番号とタイトルで日本ビクターからリリースされ、わが国のファンの耳に届けられた。



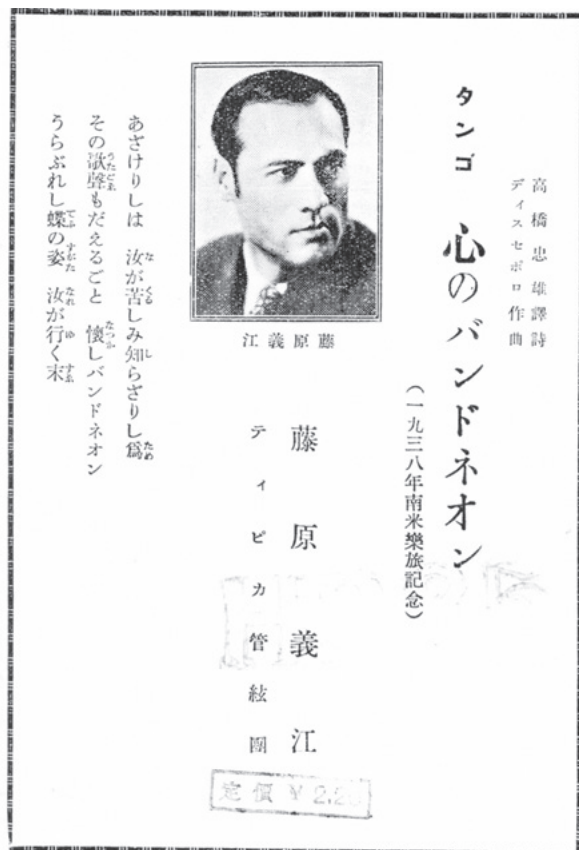
▲1937年、アルゼンチン録音を行った藤原義江（前列左から2番目）。その右側は共演のオルケスタ・ティピカ・ビクトルを指揮したF.スコルティカッティ。

[レコードNo.]	[曲 目]	[伴 奏]
1 3 5 3 8	根なしかずら = CLAVEL DEL AIRE 心のバンドネオン = ALMA DEL BANDONEON *	オルケスタ・ティピカ・ビクトル *
1 3 5 3 9	あやつり人形 = A MEDIA LUZ # 悩みの歌 = CANTANDO *	〃 〃

訳詞：* = 高橋忠雄 # = 若杉雄三郎



腕利きのバンドネオン奏者フェデリコ・スコルティカッティ指揮のオルケスタ・ティピカ・ビクトルの伴奏よろしきを得て、藤原も適度の緊張感をもって誠実に歌い上げ、リスナーに好感を持って迎えられた。



◆ご存知のとおり、昭和12（1927）年の夏に始まった日中戦争は次第にエスカレートする一方、翌々年の14年9月1日の未明、ナチス・ドイツ軍がいっせいに雪崩を打ってポーランド領に侵攻し、いまわしい第2次世界大戦の火蓋は切られた。

そんな世情怪しい昭和14（1939）年に、戦前最後の日垂のタンゴの架け橋となった人物が、「影を慕いて」を始め多くの名作を放った日本の歌謡界に燦然と輝く作曲家＜古賀政男＞だった。

古賀は、当時の日中を巡る問題の緩和と米英との間の協調を回復する狙いもあってのことか、突然に外務省から音楽使節としてアメリカに派遣されることになった。出発は昭和13（1938）年の11月、太平洋航路の女王といわれた竜田丸で横浜港からだった。途中のハワイで大歓迎をうけ、ロサンゼルスに到着、ここで二世たちのオーケストラの演奏などを行うなど、楽しい交流を半年ほど続けた後、昭和14年5月のはじめに車での大陸横断の冒険を実行してニューヨークに到着する。ここでの目的は権威あるNBCのチーフ・ディレクターのブラック博士に逢うことだったが、自作の「酒は涙か溜息か」以下、「男の純情」「丘を越えて」「緑の月」などを聴かせたところ、



ことで知られる博士がいたく気に入って、NBC放送の電波に乗せて、日本歌謡の存在を広く喧伝する結果となった。

この後に、引き続き古賀はアルゼンチン行きを実行した。実は古賀が東京駅を出発する際に藤原義江が見送りに来て、“折角だから是非南米にまで足をのばすように”と自らの体験を交えてアドバイスをしてくれたこともあって、古賀はニューヨークからブエノスアイレスまでの18日間の船旅を楽しみ、憧れのタンゴの都に到着した。



外務省派遣米国音楽使節に出発する東京駅頭。藤原義江さんがわざわざ送って下さって「南米一巡」をすすめてくれた。

評伝／古賀政男（菊池清磨著＝アテネ書房）によると、「古賀は、ブエノスの栈橋で大勢のカメラマンに取り囲まれて取材を受け、殺到した報道陣に驚き、親日の空気の濃さと、日本からの移民が、

いかに現地の人々に尊敬されているかが理解できた」、と語っていた。そして6月28日には地元のラジオ・エクセルシーオに出演し、現地の楽団を指揮したり、7月26日にはアルゼンチン日本文化協会後援のもとに、「日本におけるタンゴの現状」のテーマで講演を行い、自作のタンゴ「夕べ灰かに」のほか、淡谷のり子、藤山一郎、ディック・ミネなど和製タンゴの歌い手たちの活躍の現状を披露した。

古賀は丁度ブエノスを訪れていた妖艶の歌姫ラケル・メレエの歌うタンゴ



にすっかり魅了されたようであるが、当時評判のヒット・メーカーのエンリケ・サントス・ディスセポロを始めアスセナ・マイサニなど、多くのアーティストたちと交流し、相互の音楽のいっそうの理解を深めることに成功した。

なかでもこの訪亜で特筆すべきことは、後に「アディオス・パンパ・ミーア（さらば草原よ）」のヒットで一躍売れっ子になるピアノのマリアノ・モーレスとの熱い交流で、ついには古賀の作品をモーレスの楽団がタンゴにアレンジして録音するまでに発展し、これは見事に実現したのだった。モーレスは“あなたの作品にはコラソン（心）がある”とほれ込んでレコーディングを完了させたといい、曲によってやや古賀メロディーをいじり過ぎた嫌いはあるものの、なかなか聴かせる演奏になっていて、これは日本コロムビアから昭和14（1939）年の12月に発売になった。

[レコードNo.]	[曲 目]	[原 曲 名]
◇J X - 2 6 1	{ 女の嘆き = MI GEISHA ESTA TRISTE 藍色の夢 = SUENO AZUL (V)	* 青い背広で 望郷の唄
◇J X - 2 6 2	{ 天使の夢 = SUENO ANGELICAL 思い出 = RECUERDO *	東京ラブソディ 夕べ仄かに

演奏 = オルケスタ・ティピカ・マリアノ・モーレス * 歌 = トリオ・モーレス



帰国後の古賀は、暫くしてこのときのブエノスアイレスの思い出を胸に、タンゴで「懐かしのブエノスアイレス」を作曲、戦後結成の早川真平とオルケスタ・ティピカ東京がこれを日本コロムビアに録音、佳曲好演の定評を得た。レコードは次のとおりである。

◇A - 1 0 2 6 「懐かしのブエノス・アイレス」 古賀政男作曲 早川真平編曲

なお蛇足になるが、マリアノ・モーレスがこの後に発表した「タンゲーラ（タンゴ好きなお嬢さん）」の中に、「荒城の月」のサビに似たメロディーがでてくるが、これはこのときの古賀との交流からなのか、あるいはその2年前に訪亜して歌った藤原（当時の得意のレパートリーだった）の影響なのか、極めて興味深いものがある。

以 上

タンゴ もう一つの祖国…

欧州で活躍したタンゴの使節たち (補足Ⅳ)

—ドイツ編 その2—

芝野 史郎 (故人)

(前号からの続き)

ビクターは昭和12年9月発売のダンス レコード クラブ・コンチネンタル タンゴ集DC 25～DC 30の6枚組を出しました。以後、3枚組としてティー タイム アルバムがゲッツイアルバム (昭和14年7月)、ウェーバーアルバム (昭和14年9月)、同じくウェーバーアルバム (昭和15年1月) と出版されています。

さて、そのコンチネンタル タンゴ集の内容と言いますと

日ビク DC25 Pachita (Leonardi) Mz EOD1842-2

Robert Gaden mit seinem Orchester

Schwarze Orchiden (Richartz) Mz ORA1800-2

Barnabas von Géczy und sein Salonorchester

♪ DC26 Te quiero (M. Melfi et J. Sentis) Mz OLA753-1

Mario Melfi et son Orchestre Argentin c/Nina Sainz

My Lost Love (Cobian & Kennedy) -Nostalgias-⑥ Mz OEA4667-1

Henry Jacques with His Correct Dance Tempo Orchestra

♪ DC27 Es Geht ein Singen (Voelkner) Mz ORA1866-1

Barnabas von Géczy und sein Salonorchester

Lebe wohl, Kleine Frau (W. Jäger, Nebhut) Mz ORA1598-2

Orchester Ludwig Rüth

♪ DC28 Partir un Jour (R. Chamfleury - H. Himmel) Mz OLA1072-1

Deprince et son Orchestre

Kleiner Schalk (Herman) Mz ORA1203-1

Robert Gaden mit seinem Orchester

♪ DC29 Zwei Augen (Storch) Mz ORA1893-1

Robert Gaden mit seinem Orchester

Man muss das Leben nehmen Wie es ist? (Kreuder) Mz ORA1498-1

Robert Gaden mit seinem Orchester

♪ DC30 Confesion (Discépolo) ⑦ Mz OLA1123-1

Alina de Silva avec d'Orchestre Gaston Rollando

Nachts ging das Telefon (Kollo) Mz ORA1655-1

Robert Gaden mit seinem Orchester

このうち⑥はNostalgiasの英語版、⑦はアリナ デ シルバの名唱で伴奏のG. ロランドの演奏も

良く、なかなかの名演です。

このアルバムは結局欧州各国の楽団を集めたような結果となり独、仏、英の楽団が入りまじっており、まあ当時のダンス バンドの平均的な構成と言えましょう。

電気録音の特許を持っていた英・グラモフォン カンパニーが独逸グラモフォン エレクトローラ社を設立し、以来同社がヒズ マスターズ ボイス(H.M.V.)の商標使用権を持っておりましたので、当然日本でもビクター社としてそれを使用出来ました。そこで初期のビクター社では圧倒的多数で、ドイツものが発売されております。

そしてその主力はマレーク ウェーバーでありまして、無記号時代よりJA記号まで31枚も出されております。(タンゴと言う種類の曲種のみです。) この中で特筆すべきタンゴは

- 21021 ア・メディア・ルス／パシオン・クリオルラ
- V-2 懐郷病 (ミ ノスタルヒオ) ／パキータ
- V-11 私の恋人 (アルマ ミア) ／仲のよい友達 (ブエン アミーゴ)
- V-14 奥様、お手をどうぞ／黄昏トゥワイライト (クレプスクーロ)
- V-18 昔友達 (ソン グルーポス) ／家鴨が鳴きます (クアック…クアック…)
(パト…クアックアッ) 原題名
- V-27 ヴォルガ河の夜 (ノーチェ エン ラ ヴォルガ) ／憎らしいほど綺麗な奴
(シンフル アンド スキート)
- V-28 カフェーの魅力／紅い唇 (F.t)
- V-45 アウグスティア… オーガスティア (アングスティアの間違い)
／君よりも美しく (モア ビューティフル ザン ユー)
- V-62 今宵トゥ ナイト／ジプシーの唄
(ツイゲウネル、ユー ハブ ストールン マイ ハート)
- V-64 黒い眼 (ブラック アイズ) ／ロシアのフォックス トロット・(旅芸人) (ft)
- JA-255 うまいだらう僕たちの踊りは／これぞ幸福への道
- JA-312 評判の娘さん／ラインの恋人へ (R)
- JA-360 ニーナのような娘／恋に生きる (W)
- JA-377 おお 私のナポリ／君のいない日は
- JA-653 ウィーンのカフェ／一度の恋 (W)
- JA-755 教会の鐘が鳴る (ザ チャーチ ベルズ チャイミング)
／スパニッシュ ジプシー ダンス (P.d.)
- JA-1186 奥様お手をどうぞ／黄昏 (V-14 再)
- JA-1117 マルシュカ／恋の終わり (W)
- JA-1211 ジプシーに心を奪われて／ヘルナスの小さな喫茶店で
- JA-1360 小さな喫茶店／紅い花びら (ft.)
- JA-5029 愛のジプシー (JA-1221 再) ／ニーナのような娘さん (JA-360 再)
- EG 2379 モンテカルロの一夜／ポンテネロ (P.d.)
- EG 2514 ヒョッコリやって来た (ft.) ／これぞ幸福への道
- DC 8 奥様お手を／思い出 (カーンOrch)

続いてバルナバス フォン ゲッツイ管弦団。



ゲッツイ楽団はビクターでは見るべきタンゴがありません。唯大ヒットした碧空（ブラウエル ヒンメル）（JA 810）、思い出のタンゴ（アイン タンゴメルヘン）／夕ぐれ（アイン リート オーネ ボルテ）（JA-1311）、夜のタンゴ（タンゴ ノトゥルノ）／南海の夢（トラウメン フォン デル スデー）（VA 10054）くらいのものでしょうか。アルゼンチン タンゴの良いところは全部テレフケン録音でした。

ビクターでは意外とホセ ルケーシ（ビクターの表記ではルケージ）が良く健闘しておりますが、これはフランス盤ですから後述します。

ロベルト レナードのところでも述べたようにオットー・ドブリントもドイツの楽団ですが、ビクター盤は無い模様です。



日本で発売されなかったものに

Electrola ・ Robert Gaden mit seinem Orchester
EG 6269 Jolita (Kurt Hasenpflug)
/ Heisses Blut (Edmund Kotseher)

Gramophon ・ Oscar Joost Tango Orchester
47401（この番号はPolydorと共通）

Campanas (Lesso - Valerio) / Argentinische Nacht (Lesso - Valerio)

Polydor 47380 Casita (J. Cantico) / Vergib (Gerhard Winkler)
EG 2511 ・ Orchester Pippo Arzizza

GaUCHO (Dolz - Chiappo) / Muchacha (Dolz - Chiappo)

EG 569 ・ Marek Weber und sein Orchester

Pasion Criolla (S. Grupillo) / A media Luz (Edgardo Donato)

EG 986 ・ Alma mía (Sando Panizza) / Buen Amigo (J. de Caro)

Electrola ・ Julian Fuhs und sein Orchester

EG 473 La Cabeza del Italiano (J. Bastardi) / Tiempos Viejos (Fco. Canaro)

EG 474 Viejo Rincón (Raúl de los Hoyos) / Julián (Ed. Donato)

EG 262 París (Canaro) / La Piba del Tabaris (Canaro)

この他のドイツのレコード各社のレーベルに

Clausophon ・ Tango-Kapelle (Norbert) Faconi (Berlin)

361 Angustia (H. G. Pettorossi) / Pizarro (F. Alongi)

Grohag · Tango-Orchester Best. Nr. 20509

El Gavilán (A. Bonavena) / Tanz Orchester Wenn du einmal in Hawaii bist

El Gavilánの演奏が、曲が良いせいか無類の良い演奏でどこの楽団か判りません。HQ. CD61の中の08 Tango Kapelle Manuel Romeoの演奏と殆ど同じ編曲なので或いはこれの海賊盤かと疑ってますが...

PHONOCORD · S. Crespo Madrid con Orchesta

Mientras llora el Tango (Courau) / A la Luz del Candil (Navarrine)

ドイツは資材不足と節約の為かセルロイド製のレコードとか、20cmのレコードを開発して発売しておりました。これもセルロイド製のレコードです。なかなか良い演奏です。

Amiga · Heinz Becker mit seinem Solisten

Guapita (A. Maland) / Antoinette

(Roters - Hammerling)

Kaliope · Robert Gaden mit seiner Tango-Kapelle

K1284 Mocosita (M. Rodríguez) / An der Volga

(A. Sab)

· Original Argentinische Tango Kapelle Alfred Rodríguez

K1101 Sündig und Süb (Franz Stafford)

Homocord (Electro) · Tango Orchester Rodríguez Alba
c/Luigi Berneur

4-2840 Venedig! Mein herrliches Venedig!

(Wismer Rossendahl Ginßmann)

/ Ich küsse ihre Hand, Madame

(Ralph Erwin - Fred Ralph)

4-3098 · Orquesta Típica Argentina "Ambassador"

dir. Por R. Canaro

Piedad (C. Percuoco)

/ Pinta Brava (Carlos Pérez Charlo)

4-3099 Alhaja Falsa (L. Merico) / Fierro Chifle

(C. De Pardo)

Ultraphon · Orquesta Típica Argentina

A 114 Adiós Muchachos (Sanders, C. F. Vedani)

Du bist mein Stern

(Eisemann Mihaly - Beda)

· Juan Llossas mit seinem Orquesta Típica Argentina

A 142 Plegaria (Eduard Bianco)



La taba de la vida (Felix Scolati - Carlos R. de Paoli)

A 143 Fuego Azul (Juan Llossas)

España Cani -P.d.- (P. Marquina)

A 500 Majanah (Juan Llossas - Beda)

Nur du und ich (Friedrich Hollander - M. Schffer)

Telefunken · Bernardo Almany mit seiner Tango-Kapelle (Hotel Adlon, Berlin)

A-1724 Confesión (Enrigne S. Discépolo - Discépolo und Amadori)

El Secreto (Enrigne S. Discépolo)

・ディセポロの名がエンリーニエと誤っているのが御愛嬌です。

・テレフンケンにはもっとあるはずですが出て来ませんので集めきっておりません。

・ Adalbert Lutter mit seinem großen Tanz-Orchester

M 6060 Amigaso (Juan de Dios Filiberto)

Gitarren, spielt auf! (L. Schmidseeder - Ralph M. Siegel)

M 6163 Feal (H. Pettorossi)

Sentimiento Gaucho (F. Canaro)

M 6285 Pato, cua, cua! (J. Rodríguez)

Taboada (D. Barberis)

この他日本テレフンケンでは10609 私のバラ／ラ クンパルシータ、10633 泣いて笑って／パロ、10653 碧空 (ブラウエル ヒンメル) ／可愛いアニタ、10644 花売り娘 (ラ ビオレテラ) ／唄うバラライカ、20607 ア メディア ルス／タンゴの国、20610 月夜の花園／赤い蝶々 (パト・クァ・クァ)、20616 恋の迷い／メンドーサ、20622 黒い蘭／お母ちゃん、20646 港の夜／サン フェルナンド (フアニータ ジョ テ アーモ)、20650 ラ プラタの夜 (ノーチェ デ ラ プラータ) ／シバリタ、40604 そよ風は我に囁きぬ／あなたの事ばかり (夜のタンゴ) 等が出ております。

ここで正統派としてはどうしても洩らす訳には行かぬものがあります。それは

50606 エル アギラル、オルケスタ・ティピカ・エスパニョーラ

A 2857 Compañera (Maffia - Pelay y Amadori) / En la Huella del Dolor (del Ciancio)

この一枚はコムパニエラの方がブルンスウィック時代のペドロ マフィアのものにそっくり、そしてエン ラ ウエジャ デル ドロールはビクターに録音したオスワルド フレセド楽団にそっくりと言うソックリさんでしたが欧州のタンゴ楽団がそっくりにせよここまで成長したのかと驚く程のものでした。

また

TA 788 Orq. Típ. Española "El Aguilar" Porqué? (Osvaldo Fresedo - Emilio Fresedo)

/ Orq. Típ. Argentina "Eduardo Bianco" Rodríguez Peña (V. Greco)。

これはビアンコ楽団の1939年3月15日録音のもの (大森 茂氏教示による)、従ってエル アギラルの録音もマトリスナンバーが15番程若いので当日でないにしても、1日か2日前の録音だと断定出来ます。

Polydor · Orquesta Típica de Juan Llossas

22425 Femina (Juan Llossas)

Tango de la Taverna (Mario Sarrocchi)
 22625 Du schönste Frau von Madrid -P.d.- (Alfonso - Halton - Brüli)
 Du bist mein Stern (Eisemann - Beda)

22982 Sufro (José González M.)
 Consuelo (F. Alongi)

(ヒズ マスターズ ボイス)

22687 La Vida (O. Christians)
 Zwei rote Lippen (Adiós Muchachos)
 (Sanders - C. F. Vedani)

Electrola · Juan Llossas mit seinem Spanisch
 Argentinischen Tango Orchester

EG 1832 Aromas de los Andes (Walter Pörschmann)
 La Taba de la Vida
 (Felix Sciolati Almeyda
 - Carlos R. De Paoli)

EG 1833 Ich spiel für Dich ein Liebes Lied
 (Hartwig V. Platen - Cesar Bahar)
 Zwei Rote Lippen und ein Roter Tarragona
 (Sanders - Fr. Schwarz)

EG 2534 Clavel del Aire (Filiberto - Pernando
 Silva Valdes)
 Te Odio (F. Pracánico)

EG 2535 Pobre Loco (Manuel Pizarro - G. Curci)
 Mi Dolor (C. Marcucci - M. A. Meaños)

この間に前述のウルトラフォンのレコードを入れます。

Ultraphon · Juan Llossas mit seinem Orquesta Típica
 Argentina

A 142 Plegaria / La Tuba de la vida
 A 143 Fuego Azul / España Cani -p.d.-
 A 500 Majanah / Nur du und Ich

Kristall · Juan Llossas mit seinem Argent. Tango Orchester
 Nr 3484 Renacimeinto (Bachicha)

Nachts am La Plata -Noches del Plata-
 (J. de Caro)

3507 Sierra Chica (Juan Llossas)
 Tango Mío (Fresedo)

3517 Mia Bella Manolita (Juan Llossas)
 Mendoza (Juan Llossas)



Rex... 英国ではKristallレコードの著作権使用をRexレコードに委ねた様です。

- 9324 Renacimiento (Bachicha)
Ambiente Pampino (Pereira)
9331 Buen Amigo (de Caro)
Night on the La Plata (de Caro)

- 9342 Tango Apasionado (Llossas)
Granada (Llossas)
・推定 1935年～1936年間の録音

Tempo・Juan Llossas mit seinem Deutsch-Spanischen Orchester

- 5080 Jolita (Curt Hasenpflug)
Tango Patético (Juan Llossas)

Imperial・Juan Llossas mit seinem Tango-Orchester

- No. 17199 Mit einem Tango fängtes immer an (Moili)
Ewige Sonne (Llossas)

Imperialは規模縮小したBrunswick社の代理店と言われています。1949年にはBrunswick社はここに合併します。但しレコード番号は共通でした。ですからここから一挙に1948～9年のBrunswick-Polydorに飛びます。

Brunswick・Juan Llossas y sus Muchachos

- 82349 Au Chili -Samba- (I. Caste)
La Cumparsita (Rodríguez) 1948.10.7
82348 María de Bahía -Samba-
(Misiakin Hillmann)
Amor y Odio (Llossas) 1948.3.20
82357 Resignation (Juan Llossas) 1948.4.1
Tchiou-Tchiou -Samba-
(N. Molinare - A. Horner) 1948.4.1
82376 Guantánamo -Rumba- (Juan Llossas)
1949.3.22

Nenita (Juan Llossas)

Polydor・Juan Llossas und seine Solisten

- 82379 Tango Bolero (Juan Llossas) 1949.10.17
Granada (Juan Llossas)

ファン ジョサスの楽団はまだまだあると思うのですが
今迄集め得たものを御披露いたしました。

次に一寸数少ないレコードです。

Tri-Ergon (Photo-elektro-Record)・Tango Kapelle
Morello

- TE 5204 La Confession (Monfred)



Donna Vatra (Otto Köpping)

Schallplatte "Gramophon、 Paul Godwin mit seinem Künster Ensemble

20176 Loca (Manuel Jovés)

Criollita (José Sentis)

Polydor · Banda Argentina de Valentín Comero

21217 Penando (Remondini)

Corazón Gaucho (Thebault)

21290 Sueño Amargo (Valentín Thebault)

Noche en la Volga (Sab)

21294 Noche estupenda (Wraskoff)

Tengo ganas de llorar (Bachicha)

Gramophon · Valentín - Comero - Tango - Band

21430 Rubia (Alfaro)

Murame (Alfaro)

グラモフォンはイギリスより来たリンドストロームが最新鋭の電気録音機を持って来て、グラモフォン ビクター社を設立、次いでいろいろな所で電気録音機を売り込みポリドール社が採用しました。ここで問題は兄弟会社だからかレーベルの色もデザインも一緒でただマークとロゴだけが違うもので同一演者のレコードは番号も連番としています。この傾向は1940年代まで続いているようです。

21432 Decime (Expósito)

Ojos Suetas (Raggi)

21728 · Efim Schachmeister's Dance Orchestra

Lelia (Dol, Dauber)

· Original Argentin Tango Band "Valentín Comero、

A media Luz (Donato)

Polydor · Argentin Tango Band

A media luz (Donato)

Adiós Pablito (Laurent)

Valentín Comero 楽団は昭和3年創業間も無い頃より実に12枚ものレコードを矢継早に製作した実績を持っています。

Polydor · Pippo Rache Orchestra

この楽団は元来スペイン出身であったがドイツではPippo Rache (ラーチェではなくラーへと発音する→ドイツ式発音) 時にはラーエとも言われることもありました。後、フランス・スペインに移動してその土地に即する活動をしているが、やはり最後にスペインに落着いてLP時代まで製作していません。



独Polydor

- 10562 Madrecita (Pippo Rache) - お母ちゃん
Izarre -vals- (Tenaro) - イツアーレ (西班牙円舞曲)

独Colombia・Orchestre de Tango Pippo Rache

- D 19296 Montparnasse (Ruff) C/M. M. Rita
Morenita (C. Oberfeld) C/M. M. Rita
仏DF 162 Te vi muy tirste (Pippo Rache) - 君恋し - (日コロ JX-1069)
Perdón (Sentís) - ペルドン? - JX-1069

Polydor・Orchestra Típica "Pippo Rache、

- 522941 La voz de su Querida (A. Messier) - 1934年 -
Rosa Vermeja (A. Walrence)
HM 212 L'Azur Radieux (H. Mateo)
- 1936年
HM 213 Milonguita Cherie (L. Pescador)

西Riviera・Pippo Rache & son Orchestre Argentin

- R No.1942 Adiós Pampa mía
(F. Canaro - M. Mores - Yvo Pelay)
Maldita noche (José Lucchesi)
25122 Monaco (Sauvage)
Mamma (Bixio)



最後になりますがここに私にはどうしても外せない楽団があります。それはニットーレコードの洋楽部が出していた(商標名日本クリスタル) Oscar Roma and his Orchestra オスカー ロマとその楽団で戦後も再発売をして2, 3種のレコードをプレスしていました。

戦前は6種のレコードが発売されておりました。

日本タイヘイ クリスタル Japan Taihei Crystal (昭和9年11月1日創業→1936年11月30日解散)
第4回発売(1935年4月)

- 1025 ・Oscar Roma① and his Argentin Orchestra
La Cumparista (G. H. Matos Rodríguez) Mz CP 9321
Pretty Dream 美しい夢 (J. Noceti - O. Roma) c/Juan Giliberti Mz CP 1032
(Lindo Sueño)
1028 銀の夜 (ノーチェ デ ラ プラータ) / ホネ ムーン (ルナ デ ミエル)

(Luis Mandarino) Mz CP 1036

(戦後盤 II 10025 ホネ ムーンの片面のみ)

1107 愛の小河 (アロジート) / 秋の情調

① オスカー ロマはブエノス アイレスではフリオ ポジューロ楽団でコントラバス奏者でありましたがヨーロッパではビオリン奏者として活躍しました。

(芝野史郎氏が昨年急逝されたため、これが氏の遺稿となってしまいました(編集部))

芝野 史郎 著 「タンゴ、もう一つの祖国・・・

欧州で活躍したタンゴの使節たち」 [掲載一覧表]

バックNo.	シリーズNo.	取り上げた内容・アーティスト
7. (2001/1)	1.	ヨーロッパ・タンゴの概観 タンゴの使節たち 楽団の系列
8.	2.	M. ウェバー、B. v. ゲッツイ、A. ルッター、V. コメロ、 B. アレマニー
9	3.	J. ジョサス、P. ラーヘ、R. アルバ、R. カナロ
10.	4.	M. ピサロ、楽団の系譜
11.	5.	ビアンコ=バチーチャ
12.	6.	E. ビアンコ、バチーチャ
————— 《一時中断》 —————		
22. (2008/7)	7.	P. ラーヘ、J. ジョサス、R. レナード、R. アルバ、J. モレノ、 E. シャハマイステル、P. ゴドウィン
23.	8.	R. カナロ
24.	9.	トリオ・アルヘンティーノ
25.	10.	I. アルヘンティーナ、C. オーベール C. ガルデル、F. スパベント、C. スパベント
26.	11.	C. ガメス
27.	12.	J. センティス、D. ベラ
28.	13.	J. センティス、D. ベラ、B. v. ゲッツイ、M. ウェバー
29.	14.	M. ウェバー、R. レナード、R. ガーデン、O. ヨースト R. カナロ、B. アレマニー、A. ルッター、J. ジョサス、V. コメロ
30.	15.	E. シャハマイステル、P. ラーヘ、O. ロマ

(作成：編集部)

芝野史郎さんを悼む

島崎 長次郎



タンゴの熱烈な愛好家で、関西きってのレコード・コレクターとしても知られた芝野史郎さんが、去る、2012年の10月18日に亡くなられた。その事実を知ったのは5日後に頂いた奥様からの電話だった。親族葬で葬儀はすでに済まされたとのことで、これを耳にした瞬間、言葉を失ってしまった。

氏は、私にとってはかけがえのない友人であり、また、かつては当アカデミーの理事としてご苦労された方なので、とり急いで納骨前の11月12日（月）、遅ればせながら滋賀県草津市のご自宅に弔問に伺った。同行されたのはいずれも当アカデミーの会員の山本雅生（神戸）、アストロリコの門奈紀生（京都）、麻場利華（京都）の皆さん、それにアストロリコのピアノの平井、さらに芝野氏の主宰するロス・チャムージョスのピアノの笠井さんたちであった。

そこで、焼香とあわせ用意して行った「別紙」の弔辞を心を込めて読ませてもらった。

別紙

謹んで故芝野史郎さんの御霊に捧げます。

芝野さん いつも元気で精力的にタンゴの研究にいそしんでいたあなたが、こんなに忽然と黄泉の国に旅立たれるとはまったく予想もしなかつただけに、ただ茫然自失し、胸が一杯になって、申し述べる言葉が見つかりません。

芝野さん わが国のタンゴ界にとって、あなたは欠くことのできない熱心な愛好家であると同時に、燃えるような情熱をもったタンゴ研究の第一人者でもありました。そして、LPやCDの解説や、日本タンゴ・アカデミーの機関誌を通じて、どれだけ多くのファンが啓蒙され、育まれてきたか分かりません。とりわけ、ヨーロッパのタンゴに関する研究は卓越していて、余人をもって代えがたい実績を残されました。かく言う私もその影響を大きく受けた一人で、あなたにはずいぶん教えられもしましたし、助けられたと、深く感謝をしています。

芝野さん あなたは幼いとき、お母さんに連れられて行った宝塚で、初めて耳にしたタンゴに魅せられ、それ以降夢中になってしまった、と私にしみじみ語ってくれたことがありましたが、実に70年近くもの間、ひたすらにタンゴを愛し、求め、その来歴や魅力を多くのファンに熱っぽく語り続けてこられました。そして、ときには熱心なあまり仲間との論争も辞さず、誤った発言などには誰かれを問わず、直截に指摘することもあって、誤解を招くようなことも何度かありましたが、それもこれもあなたのタンゴに対する強い愛情と、真摯でひたむきな研究心のなせる業だったと、いま改めて思います。

芝野さん 入院中もベッドの上で、機関誌に掲載中の「タンゴ、もう一つの祖国“欧州で活躍したタンゴの使節たち”」の執筆を続けられた、と僚友の山本雅生さんから聞きました。また、9月30日のセミナーでは、あなたと私の掛け合いで「ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち」のテーマを語る予定で、最後まで案を練っておられたことも耳にしていますが、結局そのいずれも叶わぬままに終わったのは、なんとも無念でなりません。…しかし、これまでにあなたが数限りなく語り、述べてきたものは、多くのタンゴ愛好家の胸に刻まれ、これからのタンゴ界のかけがえのない財産として引き継がれていくことは間違いありません。寂しくなりますけれど、どうかゆっくりとお眠りください。タンゴのよい夢を見ながら…。

最後に、心を込めてお別れをいいます。

“ありがとう、芝野さん”、そして、“さようなら、芝野さん”。

2012年11月12日

日本タンゴ・アカデミー会長 島崎長次郎

彼は7月に咽頭癌で入院し、放射線治療をつづけ、8月末には退院の予定で頑張ってきたのだが、食事が思うように取れず、残念ながら衰弱したまま再び元気な姿を見せることはなかった。入院以来、私は毎週1通以上の手紙を彼宛に出してきた。実は、春からの計画で、9月30日（日）に、当アカデミーのセミナー、「ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち」のテーマを二人の対談形式でやろうと予定していたので、その打ち合わせもあり、激励の意味もあ



って、手紙を送り続けてきたが、これに応えるように彼からも9通のはがきが届いた。いまそれを見ると、日を追うごとに次第に衰弱していく様子が伝わり、不本意でもあり、悶々とした末の無念の思いで、病室から遠望する新幹線に儂い夢を託していた様子が伝わってくる。その内容は……、

- ① 7 / 22 東京タンゴ祭など沢山のチラシありがとう。機関誌の原稿をベッドで書くつもりで、高橋忠雄先生の“私のカミニート”（雑誌「中南米音楽」）のコピー 53回分を持ち込んだ。
- ② 7 / 26 タンゴ心酔クラブのプログラム嬉しく拝見。弓田さんの「タニアよ永遠に」の一文は大変参考になり、CUATRO CORAZONESは蟹江さんの得意曲だったのを思い出した。
- ③ 8 / 4 病室から新幹線が見えるがこの上りに早く乗りたい。9 / 30のセミナーは、ヨーロッパ・タンゴの起源、ドイツのタンゴ、フランスのタンゴの順でどうか。早く退院したい。
- ④ 8 / 11 セミナーの件、起源の部分で是非ジプシーとの関わりを入れたい。とりわけそのバイオリンの影響などを。M.ウエバーやゲッツイもその影響下にあったと思うから…。
- ⑤ 8 / 15 次の原稿に使うため、高橋先生のサイン帖のコピーを大澤さんに送ったが、体調不良で判読できないとの返事で困っている。誰かいたら是非よろしく頼む。
- ⑥ 8 / 16 一旦家に帰れると楽しみにしていたが、発熱のために断念。したがってお尋ねの藤原義江と古賀政男のアルゼンチン録音の確認はできないが、そちらの調査でOKと思う。
- ⑦ 8 / 19 数々のチラシをありがとう。遥かに新幹線を眺め、早くあれに乗って東京へ行ける日を待ちわびている。セミナーの内容の調整を早く、と思っているが、悪しからず…。
- ⑧ 8 / 30 依然食欲はなく、今体調は最低。何をするにも杖を頼らなければ立てない。明日が予定の最後の放射線。なんとかここまで来たが…、早く元気になりたいものです。
- ⑨ 9 / 5 入院治療8週間を迎えるが、医師から退院の許可はなく、9 / 30のセミナーは諦めました。申し訳ありません。再々のお見舞い、本当にありがとうございました。



左から門奈、平井、島崎、奥様、笠井、麻場、山本の各氏

彼からののがきはこれで終わっている。⑨の最後のくだりは、まさに今生の暇乞い、タンゴ仲間への訣別のあいさつになってしまった。

最後までベッドで機関誌「TANGUEANDO EN JAPÓN」の原稿を書き、秋のセミナーの構想を練っていただけに、さぞ心残りであり、無念でもあったろう。それを思うと本当に胸にこみ上げるものがあるが、今までの数々の業績は永遠に消えることはないので、安らかに休息いただきたいと切に思う。最近お気に入り、自分の楽団“ロス・チャムージョス”でもレパートリにしていたという「吾亦紅」と「千の風になって」の哀愁の旋律をBGMとして……。

長年にわたるタンゴ界での活躍をたたえ、心からのご冥福を祈りながら、筆をおきたい。

“パキータ”ベルナルド 及びその他の1920~1930年代の女性バンドネオン奏者たち

齋藤 富士郎

“パキータ”ベルナルド (Paquita Bernardo) [1] [2]

現代のタンゴ界の潮流の一つとして楽団リーダーとして、また演奏者として女性の進出が著しいことが挙げられるが、すでに1920年代のタンゴ界で女性バンドネオン奏者として活躍した“パキータ”ベルナルドという大先達がいたことはよく知られている。

“パキータ”ベルナルドは本名をフランシスカ・クルス・ベルナルド (Francisca Cruz Bernardo) といい、1900年5月1日にブエノス・アイレスのビジャ・クレスポでスペイン移民のホセ・マリア・ベルナルド (José María Bernardo) とマリア・ヒメネス (María Giménez) の子として生まれた。オスバルド・プグリエセの同郷の先輩に当たる。“パキータ”とはフランシスカの愛称である。



始め“パキータ”は、小学校に通う傍ら、カタリーナ・トーレス (Catalina Torres) の下でピアノを習い始めた。しかし、ある日、勉強仲間のホセ・セルビディオ (José Servidio) が教室に持ち込んだバンドネオンに魅了され、表向きはピアノの生徒であるままに、アウグスト・ベルトの方法に従って内緒でバンドネオンを学び始めた。その秘密は長くは保てなかったが、そのことを告白することで彼女は“チュンビータ”というあだ名で知られていた即席教授から技術的な助言を受けることとなった。彼の薫陶の下に彼女は不屈の精神でバンドネオン演奏技術を身に付け、最終的にはペドロ・マフィア、ホセ・セルビディオ、エンリケ・ガルシージャのような名人に学ぶことで技術を完成させた。

演奏活動を始めたのは1918年から1920年の間で、場所は民家のパティオのバイレ、メンバーはビオリニスタのアルベルト・プグリエセ (Alberto Pugliese) (オスバルドの兄弟)、タンゴ“エル・レマテ (El remate)”の作者でギタリストのオルテンシオ・デ・フランコ (Hortensio De Franco)、それに彼女であった。そうして人目を忍ぶように働きながら周囲の人々からの支持を集めていった。ある日彼女はビオリニスタのホセ・ジュニッシ (José Junissi) と共に近所の慈善ショーに出演したが、それで彼女の名前は1日にしてセントロに達した。

“パキータ”の時代は女性タンゴ楽団リーダーなど思いもよらない時代であったが、彼女は独特の個性と強い意志によって高い障壁に勇敢に挑戦し、乗り越えていった。彼女が始めて公式に人前に姿を現したのは1920年の半ば頃、ラ・プラタ市のアルヘンティーノ劇場とキルメスの「クリストーフォロ・

コロombo」において、ホセ・ジュニッシの6重奏団のメンバーとしてであった。出演は土曜日だけで5～6曲演奏した。彼女のこうした演奏活動は後に彼女の楽団のバテリア奏者となる兄弟のアルトゥーロやタクシー運転手として若い彼女の移動を受け持ったやはり兄弟のエンリケによって常に支えられた。

自前の楽団を持つのに必要な経験を積んだ“パキータ”は、伝説的なカフェ・ドミンゲス (Café Domínguez) に出演したいと思った。そこで“パキータ”は1921年初頭にドミンゲス氏の代理としてのピオリスタのアルピディオ・フェルナンデス (Alpidio Fernández) の家で演奏を披露した。アルピディオ・フェルナンデスは先に述べたホセ・ジュニッシのオルケスタのメンバーであった彼女の演奏を聴いていたのである。その結果、彼女は始め月に300ペソのギャラを提示されたが、それをねつけ、結局、月に600ペソに落ち着いた。弱冠20歳の女性としては中々の交渉力である。因みに当時のバンドネオン奏者の平均のギャラは月に120ペソであった。こうして彼女はカフェ・ドミンゲスに6重奏団を率いて出演することとなり、夜の9時から12時まで演奏し、午前1時までには帰宅した。休みは週に1日であった。こうして彼女は最初の職業的女性バンドネオン奏者となった。1923年に彼女はここで自作のタンゴ“フロリアル (Floreal)”を初演した。このタンゴは同年、ファン・カルロス・コビアン (Juan Carlos Cobián) によって録音された (Victor 77187)。この録音は幸いなことに“JUAN CARLOS COBIÁN Y SU ORQUESTA 1926-1928” (el bandoneón EBCD 132) にCD復刻されている (ただしこのCDの「1926-1928」というタイトルやパンフレットに記載のデータは間違っており、1923年の録音 (8曲) や1944年の録音も含まれている)。

「オルケスタ“パキータ” (Orquesta “Paquita”)」と名づけられたこの6重奏団の編成は、ディレクター及びバンドネオン奏者は勿論“パキータ”ベルナルド自身、ピオリンはアルシーデス・パラベシーノ (Alcides Palavecino) とエルビノ・バルダロ (Elvino Vardaro)、ピアノはオスバルド・プグリエセ (Osvaldo Pugliese)、フルートがミゲル・ロドゥーカ (Miguel Loduca)、それにバテリアを担当した兄のアルトゥーロ・ベルナルド (Arturo Bernardo) であった。エルビノ・バルダロとオスバルド・プグリエセは共に1905年生まれであるから、恐らく15～16歳であったろう。オスバルド・プグリエセの場合は彼自身が“パキータ”に「自分もバー・ドミンゲスと一緒に演奏できるか?」と訊いたことがきっかけで参加することになったらしい。



アルトゥーロ・ベルナルドの回想によれば、彼女の演奏を聴きに来た群集を警察がコリエンテス通りからパラナ通りに排除しなければならなかったこともあったという。これは彼女の演奏内容もさることながら、物珍しさに押しかけた連中の方がずっと多かったのだろうと推測される。

カルロス・ガルデルは彼女を評して「バンドネオンのマッジョ性をマスターした唯一の女性」と言

ったという [5]。歴史家のホルヘ A. バッシオ (Jorge A. Bassio) も同様なことを言っており、更に続けて「最初の頃は敵視されたが、そのような敵視は彼女が実績を重ねると共に消え去った」とも付け加えている。

1922年にLR10 ラジオ・クルトゥーラが開局 (日本でラジオ放送が始まったのは1925年であるから、それより3年早いことになる) に際して、“パキータ” はピアニスタのホセ・タンガ (José Tanga) とのデュオを組んで記念出演し、オペラの一部やタンゴを演奏した。

1923年にはコリセオ劇場 (el Teatro Coliseo) で開催された作曲家協会主催の大タンゴ祭 (la Gran Fiesta del Tango) に、100人の音楽家中ただ一人の女性として、出演した。同年、彼女はモンテビデオでも長期にわたって演奏活動し、またワルツ “ディビノ・セロ (*Divino Cerro*)” を作曲した。1922年から1924年にかけて、彼女はラ・パロマ (La Paloma)、前出のドミンゲス、などのバーで精力的に演奏活動し、夏にはビジャ・クレスポの小広場や河縁のリゾートである市立海水浴場のテラスで演奏した。

1924年12月10日に彼女はブランカ・ポDESTA (Blanca Podestá) の率いる劇団と共にスマルト劇場 (el teatro Smart) にデビューし、ホセ・タンガ、マヌエル・ビセンテ (Manuel Vicente)、バルトロー・ローペス (Bartolo López)、ミゲル・ロドゥーカ、アルトゥーロ・ベルナルド、フロリンド・フェラリオ (Florindo Ferrario) (歌手) らと共に1925年2月末まで出演した。

こうして疲れ知らずの活動を続けていた“パキータ”であったが、25歳の誕生日を目前にした1925年4月14日に急死してしまった。彼女の死因については結核であったとの説が広まっているが、参考文献 [1] の著者であるグアダルペ・アバレ (Guadalupe Aballe) は実はそうではなく悪性の風邪 (= インフルエンザ?) であったと述べている。「ビジャ・クレスポの花」と呼ばれた彼女は生地 of ビジャ・クレスポに葬られた。

彼女は美人ではなかったが、魅力的であった。その風貌は殆どエーテルのような繊細な女性のそれであったとオスカル・スッチは述べている [2] (*). 左右に非対称的に分けられ、波打った金髪は彼女の顔の白さを浮き立たせた。瞳は黒く、濃い眉毛が特徴的であった。

これまで述べたような華々しい活躍にもかかわらず、彼女の録音が残されていないのは真に残念である。その代わりに彼女は前述の“フロリアル”の他にもいくつかの優れた作品を遺している。“カチータ (*Cachita*)” はロベルト・フィルボが1922年に楽団演奏で録音した (Odeon 6167) [2]。この録音が復刻されているか否かについては調査が及んでいない。この曲はその後フランシスコ・ガルシア・ヒメネスの詞を得て“ラ・エンマスカラーダ (*La enmascarada*)” と改題され、ガルデルによって1924年11月6日 (Odeon 18102) に録音された [2]。また“ソニャンド (*Soñando*)” はエウヘニオ・カルデナスの詞を得て、ガルデルによって1925年9月20日 (Odeon 18138) に録音された [2]。幸いなことにこのうち前者はEBCD 52 (CD) とSerie Azul-4595 (LP) に、後者はSerie Azul-4611 (LP) に復刻されている (**). “ソニャンド” はオデオンとマックス・グルックスマンによる第1回タンゴ・コンテストの入選曲ということだ。

(*) ここで言うエーテルとは化学薬品のエーテルではなく、19世紀の物理学者の間で光を伝播する媒質として考えられた仮想の物質を指すと考えられる。エーテルは全宇宙に充満しているが、天体やその他の物体はその中をまったく抵抗を受けずに運動できるとされた。

(**) LP復刻の調査については小林 謙一氏と高木 彰子氏のご協力を仰いだ。この場を借りて両氏に深甚の謝意を表します。

女性の地位が一般的に低かった時代にコピアン、フィルポ、ガルデルといった大家が彼女の作品を録音しているということは、これらの作品がそれだけ高く評価されていたということの裏づけになるだろう。

(2) フェルミーナ・マリスタニー [3]

フェルミーナ・マリスタニー (Fermina Maristany) (“ラ・マリスタニー (La Maristany)” または“フェルマ (Ferma)”) は、稀な女性バンドネオン奏者の中で歴史的及び実績において黒人として唯一無二であり、“パキータ”ベルナルドに次ぐ第2番目の存在として男性の仲間からも一目置かれていた。我々がしばしば利用する“ANUARIO DEL TANGO” [5] にも取り上げられているから、それなりの存在であったのだろう。

フェルミーナの生地はブエノス・アイレス州のカルメン・デ・ラス・フローレス市であるが、生年については1897年 [3] と1907年 [5] の2説がある。

彼女は始め母親であるフェルミーナ・セスペデスの下で音楽を学び、その後、ラ・プラタ市のサンタ・セシリア音楽院で勉強を続けた。ビオリンもピアノも弾きこなせたフェルミーナは1920年代に女性ばかりのオーケスタをいくつか組織し、映画館、劇場、コンフィテリーアなどに出演した。

バンドネオンを学び始めたのはメンドサ州においてであるが、誰が教師であったかはわかっていない。“パキータ”ベルナルドとコンフントを組んだこともあったが、担当したのはピアノであった。1920年代の中期から1930年代の初めまで、女性だけのオーケスタを持つことを夢見て、フェルミーナのはかない日々が続いた。

1928年の「オーケスタ総覧 (Guía Orquestal General)」には特別に頁を割いてバンドネオンを持っているフェルミーナの写真が掲載され、その下方には「広範囲のレパートリーを有する女性達のグラン・オーケスタ・ティピカ」と書かれている (右の写真参照)。

当時のフェルミーナは痩せて小柄なムラット (白人と黒人の混血) で、髪はかなり縮れており、態度は男のようであった。タバコの吸い差しを唇にくわえ、バラカスの通りを口笛を吹きながら歩き回る彼女の姿はその時代のうるさ方の眉を顰めさせた。

1933年の終わり頃に彼女はブエノス・アイレスのコロン劇場で開催された大編成のオーケスタの演奏会に加わる機会を得た。この演奏会は著作権料の徴収を認めた法律11.723の公布を祝ってマティーアス・サンチェス・ソロンド (Matías Sánchez Sorondo) 上院議員を称えるために企画されたものである。この怪物オーケスタは70台のバンドネオン、80台のビオリン、8台のピアノ、10台のクラリネット、8台のビオリンチェロ、8台のコントラバス、それに20人の歌手の集合であった。フェルミーナはペドロ・ラウレンス、アルマンド・ブラスコ、“ミノット”ディ・チコ、アントニオ・カカセといった当代のエースに混じって演奏した。この巨大オーケスタはフリオ・デ・カロ、フランシスコ・



カナロ、アンセルモ・アイエタ、アウグスト・ベルト、ロベルト・フィルポによって交互に指揮された。

1937年にフェルミーナはアコーディオン奏者としてフランシスコ・カナロのオルケスタに参加した。そしてアコーディオン奏者としての彼女のキャリアは続けながら、オンセ地区の「ウェスタン・バー (Western Bar)」で自分のオルケスタを指揮した。1939年から1940年まで期間中はホアキン・クレメンテ (Joaquín Clemente) の監督の下でアコーディオン奏者として“オルケスタ・シンフォニア・フェメニナ (Orquesta Sinfonía Femenina)”の一員として過ごした。このオルケスタはブエノス・アイレスのセルバンテス劇場に出演し、またラジオ・パリにも出た。

フェルミーナ・マリスタニーはブエノス・アイレスのビエホ・パレルモ地区で1985年7月31日に亡くなった。ガブリエル・クラウシはフェルミーナの演奏について「技術的にはその時代のバンドネオン奏者たちよりずっと先を行っており、よく知られた多くの男性奏者よりも優れてさえいた... グアルディア・ビエハのスタイルにおいて完成し、明確であるが、なお進んでいた」と証言している。

彼女は1947年から1950年の間に磁気テープに他の黒人女性音楽家との共演による7曲を録音している。それは先ずフェルミーナのバンドネオン・ソロに始まり、フェルミーナとフローラ (ビオリン) による“チケ”、“ボエド”、“マル・デ・アモーレス”、それに続いてフェルミーナのピアノとフローラのビオリンによる“ティエラ・ケリーダ”と“ウノ”、フェルミーナのバンドネオン、フローラのビオリン、ファニイのピアノによる“チケ”、そして最後にフェルミーナのピアノ・ソロによる“ロドリゲス・ペニャ”、“フローレス・ネグラス”で終わっている。このテープはコレクショニスタで研究家のロレンソ・エクトル・ルッチ氏の所蔵になるものである。

(3) 1920年代から1930年代における女性オルケスタと女性バンドネオン奏者たち

私は“パキータ”ベルナルドが古い時代のただ一人の女性バンドネオン奏者だと思っていたが、前述のように彼女と同時代の女性バンドネオン奏者は何人もいたらしい。オスカル・スッチは「フェルミーナと競争する女性バンドネオン奏者は多かったが、女性に対する根強い偏見の故に彼女たちの多くは洗礼名でのみ知られており、何人かはあだ名で知られている」と述べている [3]。そして後者の例としてスッチはアウローラ“ラ・コルドベシータ” (Aurora “La Cordobesita”)、クラウディア“ラ・ポルテニータ” (Claudia “La Porteñita”)、あるいは単にペルラ (Perla) (真珠?) と呼ばれた女性バンドネオン奏者たちを挙げ、その他にもプロセル (Prócer) (大物、傑物) というあだ名だけで知られた女性、アイダ・リオチ (Aída Rioch)、エルミニア・マグダレーナ (Herminia Magdalena)、ロサ・センピテッリ (Rosa Sempitelli)、そしてフェルミーナ・マリスタニーの大ライバルであり、「エル・アルマ・デル・バンドネオン (El alma del bandoneón)」のあだ名を持つマルガリータ・



サンチェス・ガスケット（“ポチータ”）（Margarita Sánchez Gasquet（“Pochita”））といった名前を彼女たちが住んだ住所と共に挙げている。

最後に挙げたマルガリータ・サンチェス・ガスケット（“ポチータ”）は1920年代後半以降の最も優れた女性バンドネオン奏者の1人であり、1928年のオルケスタ総覧にも名前が載っている。彼女は「オルケスタ・ティピカ・ポチータ（Orquesta Típica Pochita）」と名付けられた自分のオルケスタを主宰していた [3]。

彼女の作品としてはサンバの“テソロ・ミーオ（*Tesoro mío*）”とセベリーノ・マンコ（Severino Manco）の詞がついたタンゴ、“セ・レチフロー・ラ・ペルカンタ（*Se rechifló la percanta*）”がある。

1920年代から1930年代にかけて、いくつかの女性オルケスタが映画館、劇場、コンフィテリーア、バー、カフェ、また結婚式、懇親会、ダンス・パーティで演奏したそうである [4]。ここに掲げたのはそのような女性オルケスタの1つである「オルケスタ・ティピカ・ラ・ポルテニータ（Orquesta Típica La Porteñita）」の写真である。しかしこの写真で見える限り、これはバンドネオン合奏団であってオルケスタ・ティピカとは言えない。当時のこれらの女性オルケスタの演奏レベルについては記述も見当たらないし録音も残されていないので論評は困難である。中には「客寄せ」程度のものもあったのではないかと想像される。



女性タンゴ演奏家は最近だけの傾向ではなく1920年代にすでに存在した。しかし男性優位の時代にあってはそれらの中でごく少数の人達が後世に名前を残せたのであって、大多数の人々は、正当な評価や処遇を得ることも無く、無名のまま消えていったのである。

[1] Guadalupe Aballe, <http://www.todotango.com/spanish/creadores/bpaquita.asp/>

[2] Oscar Zucci, “El Tango, el bandoneón y sus Intérpretes”, TOMO III, (CORREGIDOR, 2007)

[3] Oscar Zucci, “El Tango, el bandoneón y sus Intérpretes”, TOMO IV, (CORREGIDOR, 2008),

[4] Simon Collier, Artemis Cooper, María Susana Azzi, Richard Martin, “¡tango!”, (Thames and Hudson Ltd. London (1995))

[5] Roberto Casinelli y Raúl Outeda, “ANUARIO DEL TANGO”, (CORREGIDOR 1998)

日本のタンゴ楽団（8〔完〕）



- 29 タンゴファンとは別世界の日本のタンゴ界
- 30 ポルテニヤ音楽の時間
- 31 元気の良かった戦後のハマのタンゴ人たち
- 32 タンゴ楽団終戦六十年
- 33 東京の繁華街にバンドネオンのサウンドが毎夜流れて居た「よき時代」を懐かしむ

蟹江 丈夫 (元会員・故人)

29

タンゴファンとは別世界の日本のタンゴ界

1948年から1955年にかけて、いわゆる昭和のタンゴ黄金時代？時代に日本のタンゴ楽団は、東京は銀座、大阪・名古屋においても、盛り場といわれる繁華街の裏通りにあったキャバレーが唯一の働き場所であった。連日連夜、それらの街角ではどこからともなく流れてくるバンドネオンの音色を耳にすることができた。

東京・銀座にはクラブ・シロー、カジノ・シロー、白馬シローなどの高級クラブがあり、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京、坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤが出演していた。ありがたいことにそれらのクラブはスピーカーで控えめながらステージの音を外に流していた。私たち学生は、一晩に1カ月分の月給が吹っ飛ぶようなクラブへ行けるわけがなかった。一部裕福な家庭の御曹子などが通っていて、羨ましく指を銜えて見ていた時代（昭和27年～29年頃）であった。我々金欠学生盲者は街角にルンペンのように佇んでそれらの音に聴き惚れていたのがあった。当時、最初の夕方六時頃から八時頃までは真面目にタンゴの名曲を演奏していたが、九時を過ぎる頃になると「炭坑節」や「お座敷小唄」、「湯の町エレジー」などが演奏されるようになった。あのオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤも「黄色いリボン」や「オー・マイ・パパ」、「ジャンバラヤ」、「テネシー・ワルツ」を演奏していたし、ティピカ・東京も「ブンガ・ワン・ソロ」や「トランプーラン」などワケの分らないものを演奏していた。ティピカ・東京やティピカ・ポルテニヤ、ティピカ・パンペーラなどは結構よいタンゴを演奏していたが、他のタンゴ楽団は最初から「湯の街エレジー」で、聴いているわれわれが気の毒に思うほどであった。

オルケスタ・ティピカ・東京がプグリエーセ・ナンバーの「デ・フローレオ」を演奏していると、フロアの酔っぱらいの罵声が響き、女の子のキャーキャーという声が聞こえ、「これはもう世も末だワイ」と、情けない感情で家路についたこともあった。

出演場所の雰囲気もあったが、緑川嘉信（バンドネオン）とベルデ・イ・ス・オルケスタが出ていた「アスター・ハウス」（銀座）やオルケスタ・ティピカ・ルナ（バンドネオンの前田延さんがマエストロ）が出ていた東京駅・八重洲口前の「ハバネラ」などは、なかなか良いタンゴの音が毎晩のように、冴えたバンドネオンと共に流れていた。新橋駅近くの安キャバレーといわれた店からはバンドネオンの

音で「串本節」や「新土佐節」が聞こえてきてがっかりしたこともあったが、今日と違ってバンドネオンの音色は街角で結構楽しむことが出来た。

東京・西銀座の並木通りにあった貿易会館は高級クラブで、玄関にソファーが幾つもあり、中の良い音がスピーカーから流されて、坂本政一楽団の演奏を楽しむことが出来た。それにしても「フェステファン」や「ラグリマス」に混じって「ブルー・キャナリー」や「パイパイ・ママ」などを聴かされたのには参ったが、それでも何気兼ねなく、ソファーで流れてくるタンゴのサウンドを楽しむことが出来たのだからよい時代であった。もっとも、時折りコワイオニイさんがサングラスを胸のポケットにしまいながら入ってきたりしたこともあったが、何事もなくタンゴの音を楽しむことが出来た。

余談であるが、タンゴ楽団のメンバーの引き抜き騒ぎでこれらのオニイさん方が活躍、殴られたバンドネオン奏者M氏など決して無傷なことはなかったようである。M氏がベルデ・イ・ス・オルケスタからオルケスタ・ティピカ・ポルテナヤへ移る話が出たときのことである。

M氏は最初、パーカッション（ボンゴ）でティピカ・ポルテナヤに参加したが、どうしてもバンドネオンが弾きたいとあって、楽器を持ってきてしまい、最初は渋い顔をしていた坂本氏も次第に容認するようになっていった。

しかし、「ベルデ」の方にしてみれば「米ビツ」であるM氏を取られてしまっは一大事である。マネージャーをしていた海軍上がりとかいうオニイさんが腕を振り上げてしまったということであった。やはり腕の立つ人はどこの世界でも引き抜き騒動に巻き込まれる宿命を背負うことになってしまうようである。

ある時坂本政一さんにお会いしたが、珍しく顔を真っ赤にしてお怒りになっていた。この次第は中西氏が若手タンゴ演奏会と銘打って、宮尾和雄、前田照光、岡本昭などを中心とした新オルケスタの結成というチラシを印刷して持ち歩いたときのことである。この後坂本氏が中西氏にプレゼントだといって赤十字マークの入ったカフス・ボタンをくれたそうである。これは「怪我（ケガ）すんなヨ？」という意味である。



緑川嘉信と淡谷のり子（1949年）写真は蟹江氏提供

=====

30

ポルテナヤ音楽の時間

横浜ポルテナヤ音楽同好会という言葉の響きにはどこからともなく聴こえて来るあのバンドネオンのサウンドが秘められて居る感じがする。

ただに地球の裏側から伝わって来るタンゴの息吹きに港町『横浜』に集う皆様の心意気がタンゴの情熱を倍加させて、聴く人たちの胸のなかに喰い込んで来るようだ。

日本で『ポルテナヤ音楽』という言葉が広く使われ始めたのは、戦争が終って間もなくの1946年11月15日昼のNHKラジオから流された「エル・アパーチェ・アルヘンティーノ」の軽快なミロンガのり

ズムに乗った早川真平楽団のサウンドと共に力強く打ち出された宮田アナウンサーの「ポルテニヤ音楽の時間です」の声であった。

「ポルテニヤ音楽というのはあのラ・クンパルシータというタンゴを中心としたアルゼンチン、ブエノス・アイレスから世界に羽ばたいている心も踊る情熱のリズムと胸熱くなるすばらしいメロディーあふれる音楽のことでございます」という語たりかけで、続いてメンバーが紹介された。「バイオリン原孝太郎、田島巳之助、村上太郎、バンドネオン早川真平、村本慎次郎、前田延、ピアノ増尾博、ベース見砂直照、クラリネット坂口新のオルケスタ・ティピカ・ラジオ東京の皆さんです」「編曲・指揮は高橋忠雄さんです」と続けて流された。「最初の曲はクンパルシータの作曲者、マット・ロドリゲスが書いたタンゴの生まれた街を描いたサンテルモです」と紹介されたが聴いて居る我々は先ず「バンドネオンって何だろう」と首をかしげてしまった。だいいちオルケスタ・ティピカなんて聞いたこともないことばにただドギマギするだけであつた。手元にあるボロボロのメモを判読すると、このとき演奏された曲は「カミニート」「バロン」（たぶんロムート作のミロンガ）「エスペラール」そして「サン・テルモ」の四曲であつた。当時、戦後の混乱期で食料もママならず黒いコッペ・パンをかじりながらこの放送を聴いて居た記憶がある。この番組はそれでも一年近く続いた。とにかく日本のタンゴ楽団の演奏ではあつたが唯一の本格的なタンゴ番組であつた。

当時はラジオはNHKのみで、ほかに駐留軍向けのWVTRがジャズ・ファンにとってはこたえられない程の恩恵をほどこした。タンゴ・ファンはささやかなNHK様が頼りであつた。タンゴに関してはナマ演奏だけでなく、レコード番組が戦前リリース盤のよいところを連日流してくれたのでけっこう楽しむことが出来た。

「S.O.S」「エル・アコモード」「ロドリゲス・ペーニャ」などはこれらの放送で知ることが出来たのである。当時の放送はただ曲名をいうだけで演奏者の紹介もなくぶっきらぼうであつたがかえってそれが時間的により多くの曲を聴かせてくれることになった。

当時中学生であつた自分は午後の軽音楽の時間に間に合うように家に飛んで帰ったことも屡々であつた。ただ当時は停電がちょくちょくあり、停電になるとラジオを聴くことが出来ず悔しい思いをしたことが多かった。隣町に米軍の将校家族が多く居住しており、そちらの方は殆ど停電がなく、塀越しにたたずんで聴いたことが何度もあつた。桜井潔楽団出演のとき、始まってすぐ切られて泣きたい気持ちになつたときもあつた。

考えてみるまでもなく、自分のタンゴ歴はラジオによって育てられたというひとの言葉が今になって身に沁みて感じられる。ファンの多くの方々もラジオからタンゴに親しんだ方が多いと思うが、1951年以降の民放時代を迎えてからの方が殆どだと思う。



早川真平（B n）刀根研二（P f）1951年

写真提供 蟹江氏



オルケスタ・ティピカ・東京 1953年

=====

3 1

元気の良かった戦後のハマのタンゴ人たち

戦争が終わって、欧米人の姿が街のあちこちに見られるようになったのは横浜であった。あのマッカーサー元帥が姿を厚木の飛行場に現したのは、終戦の日から一週間目のことであった。

そして間もなく進駐軍向けのラジオ放送WVTRが開始された。その中でザビア・クガートのラテン系の音楽が異彩を放って居た。タンゴで『インスピレーション』『アディオス・ムチャーチョス』などが演奏されて居た。東京、横浜地区で公演された米短編音楽映画にもクガート楽団が出演、これらのタンゴを演奏して居た。この映画を三回も観てしまったがそれほど我々にとっては強いインパクトを与えたのである。

NHKも積極的にタンゴの演奏を放送するようになったが、第二放送が再開された頃には楽団南十字星が連日連夜出演して居た。翌年からは松本新室内楽団が殆ど出ずっぱりの状態であったが、松本さんのお話では、戦中から海外向けの放送～謀略放送含む～には常時出演していたのでその絡みからNHKさんはお得意様になってしまったと言っておられた。

当時は電話が良い状態が無かったため電報で連絡を取り合い、多い日は三回から四回電報を受け取ったときもあったとのことである。比較的近い所に住んでいたメンバーには自転車に乗って呼び出しに行ったこともあったと語っておられた。

1947年（昭和22年）の1月のある土曜日（18日）などは一日三回も出演された。その三回とは「子どもの時間」、昼の「軽音楽の時間」、そして夜の「希望音楽会の時間」であった。松本信三さんはお陰様でテーマ音楽として使用していたエクトル・バレラのパソドブレ『チャリート』がすっかり有名になり、名曲扱いされたほどであったとよく嬉しそうに語っておられた。

毎週土曜日夜のダンス・タイムでは東京・日本橋の白木屋ダンス・ホールからの中継で松本新室内楽団の独壇場であった。当時最高の人気楽団と言われた櫻井潔とその楽団よりも、ラジオ放送出演では新室内楽団の方が勝っていた。

その松本信三さんがお亡くなりになってからもう四年経ってしまった。

その後、オルケスタ・ティピカ東京の出現やポピュラー音楽のジャンル化が促進されるようになって来ると櫻井、松本、南十字星の時代は終わりを告げるように先細って行ったのである。

言い替えるとステージ型の楽団は姿を消して行かざるを得ない環境になって来たのである。ポピュラー音楽の邦人演奏家たちは外来の一流演奏家たちの日本上陸という新しい時代の到来で、余程しっかりした基盤を築いて居ないと活躍の場は狭まるいっぽうであった。

タンゴ楽団にとってはダンス・ホールが唯一の活躍の場として確保しなければならない貴重な仕事場となってしまった。1960年代初めにはホンの僅かのライブ・ハウスがあるのみで、ナマの演奏は年何回かの東京、日比谷公会堂、野外音楽堂のコンサートでしかタンゴ・ファンと接する場はなくなってしまったのである。

当時の演奏家たちの団体『ミュージシャン・ユニオン』の会報を見ると、横浜の石井庸介とキンテート・タンゴ楽団の活躍が記載されて居る。東京の楽団の元気があまりない時期にあって石井楽団の活躍は威光を放って居た感じであった。

1956年頃、川崎に元気のよい若いタンゴ楽団が活躍して居るとの情報が流された。これが西塔辰之助とオルケスタ・ティピカ・パンパであった。伊吾田勇三のオルケスタ・ティピカ・ブエノス・アイレスも川崎で大活躍で、おなじ川崎のオルケスタ・リオとともに東京のタンゴ・ファンたちの注目を集めて居た。

タンゴ楽団の活躍は東京よりも神奈州と言われた時代が確かにあったのである。

=====

3 2

タンゴ楽団終戦六十年

今、時代は新世紀に入りつつある。新しい時代の息吹が渦巻いて居て、その空気が肌にのしかかって来るような昨今の感じがする。昭和という言葉も時の流れとともに昔と言う言葉と肩を並べるようにさえなって来た。1945年の春、横浜市が猛爆を受ける直前、横浜駅西口に在った小さな映画館で面白くもないスパイ映画を観て、休憩時間に流された音楽が強く胸に刻み込まれた。はじめて感じたバンドネオンの重厚なサウンドであった。

今、思い返してみるとどうやら純粋なポルテニヤ音楽ではなく、ドイツのP・クロイデル楽団のアマルグーラ～邦題名『皮肉ばかり』～であったようだ。このレコードはテレフォン盤で『ジェラシー』～邦題名『目かくし』～ずいぶん苦労した戦時下の邦題名～のB面であった。このレコードは1941年にキング・レコードの洋盤としては空前の売れ行きであったようだ。

空襲の合間の日曜日の午後で、それから半月の後、この映画館も横浜大空襲で廃墟となり姿を消してしまった。近くの東横線の鉄橋の下には焼けただれた市電の残骸が、かなり永いあいだ放置されて居た。

横浜駅から東京に向かう電車の車窓からは広大な焼け野原となり、東横線白楽駅の方までずっと見渡せた程であった。

5月29日の横浜大空襲のときは東京に居たが朝、9時少し前からはじまった大空襲はB29爆撃機の大編隊がいくつもいくつもあらわれ、雨、あられのように投弾して10時頃には南西の空は猛煙で暗黒になってしまった。東京の高射砲隊が何機かを撃ち落とし皆で拍手したのが思い出される。父親が保土ヶ谷の軍需工場の工場長をして居たのでずいぶん心配したが夕方近くに電話で「何とか無事で今、上星川の臨時避難先に居る、2、3日は東京へは戻れない」とのことで一安心したのが思い出される。

横浜大空襲の4日前、東京が最後の大空襲といわれ猛爆された5月25日の夕方NHKラジオ放送に櫻井潔とその楽団が出演、自作の『懐かしの故郷』『たそがれ』軍団歌謡『ラバウル海軍航空隊』『ジャワの夕月』などを演奏した。バンドネオンの坂本政一さんはこの放送の直後、一時楽団を離れて夫人の故郷の長野県へ終戦間際まで疎開された。

東京は都心部をはじめほとんどが焼け野原となってしまっていて居たが、焼け残った映画館などがすこしずつ復旧し細々ながら興業をはじめて居た。日比谷の東宝会館、浅草の常磐座などは早くも軽音楽演奏会などと看板を出して客の呼び込みをはじめた。楽団南十字星やバラの楽団、大山秀夫、淡谷のり子楽団、櫻井潔とその楽団などがいち早く看板に名を連ねて居た。横文字では緑川嘉信とベルデ・イス・オルケスタが復興の先陣を切った。松本新室内楽団はステージよりもラジオ放送で連日のように出演して居た。

タンゴではピアニストの和田肇氏が「ラ・クンパルシータ」と「ロドリゲス・ペーニャ」をNHKラジオから軽快にリズムカルに流して好評を得て居た。1945年当時、ポルテニヤ音楽とか中南米音楽という言葉は新聞、ラジオにはまだ登場して居なかった。ポルテニヤ音楽、オルケスタ・ティピカという言葉が放送されたのは1946年（昭和21年）11月15日のことであった。

NHKの太田アナウンサーは高橋忠雄氏解説原稿を読みながら「ポルテニヤ音楽というのはあの名曲ラ・クンパルシータを中心とするタンゴの音楽のことです」とソフトな口調で語りかけるように放送した。日曜日のお昼というよい時間帯でもあり、多くのリスナーの共感呼び、たちまちのうちに人気番組となり、NHKのスタッフが悲鳴を上げるほど投書やリクエストが殺到した。『夜のタンゴ』『碧空』『黒い瞳』『ジェラシー』『ばらのタンゴ』『奥様お手をどうぞ』『小さな喫茶店』などのリクエストの山に高橋氏も頭をかかえてしまった。この時期、多くの聴衆はタンゴはアルゼンチンもコンチネンタルも自ら区別して聴こうというところまで知識が浸透して居なかったようである。

=====

3 3

東京の繁華街にバンドネオンのサウンドが毎夜流れて居た 「よき時代」を懐かしむ

戦後という時代から新しい時代に移りはじめて居た頃、1950年代中頃、日本のタンゴ人たちはアルゼンチン・タンゴの新しいサウンドに期待と戸惑いにあふれた日々を過ごしていた。一番タンゴ・ファンに強烈なインパクトを与えて居たのがアニバル・トロイロのtk盤のレコードの到来であった。今までのレコード盤には見られなかったカラフルなレーベル・フェイスに皆が目を見張った。音質の方

はあまり芳しくなかったが、それでも、これが今のタンゴのサウンドだと皆が競って飛びついた。

やっと20歳代に到達した自分にとって初めて手にしたtk盤のトロイロの名演、ピアソラ作品『プレパレンセ』、モーレスの傑作『エル・パティオ・デ・ラ・モローチャ』を聴いてカナロも、フィルボもビクトルもダリエンスもどこかへ飛び去ってしまう程のインパクトを感じた。

「これからのタンゴはこれなんだ」と勝手に自分で思い込むようにさえなってしまった。おそらく当時の若い日本のタンゴ・ファンたちは誰もがそう感じたに違いない。当時、ファンたちから神様のように慕われて居た高橋忠雄先生が火つけ役であった。

日本の演奏家の代表、オルケスタ・ティピカ東京のマエストロ、早川真平さんはまず、カルロス・ディサルリに飛びついた。曲は「ア・ラ・グラン・ムニエーカ」であった。即レコード・コピーをしてティピカ東京の主要レパートリーに加えた。さらにオスバルド・ブグリエーセのレパートリーからはバイオリンの名手、フリオ・カラスコの手による『デ・フローリオ』が採り上げられた。今日の演奏水準から見ればアマチュア楽団の少し上と云ったところの出来栄であったがそれでも、当時としてはサマになって居て日比谷公会堂に集うファンたちの大きな拍手を浴びていた。ピアソラ作品では『パラ・ルシルセ』が盛んに演奏されたがファンたちの評価は日光のひとつ手前の駅～イマイチ～であった。

当時、日本の有名タンゴ楽団のほとんどは東京・銀座の一流ナイト・クラブに出演して居た。オルケスタ・ティピカ東京の出演していた「クラブ・シロー」は一晩で1カ月分の給料が吹っ飛ぶ程の高価なテーブル・チャージであったが、恵まれた家庭の若いタンゴ・ファンは時折それらの店に客として姿を見せていた。当方はバンド・ボーイのアシスタントのような顔をして楽屋へ潜り込んだりしたこともあったが、玄関ロビーの長椅子に用ありげな業者のフリをしてスピーカーから流れるタンゴの名曲に酔いしれたりしたが夜八時を過ぎると一流楽団のサウンドもアルゼンチン・タンゴから「湯の街エレジー」「ブンガワン・ソロ」に様が変わりしてしまうのであった。どんな有名な一流楽団も残念ながらジントもどきのバンドに変身を余儀なくされるのであった。しかし、バンドネオンのサウンドは東京・銀座の並木通りを歩けば必ずどこからか流されて居た。

ダンス・ホールに徹して居た銀座の美松や赤坂のフロリダなどでは深夜までマトモなタンゴが流されて居た。ある時、銀座裏で坂本政一さんのバンドネオンの音に酔いしれて終電車（東京都電）に乗り遅れて暗くなった銀座・日本橋通りを歩いて本郷まで帰ったことも数度体験した。キャバレーなどで仕事をしていたバンド・マンたちはホステスたちと相乗りのタクシーで帰宅して居たようだ。ある有名なマエストロ（Sバンドネオン氏）は仕事の後吉原へ繰り込み、金が足らなくなりマネージャーの自宅（事務所兼用）にウマを連れて立ち寄りマネージャー氏が暫くカンカンに怒って居たのが思い出される。同道していたバンドネオン奏者I氏は「トンだ災難だった」とボヤいて居た。

日本のタンゴ・マエストロ、ミュージシャンたちは当時はファンから見れば遠い存在であったようだ。一流楽団といえどもステージでの活躍は数えるほどの機会しかなく、定期的に放送に出演できる楽団でさえも皆、同じ道を歩いていたのである。しかし、キャバレーは練習の場としてはこの上もない格好の場所であった。早川真平とオルケスタ・ティピカ東京や坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤは、これらの店で午後早いうちからよく練習に励んでいた。ときどき勝手にお邪魔して聴かせていただいたのも今となっては遠いよき思い出になってしまった。

このような練習の場に恵まれない楽団はずいぶん苦勞されたようで、終業後の学校の講堂を借りて

練習に励んだ楽団も多く存在した。ある意味では大変厳しい時代でもあったと云うことが出来るのではなかろうか…。



1953年11月東京四谷の文化放送第一スタジオにて、レギュラー番組「バースデー・コンサート」(高島屋提供)の収録。司会は評論家の高山正彦(写真後列右から2番目)。藤沢嵐子(前列中央)、早川真平(前列左から2)、刀根研二(後列右端)、高珠恵(後列左から3)、植村由美子(後列右から3)、笠原喜三郎(後列左から2)、岡崎恵三(前列左端)、前田照光(前列右端)、関塚大八郎(前列右から2)

=====

「日本のタンゴ楽団」は本号をもって完結いたしました。長い間のご愛読を有難うございました

(編集部)。

前回、映画「タンゴ」(1933)の制作経緯と出演者について触れたところであるが、これはアルゼンチンで歌・演奏が全編トーキーで制作された最初の映画という記念すべき作品でもあるので、今回はその内容や背景についてもう少し述べてみよう。

■映画「タンゴTANGO」のあらすじ

この映画はかつて中南米音楽社からDVDも発売されていたので、ご覧になった読者も多いであろうが、まずはその中南米音楽社の「あらすじ」の引用から。

『アルベルト (アルベルト・ゴメス Alberto Gómez) は、ティタ (ティタ・メレーロ (メレージョ) Tita Merello) と恋仲。彼女のために、やくざ者 (フアン・サルシオーネ Juan Sarcione) と決闘して倒し、牢にまで入る羽目になった。ティタはずっと彼を待っていたのに、彼女が他の男と一緒にになったと思い込んだアルベルトは傷心をいだいてパリへ渡る。パリではエレナ (リベルタ・ラマルケ Libertad Lamarque) という女友達ができたが、悩みは癒されない。ようやく彼をたずねあてて来た愉快的親友ベレティン (ルイス・サンドリーニ Luis Sandrini) の知らせで、アルベルトはティタの待つブエノスアイレスに帰る... これに、パリの色男、ペペ (ペペ・アリアス Pepe Arias) と美女アリシア (アリシア・ビニョーリ Alicia Bignoli) の軽いエピソードなど.....』というものである。

■「タンゴTANGO」で使われた曲目

この映画はアスセナ・マイサニ Azucena Maizani が映画シーンとは別枠で歌う2曲、「ブエノスアイレスの歌 CANCIÓN DE BUENOS AIRES」に始まり、「1900年のミロンガ MILONGA DEL 900」に終わる。マイサニの次にバイオリンのエルネスト・ポンシオとクラリネットのフアン・カルロス・バサン Ernesto Ponzio = Juan Carlos Bazán の「ドン・フアン DON JUAN」、ティタの「私が愛するところな風 YO SOY ASÍ PA L'AMOR」、ポンシオ = バサンの「エル・エントレリアーノ EL ENTERRERIANO」と続く。ここで往年の名手、エル・カチャファス EL CACHAFAS、ことベニート・ビアンケ Benito Bianquet とパートナーのイサベル・サン・ミゲル Isabel San Miguel の踊りが見られるところが貴重である (下記「マレバーへ」でも)。

リアチュエロ川を背景にフアン・デ・ディオス・フィリベルト Juan de Dios Filiberto 楽団の「ローチャの曲がり LA VUELTA DE ROCHA」、マイサニの「古いブーツ BOTINES VIEJOS」、この伴奏はフィリベルトの指揮が見られる。決闘シーンで同じフィリベルト楽団の「マレバーへ MALEVAJE」。「タコネアンド TACONEANDO」からアルベルトがパリに渡るシーンで「あなたの街を出ないで NO SALGAS DE TU BARRIO」をティタが歌う。女性楽団の「すすり泣き SOLLOZOS」、ペドロ・マフィア Pedro Maffia 楽団の「ペレーレ PELELE」、ゴメスの「霧 BRUMAS」となってパリの場面が変わる。

パリ・シーンの最初はフアン・ダリエンス

Juan D'Arienzoの「チルーサCHIRUSA」。実際はこの撮影場所は有名なブエノスアイレスのキャバレー「チャンテクレール」であろう。ダリエンソ自身がバイオリンを弾いているのが見られるのも貴重。

パリの店でゴメスが歌う「ボヘミアンの魂ALMA DE BOHEMIO」、そして圧巻がラマルケの「アンダーデートANDATE」、ダリエンソのエレクトラ時代のピアニストの一人、ルイス・ビスカLUIS VISCAが伴奏している。次いで「うらみRENCOR」ではエドガルド・ドナートEdgardo Donatoの指揮が見られる。ゴメスの「魂ALMA」、マフィア楽団の「怠け者HARAGÁN」。そして同楽団の伴奏でメルセデス・シモーネの「ミロンガ・センチメンタルMILONGA SENTIMENTAL」「カンタンドCANTANDO」と名唱が続く。マフィア楽団の「ベンタロンVENTARRÓN」、オスバルド・フレセドOsvaldo Fresedoの指揮で「何故POR QUÉ？」。

ブエノスアイレスに帰るアルベルトにふられたラマルケが歌う「哀れな恋人NOVIESITA」も素晴らしい。

ブエノスアイレスに戻ってからの場面でティータが「ラ・チフラダLA CHIFLADA」を歌い、最後のマイサニに至るまで25曲が使われている。



(写真はゴメスとラマルケ (↑)、
ポンシオ＝バサン楽団 (→))

■「タンゴTANGO」の特徴と意義

この映画は、1933年の1月から2月にかけて撮影され、3月に編集、4月27日には上映開始と、スピーディに進められたが、初の全編トーキーと言っても、まだ無声映画時代の名残を残しているところが面白い。シーン・チェンジの随所で、全画面的に文字の解説が出てくるのがその典型である。

この時期の名歌手・楽団をこれだけ堪能させてくれるのは意義深い。入場料は座席によって違い、1.5ペソから6ペソであった。

また「あらすじ」から推察するところであるが、その後のタンゴ映画、あるいはタンゴそのもののイメージの原点がこの映画のシナリオに集約されているということがいえよう。この映画がヒットしたので、その後の映画もこのようなシナリオを踏襲したのか、この頃は既にタンゴの歌詞自体にこの映画のようなストーリーが多いのでそうなったのか、定かではないが、興味深いところである。

いずれにしても、監督・脚本のルイス・モグリリア・バースLuis Moglia Barth、台詞のカルロス・デ・ラ・プーアCarlos de la Púa、そして何よりプロデューサーのアンヘル・メンタステイÁngel Mentastiという人たちの努力でアルゼンチン初の完全トーキー映画が出来上がり、その後のタンゴ映画の発展に大きく寄与したことを記憶に留めたい。



◎ 女ゴジェネチェ、イディッシュ・タンゴ、ハイソ音源 ◎

佐藤 進

遅れてきたタンゴ愛好家も日本タンゴ・アカデミーに入会して7年が経過しました。

1920年代の針音のする文化遺産的演奏に涙した時期を経過し、このところ幅広く手当たり次第に乱聴気味です。その中から最近聴いているCDを紹介します。

1. 女ゴジェネーチェを聴く

CD: Melopea CDMSE 5052 ROBERTO GOYENECHÉ (Polaco) 1993 "AMIGOS"

曲: Garganta Con Arena =砂まじりの声 (Cacho Castana曲、詞)

歌: Adriana Varela

このCDはライナーによるとゴジェネーチェの104番目のCDで、1993年の音楽活動を総括するものです。ゴジェネーチェを取り囲む“Amigos”が参加しています。参加している“Amigos”の主な音楽家はAdriana Varela - 歌、Esteban Morgado - ギター、Litto Nebia - ピアノとシンセサイザー、Nestor Marconi - バンドネオン、Walter Rios - バンドネオンですが、曲によりゴジェネーチェの歌の伴奏をCarlos Bueno Sextetoもつとめています。

CDの曲は以下のとおりです。曲名の後の()の中は歌手名

1. Milonga Del Trovador - milonga (Goyeneche)
2. Berretín (Goyeneche)
3. Desencuentro (Goyeneche)
4. Garganta Con Arena (Adriana Varela)
5. Balada Para Un Loco (Goyeneche y Varela)
6. Romanza Para El Polaco (Litto Nebia)
7. La Última Curda (Goyeneche)
8. Como Dos Extraños (Goyeneche)
9. Tango De Los Abuelos, Los Padres Y Los Hijos
(Goyeneche, Adriana Varela y Litto Nebia)
10. El Motivo (Goyeneche)
11. Romanza Para El Polaco



ゴジェネーチェの亡くなる1年前のろれつがまわらない歌が聴けますが、ここから想像できるのはよたよたした身体に鞭うちつつ歌う姿です。晩年の味のある歌と言えます。

Milonga Del Trovadorは聴き応えがあります。

このCDのなかで注目したのは、“女ゴジェネーチェ”といわれるアドリアナ・バレーラの歌う「Garganta Con Arena=砂まじりの喉」です。作曲家で歌手でもあるカーチョ・カスターニャがゴジ

エネーチェに捧げた曲で、詞も彼がつけています。「Garganta Con Arena」はいかにも晩年のしわがれ声になったゴジェネーチェを表すのにピッタリの曲名です。

この曲を初めて聴いたのはアドリアナ・バレーラとカーチョ・カスターニャのドウオで、2000年代になってからのライブ録音ですが、それとはなく歌詞を聴いているうちに、ゴジェネーチェの死後作者がゴジェネーチェに捧げた曲と信じていました。歌詞の一部に

「歌ってくれよ、人々は君に拍手を惜しめない、
君は死んでゆこうとも、人々は君の痛みをわからない」

という個所がありますが、私の感覚ではこのような人の死を表す歌詞は亡くなった後で付けられるのが一般的なため、ゴジェネーチェの死後本人に捧げられた作品と思っていました。それから数カ月して標記のCDを入手しアドリアナ・バレーラの歌を聴くことになりました。CDのライナーには録音は1993年と明記してあり、この曲と歌詞が作られたのは1993年以前がはっきりしました。まだゴジェネーチェが現役で活躍している時に作られたということになります。聴くたびに若干の違和感を感じる部分です。

プロ歌手としてデビューしてから3年目のアドリアナ・バレーラの歌は、Litto NebiaのピアノとシンセサイザーそしてEsteban Morgadoのギターをバックに、伴奏のゆったりしたテンポにのって一語一語言葉をかみしめながら、Polaco讃歌を歌いあげています。この後1年後にゴジェネーチェが亡くなることを思うと感慨深いものがあります。

2. イデイッシュ・タンゴを聴く

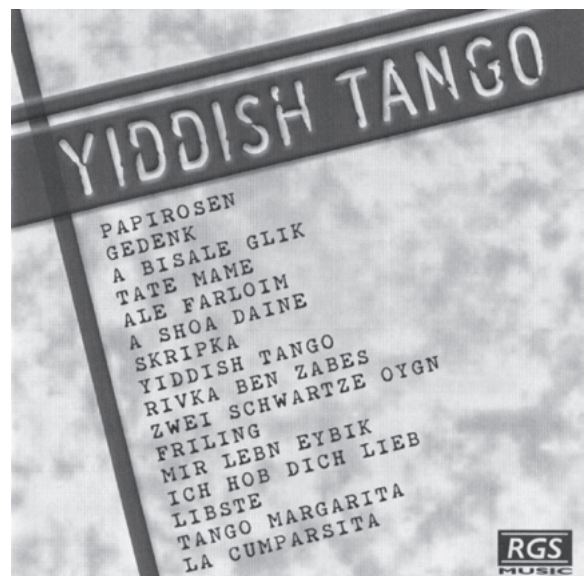
CD：RGS Music 1261-2 Yiddish Tango

曲：Papirosen=パピロースン（Herman Yablokoff曲、詞）

歌：Zully Goldfarb

イデイッシュ・タンゴと表現されるタンゴがあります。イデイッシュ・タンゴという確立された音楽の分野があるわけではないけれど、イデイッシュで歌われるタンゴと考えればよいでしょう。イデイッシュとはユダヤ諸語の一つで、ドイツ語から発展しスラブ語やヘブライ語などの単語も加えられ、主に戦前のドイツ語圏や東欧諸国で暮らすユダヤ系の人達の間で使用されていました。1935年時点では世界中に1千万人以上のイデイッシュを話す人達がいたとされますが、第二次世界大戦中のナチス・ドイツのホロコーストによるアシュケナージの激減、その後のイスラエルへの移住、アシュケナージの言語変革・言語同化により現在イデイッシュを話す人口は激減しています。

このCDはユダヤ系音楽を多くリリースしているRGS Musicのイデイッシュ・タンゴの編集盤です。イデイッシュのオリジナルが12曲、イデイッシュで歌うアルゼンチン・タンゴが2曲納められています。2000年前後の新しい録音を集めています。曲名は



- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|
| 01 Papirosen (Zully Goldfarb) | 09 Duelo Criollo (Bernard Potock) |
| 02 Gedenk (Benzion Witle) | 10 Zwei Schwartz Oygn (Jacob Sandler) |
| 03 A Bisale Glik (Rosita Londner) | 11 Friling (Zully Goldfarb) |
| 04 Tate Mame (Jacob Sandler) | 12 Mir Lebn Eybik (Aduo Myr) |
| 05 Ale Farloim (Benzion Witle) | 13 Ich Hob Dich Lieb (Jacob Sandler) |
| 06 A Shoa Daine (Shifra Lerer) | 14 Libste (Benzion Witle) |
| 07 Skripka (Henri Gerro) | 15 Tango Margarita (Jacob Sandler) |
| 08 Yiddish Tango (Bernard Potock) | 16 La Cumparsita |

で、()内は歌手名です。

通常CD 1枚を通して聴くと途中で飽きてくるのが時々あるのですが、このCDは全曲イディッシュの歌物であるにもかかわらずしばしば通して聴いています。私の身体にユダヤの血が流れているわけではないけれど何か惹かれるものがあります。私の学生時代に知りあったユダヤ系アルゼンチン人の親友夫妻は、新婚旅行で日本へ来た時は一緒にユダヤ教会へ行ったり、私がアルゼンチンへ行くとタンゴ・クラブへ案内してくれたり、パンパへ狩猟に行ったりと楽しい時を過ごしました。1970年代後半のアルゼンチン軍政の圧迫を逃れイスラエルに移住してしまいました。好きなアルゼンチンを離れねばならなかった親友夫妻を思うといつも心が痛みますが、彼らがユダヤ系ということが、心の底でイディッシュ・タンゴへのおもいを強くしているのでしょう。

イディッシュ・タンゴはそれ自体に特徴があるわけではないけれど、メロデーは東欧諸国のタンゴに似ています。このCDのなかで特に好きな曲は1曲目の「Papirosen=パピロースン」です。Herman Yablokoff (1903年に現在のベラルーシのグロドノ生まれのユダヤ系)は第一次大戦中ドイツに占領されたグロドノで煙草を売り歩いた経験があります。苦しかった子供時代の思い出を詞につづり曲をつけたのですが、メロデーは古くからこの地域にある伝承曲から採りました。なお、実際に彼が煙草を売っていたかどうかははっきりせず、煙草を売っている孤児を見かけてヒントを得たと言う説もあります。

詞の概略は 「寒い霧の夜、手に煙草とマッチの入った籠を持った子供は、
あたりを見回しながら悲しく訴えている、
煙草を買ってちょうだい、僕の煙草は安いよ、濡れてないよ、
煙草が売れないと何も食べるものがない、
父さんは戦争で戦って死んだ、
母さんはゲッターでドイツ人に殺された、
僕も怪我をして目が見えない、
煙草を買ってちょうだい」

というものです。

ブエノス・アイレス生まれのZully Goldfarbという女性歌手が歌っています。彼女はイディッシュで歌うタンゴやユダヤ音楽を父母が聴いていたという環境で成長しました。1999年に最初のアルバムを出してから6枚のアルバムを出しています。アルゼンチン・タンゴとイディッシュ・タンゴを歌っています。この曲は3枚目のアルバム「Tango Y Luz」でリリースされたものを、後年RGSが標記CDに編集したものです。このCDの中では

01 Papirosen、02 Gedenk、11 Frilingはイデイッシュ・タンゴのスタンダード・ナンバーです。バックの演奏はOscar De Elia－ピアノとシンセサイザー、Erika Di Salvo－バイオリン、Domingo Diani－コントラバス、Ricardo Domínguez－ギターがつとめています。聴くたびに映画「戦場のピアニスト」に描かれたドイツ侵攻下のポーランドのシーンを思い起こし、今にも映画の中から煙草売りの子供が表れそうな錯覚に陥ります。

3. ハイレゾ音源を聴く

CD：M・A Recordings M062A Será Una Noche/La Segunda

演奏：Será Una Noche

最近ハイレゾ音源という言葉が聞かれますが、ハイレゾとはHigh Resolutionの略で、日本語に訳せば高解像度となり、ハイレゾ音源は高音質音源という意味で使われています。タンゴのハイレゾ音源を探しているうちに見つけたのがこのCDです。

1988年に日本で設立されたM・A Recordingsというレーベルのアルバムで、M・Aとはここでは人間の「間」、空間の「間」、音と音との「間」を意味します。独創性豊かなアコースティック音楽を、自然な音響空間で、たった2本の無指向性マイクを使ったハイサンプリング・デジタル録音で捉えることをポリシーとしたレーベルです。電子楽器や電氣的な増幅器は使わずに録音しています。タンゴ関連では3枚のCDをリリースしていますが、うち1枚が標記のアルバムです。2003年にブエノス・アイレス郊外にあるガンダラ修道院教会で、2本の無指向性マイクのみで録音されました。「Será Una Noche」という若手キンテートの演奏ですが、曲は古典曲を含む古いところをとりあげ、タンゴ伝統の音楽性を残しながら、新しいスタイルに挑戦しているのがうかがえます。このキンテートの2枚目のアルバムです。



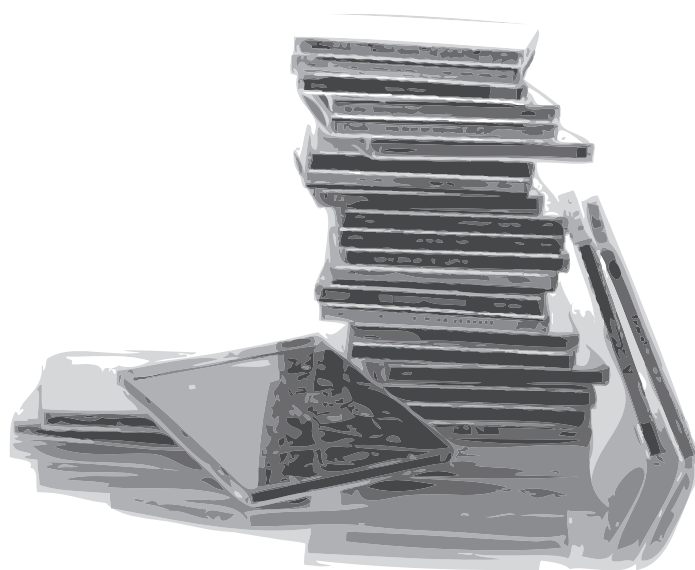
CDの曲は下記のとおりです。()内は歌手名

- | | |
|---|--|
| 01 El Choclo | 10 Nunca Tuvo Novio (Lidia Borda) |
| 02 Nocturna | 11 Malevaje |
| 03 Cuando Silba El Viento (Lidia Borda) | 12 Boedo |
| 04 Gricel (Lidia Borda) | 13 Arrabal Amargo (Edgardo Cardozo) /
Pedacito De Cielo |
| 05 Milonga Del Puerto | 14 La Roca |
| 06 Betinotti (Lidia Borda) | 15 El Tren De Quito (Lidia Borda) |
| 07 Vals | 16 Tinta Roja (Lidia Borda) |
| 08 El Porteño (Lidia Borda) | 17 Una Señal (Martín Iannaccone) |
| 09 Taquito Militar | |

キンテートは下記の編成です。

Gabriel Rivano-bandoneón Santiago Vázquez-percussion Marcelo Moguilevsky-clarinet
Edgardo Cardozo-guitar Martin Iannaccone-cello

このアルバムを普通のCD（普通のCDの規格は16bit/44.1kHz）とネット配信で入手したハイレゾ音源（16bit/176.4kHz）で聴いています。CDを聴いての第一印象は音が良いというものです。修道院教会と無指向性マイクとの組み合わせの妙味なのか、演奏全体に透明感の高い空気が感じられ、各楽器の存在感が高く、豊かな響きをもたらしています。Lidia Bordaの歌はシンプルながら声の美しさが伝わってきますが、特に06 Betinotti（milonga）は聴き応えがあります。03 Cuando Silba El Viento（habanera）はかつてシモーネが歌ったハバネラですが、このアルバムの一番の聴きどころでしょうか、Lidia Bordaの声が澄んだ空気の中を伸びてゆきます。ハイレゾ音源で聴くと音の解像度が増し、音の密度が上がったように感じられます。インストよりもLidia Bordaの歌のほうがハイレゾ音源の良さを引き立たせています。このCDはタンゴのオールド・ファン向けではないでしょうが、タンゴを知らない若い人たちには好まれるかわかりませんし、オーディオ・ファンには人気のアルバムです。



スエニョス楽団奮闘記

スエニョス楽団主宰 黒木皆夫（調布市）

気がついてみましたら、アルゼンチンタンゴを聴き始めて60余年が経過し、日本のタンゴ界の歴史とも重なっていて、目を閉じると数々のタンゴに関わる人々との出会いと別れ、そしていろいろな出来事が次々と浮かんできます。

昨夏、東京リンコン・デ・タンゴにてスエニョス楽団選抜のスエニョスタンゴトリオで演奏させていただく機会を得ました。その折に本誌編集部から、楽団の苦心談でも…との執筆依頼があり、軽にお引き受けしたものの、随想になり得ますかどうかいささか心もとないですが、私のタンゴ人生に彩りを与えてくれ、なくてはならない存在となったスエニョス楽団について振り返ってみるのも私自身の今後の指針に役立つのではと、この場をお借りして楽団について記してみたいと思います。

■アルゼンチンタンゴとの出会い

私は、1937年に生を受け、生まれも育ちも東京です。5歳年上の兄の影響でタンゴを聴き始めたのが中学生の頃でした。高校に入るや、兄を差し置き、古レコード探し・タンゴ喫茶めぐり・タンゴ愛好会入会と私のほうがタンゴ情報に通じるようになり、「中南米音楽」を楽器店で発見したり、神保町のタンゴ喫茶「ミロンガ」を見つけて得意げに教示したりと、兄を悔しがらせたものです。

その兄は病のため20代で早逝し、供養を兼ねて益々タンゴに熱中しました。以来60有余年、一時的に距離を置く時もありましたが、ほぼ生涯の趣味とっております。特に印象深いのは、1954年に亜国より初めて来日した本格的オルケスタ、ファン・カナロ楽団公演を感激のうちに日劇で観たことでしょうか。17歳の時でした。その後、幾多のオルケスタや歌手が来日し、ほとんどクリアーしているにも関わらず、ファン・カナロ楽団の演奏は、鮮明に覚えております。

■スエニョス楽団誕生秘話

私がこれほどアルゼンチンタンゴにのめり込んだのは、只々タンゴを聴くのが好きなだけで、これといった音楽の知識も楽才もないのに何故タンゴ楽団を結成し、25年に渡りバンドネオンを弾いているのか……。その要因は、大きく分けて3つあります。

まず第1にバンドネオンを購入したことです。1978年に湯沢修一氏が主宰する「すいよう会」の第1回目のブエノス・タンゴツアーに参加し、彼の地でカルロス・フィガリ楽団で修行中のすいよう会後輩でもある米山義則君の世話で、ラファエル・ロッシが使用していたと称するAA印のものを記念品として購入しました。文字通り記念品として飾って置くだけで、10年が過ぎてゆきました。

第2の要因は、プロのタンゴピアニスト鈴木和夫氏との運命的な出会いによります。50歳を過ぎたある夜、近所の馴染みのスナックのママから電話が入り、「鈴木さんというタンゴピアノを弾いてい

る方が、バンドネオンを持っている黒木さんをぜひ紹介して欲しいと言っているのので来て」との事。断る理由もないので、会いに行ったのが、そもそもの発端です。初対面から気が合って、話が弾み、弾けもしないのに楽器を持って彼の家へ遊びに行く約束をしてしまったのです。バンドネオンを持っては行ったものの、本当に弾けないことが判かって彼の落胆は気の毒なほどでした。挙句に彼が言うには「ピアノで協力するから、一緒に練習しましょう」との提案に乗ったのです。

それからの週末は彼の家で午後から夜までさんざんに絞られました。終われば反省会と称して居酒屋で今度は私がタンゴの講義をし、夜の更けるまで飲みあかして電車がなくなってしまったことも度々でした。

鈴木氏とのそんな練習を重ねた日々の中で「どうです。タンゴ楽団を作りませんか」「いいですね」と話が盛り上がり、タンゴ楽団を構築するべく、2人で手分けしてメンバーを集め、1987年に結成したのが、スエニョス楽団の前身のオルケスタ・マレアードスです。この楽団は、1年ちょっとで解散し、その後私は、蟹江丈夫氏が主宰しているロドリゲス楽団に参加し、しばらく鈴木氏とも距離を置いたのですが、どちらが言い出したのか、もう一度心の通いあう仲間と再出発しようと相談がまとまり、新たに1996年に再結成したのが、スエニョス楽団です。タンゴに夢を持ち寄る仲間達…夢を持つことは希望を連れてくる…そんな思いで私がスエニョスという名前を付けました。いつまでも夢を失わず、いつまでも夢を追いかけてゆく仲間達の思いが込められています。

結成時のメンバーは下記の7人です。すごく懐かしく感じます。

ピアノ	鈴木和夫		
バイオリン	五井勇夫	原 大	花輪健郎
バンドネオン	黒木皆夫	古橋順越	
コントラバス	伊勢谷益次郎		



初期のメンバー
初めてのCD録音後に新宿区
落合地域センターにて
1999年8月25日

譜面は、有名楽団のコピーですが、鈴木氏が若い頃、エキストラ演奏した楽団が使用していた各パートを、休憩時間を利用して手書きで写したものがほとんどで、とても苦労したと聞いております。

記念すべき初演は1996年10月、宝石デザイナーの田中武司氏の依頼により彼の所属協会の記念行事アトラクションとして京王プラザホテルで演奏しました。ゲスト歌手に山崎美恵子さんをお招きした本格的なライブです。私にとっては、バンドネオン奏者として初めての本格的な生演奏で、緊張の中にも、何とも晴れがましく佳い気分でした。結成当時はアマの楽団は皆無に近い状況でしたので、口

込みで業界団体の記念行事、政治家の激励会、医師会の集会等、結構な活躍の場があり、楽団にとってはいい時代でした。

初演の依頼人の田中氏とは毎日のように一緒に飲み歩き、タンゴ談義を交わした私の大親友です。10年前に肝臓癌を患い、彼のたつての希望により入院先の病院で、彼の好きなタンゴ曲「Plegaria 祈り」をはじめ10数曲を演奏した思い出も甦ります。田中氏は演奏日の2日後にやすらかに天に召されました。

そして長く続いた第3の要因は、1954年発足の「すいよう会」の専属楽団として月1回、定期的に演奏してきたことによります。湯沢氏主宰の「すいよう会」も平成の時代に入ると、レジャーの多様化と会員の高齢化等々で会員数が激減し、会の財政は、赤字の一途をたどっていたのです。湯沢氏も青色吐息で、誰かれなく当り散らし、余計に人心も散ってしまう悪循環で、ますます参加する人が少なくなった時期がスエニョス楽団結成の頃でした。

そこで、会の起死回生策として、スエニョス楽団の演奏で踊ってもらったらどうかと私が提案して受け入れてもらいPRしたところ、当時は今のようにタンゴの生演奏で踊る会など無かった頃ですので、第1回目は150名を越す参加者を得ることができました。湯沢氏は大興奮。早速、会報に「すいよう会に奇跡が起きました」と報じたのでした。以来、彼が70歳で突然脳溢血で亡くなるまで、スエニョス楽団は「すいよう会」にて定期的に毎月末に演奏を続けてきました。

現在のスエニョス楽団

湯沢氏没後10年になりますが、レココンは「TANGOすいよう会」として存続し、バイレの会は「TANGOスエニョス」として続いております。その間、楽団の杖とも柱とも頼っていたピアノの鈴木和夫氏が大腸癌のためにあっけなく世を去り、どうして良いのか誠に困惑致しましたが、六本木にあった「カンデラリア」で知己を得たタンゴピアノのベテラン島昭彦氏を担ぎ出すのに成功し、残されたメンバーで協力しながら、時にはバンドネオンの助人にこれ又ベテランの高谷照信氏にお願いしたりと、いろいろやりくりをして現在に至っており、毎月末の定期的な生演奏は専属楽団として「TANGOスエニョス」にてずっと続けています。その他にもご用命があればミロンガ等のイベントにても演奏しております



「花火を見る会」ゲスト出演
四谷地域センターにて 2008年8月

スエニョス楽団は、1996年の結成から今年で16年目を迎えます。これまで長く続けられたのは、我がスエニョス楽団の演奏で毎回踊りに来てくれている皆様や楽団メンバー及び会を支えるスタッフの協力があったからこそと深く感謝しております。今後は、素人で拙劣とはいえ私、黒木が主宰者である以上、私自身がかかってもっと頑張って参る所存です。

現在のスエニョス楽団は六重奏で、メンバーはプロ・アマ混成となっており、ピアノ1、バイオリン2、バンドネオン2、コントラバス1です。ピアノに島昭彦氏、バイオリンに村井正宏氏とプロを配していますが、私を含めて高齢化の波はいやおうなく訪れて耐用年数が残り少なくなりつつありま

す。継続してゆく上で大きな課題となっておりますが、何とか少しでも精度をあげるべく、日夜かなり燃えているのですが、年寄りの冷や水にならないように、技術面もさる事ながら、心のこもった演奏を第一に心がけ、レパートリーもプーロでトラディショナルな香りの濃い曲を選んで演奏してゆきたいと思っています。

生意気にも楽団演奏CDは、1999年、2000年、2007年、2011年とこれまで4枚製作しましたが、2年後位を目標に、スエニョス楽団集大成として自分たちの最高の演奏でベストアルバムが出せたら…と夢は膨らみます。

毎月最終水曜日は「TANGOスエニョス」のミロンガにてスエニョス楽団が生演奏します。ぜひ一度新宿区立四谷地域センター12階にお出かけ下さい。そして演奏終了後は、一献傾けながら、タンゴ談義でもいかがでしょうか。お待ちしております。



スエニョス楽団現在のメンバー
バンドネオンに高谷氏が助っ人で参加
マンゴホールにて
2009年7月20日

志を立てるのに

遅いという事は無い

カーライル



4枚目のCD録音後に
歌手のユリ・アスセナさんと
恵比寿NNスタジオにて
2011年11月27日

次は田原陽次郎さんにバトンを渡します。よろしく。



SAYACA のライブを聴いて

弓田 綾子



10月22日（月）、伝統とモダンの交差する街、新宿区神楽坂「The Glee」で、“LOS REFLEJOS DEL ALMA（魂のきらめき）”と銘打ったSayaca（当会会員）のライブがあった。

メンバーはSayaca (vo)、北村 聡 (bn)、青木菜穂子 (pf)、田中伸司 (cb)ら、今をときめく気鋭のグループである。

昨年末にオープンしたばかりの「The Glee」は、木の香りが漂うこじんまりと落ち着いたライブハウスである。広さからいって40人位が妥当かと思われたが、当日はなんと60人もの客で賑わい、Sayacaの歌に聴き入り、大喝采であった。

2部構成のプログラム中での主な曲は、「Sueño de juventud（青春の夢）」をはじめ、「Gricel（グリセール＝女性の名）」、「Milonga sentimental（感傷的なミロンガ）」、「Yo soy María（私はマリア）」、「Trenzas（三つ編み）」、「Nada（無）」、「Chiquilín de Bachín（バチンの少年）」、「Uno（人は）」などであり、Sayacaの歌唱は実に見事であった。

まず、従来と変わって声に重みが出てきたことと、相変らずながらスペイン語の発音が非常に素晴らしい。また、これが新しい時代の“Tango”かなと思わせる部分もあった。それはアンコール曲の「Uno」

の歌を聴いた時だった。力強く歌い上げる声にポップス系の歌唱法を感じたのである。

さらに多くのファンを惹きつけるには、是非古典ものやポピュラーな曲も入れると、さらなる厚みが出てよいと思う。数年間におよぶ本場仕込みの成果を、この上ともに発揮して欲しい。

なお、この後の11月4日（日）の午後、Sayacaは宮本政樹氏の主宰する「ノチェーロ・ソイ」にピアノの青木菜穂子と共にゲスト出演をした。場所は四谷の「シン・ルンボ」。70名余の参加者を前に、「Milonga de la anunciación（受胎告知）」などを熱唱、発音はもちろんだが声に一段とハリがあって感動を誘った。

コンサート後に語っていたSayacaの言葉がなぜか耳に残った。

“私が全身で歌う心が皆さんに伝わるように、これからも歌い続けたい”と……。

あくなき挑戦で飛躍を祈っている。



(2012.11.5 記)

美しい音の格闘技 Pablo Ziegler Meets Tokyo Jazz Tango Ensemble を聴いて

大澤 寛

2012年11月21日有楽町マリオン11階の朝日ホールでこの演奏会が行われた。のっけから余談だが、マリオンが建っているのは旧日劇があったところ。ここに来るたびに、私を含めて「日劇ミュージックホール」の昭和を懐かしむ世代も多いのではないだろうか。

短い休憩を挟んでの2部構成の全14曲。そしてアンコールはFuga y misterio。曲目は以下の通り。
*印がピアソラ作品。他はすべてPablo Ziegler の自作。

(第1部)

1. Once again, , , Milonga
2. Asfalto
3. Blues porteño
4. El empedrado
5. *Chinchín
6. Bajo cero
7. La conexión porteña

(第2部)

1. Milonga del Adiós
2. Elegante canyenguito
3. Desde otros tiempos
4. Milongueta
5. *Michelángelo 70
6. La rayuela
7. *Libertango

ピアソラより前衛的かと思わせる自作が11曲。アンコールのFuga y misterioを加えてピアソラ作品が4曲。ジャズとタンゴのフュージョンというかクロスオーバーなのだが躍動感には完全にジャズの世界のものだろう。舞台演奏からは美しい音の格闘技を見る思いがした。共演者たちが素晴らしい。それぞれの楽器の文句なしにトップレベルの技量の若手奏者が脂の乗り切った腕を聴かせる。Pablo Ziegler の日本での活動に殆んど付き合うバンドネオンの北村聡、ジャズを語ってこの人の名を知らぬものはないギターの鬼怒無月、そしてジャズとタンゴの二つの世界でしっかりと自分の音を聴かせる西嶋徹。このメンバーは第1部からノリまくっていた。中でもChinchín は聴きごたえ抜群。其々の楽器をフィーチャーしながら曲全体としての統一感にあふれるもの。

第2部の立ち上がりの2曲はPablo Ziegler との dúo が続く。冒頭のMilonga del adiós では2部から初めて加わった紅一点フルートの赤木りえ、次いでElegante canyenguito では鬼怒無月がそれぞれ鮮やかなプレーで聴かせる。3曲目の Desde otros tiempos は日本では今回が初演というもの。赤木りえのフルートは特別の味を出していた。クラシックなどに使われる普通のフルートより長く見えたが、空気の入る空間が多いのだろうか。アンデスの民俗楽器サンポーニャを思わせる奏法で、この舞台の5番目の楽器として見事なアンサンブルを構成していた。お終いの2曲が馴染みのある La rayuela と Libertango で文字通りあっという間に時間が過ぎた。



(© 菊地昇)「写真提供：ラティーナ」

(2012年11月22日記)

原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド・エン・ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド・エン・ハポン」の次号の締め切りは5月末日、「タンゴランディア」は3月末日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。掲載にあたっては執筆者の文章を（スペイン語のカタカナ表記も含めて）全面的に尊重しています。また当会機関誌は会員全員の参加による同人誌的性格を持っていますので執筆者には特に原稿料というものはお支払いしていません。

編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第31号をお届けします。2012年は高山正彦氏没後35年に当たるので、氏が我が国のタンゴ界に残された業績を振り返る意味で本号はその記念特集号といたしました。吉村俊司氏の「1970年代タンゴ探訪」と故蟹江丈夫氏の「日本のタンゴ楽団」は今回が最終回となりました。長い間のご愛読を有難うございました。前号で予告した大澤 寛氏による「カルロス・ガルデル」の伝記の翻訳は原資料の選択に時間がかかったために32号からとさせていただきます。また本誌1号から30号までの索引を作成しましたので、本号と共にお届けしました。ご活用ください。

（齋藤 富士郎）

日本タンゴ・アカデミー主機関誌 **TANGUEANDO EN JAPÓN**

第31号 2013年1月発行（非売品）

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤 2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤 富士郎（編集長）

〒195-0072 東京都町田市金井 6-17-2

TEL/FAX 042-736-7445 f-saito@mjq.biglobe.ne.jp

島崎 長次郎、大澤 寛、弓田 綾子、佐藤 進、西川 薫



דה